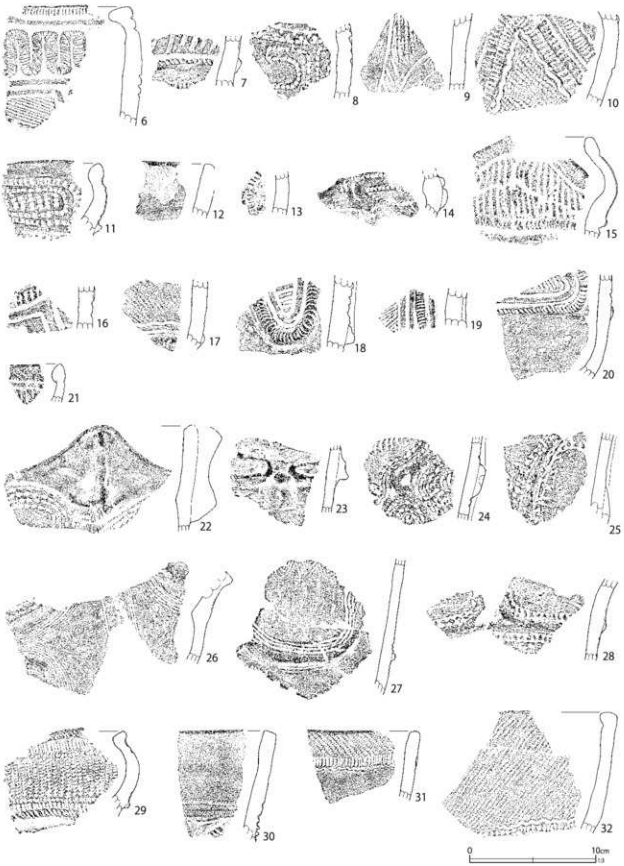
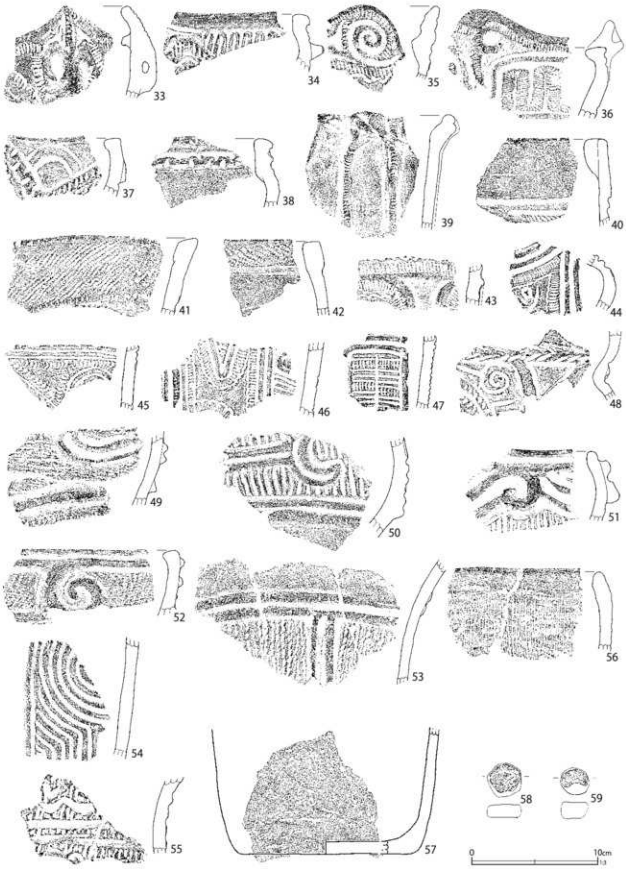
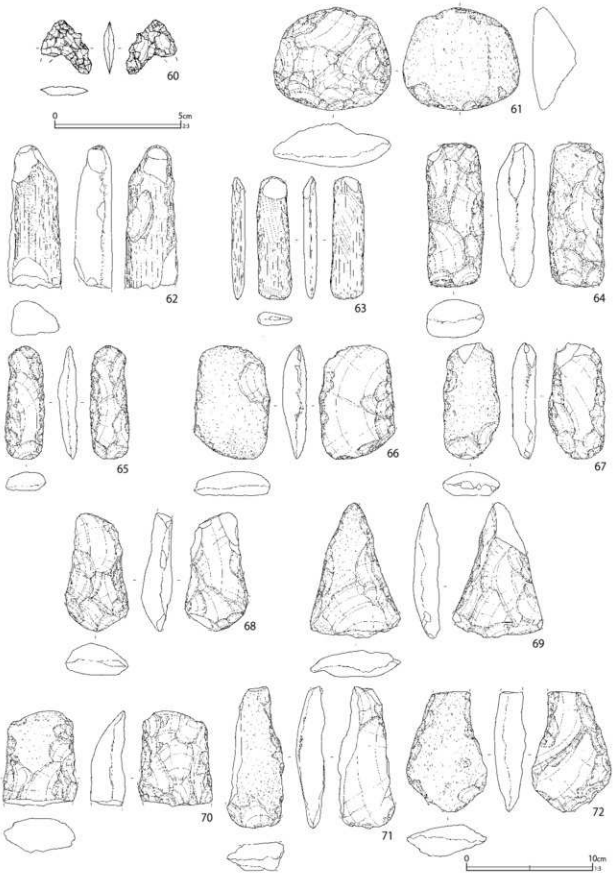


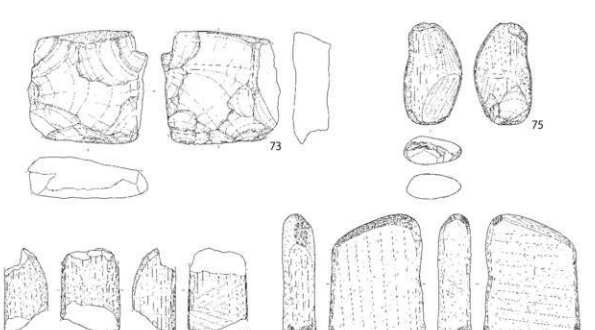
第216図　第29号住居跡出土遺物（2）



第217図　第29号住居跡出土遺物（3）



第218図　第29号住居跡出土遺物（4）



第219図　第29号住居跡出土遺物（5）

第91表　第29号住居跡出土石器観察表（第218・219図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
218 － 60	石鏃	Ⅰ2②	黒曜石	2.1	[2.0]	0.4	0.9	
61	スクレイパー	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	8.1	9.3	3.5	266.0	
62	磨製石斧	Ⅴ②イ	緑色岩	[11.3]	4.2	3.0	222.7	
63	磨製石斧	Ⅳ②イ	砂岩	[9.7]	2.7	1.1	42.2	
64	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[11.4]	4.5	3.0	211.0	
65	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	8.9	3.1	1.5	51.1	
66	打製石斧	Ⅱ2①ア	砂岩	9.0	[6.0]	1.9	127.6	
67	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[9.2]	4.5	1.9	102.3	
68	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.3]	[4.9]	2.5	111.7	
69	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[10.7]	[7.1]	2.1	133.4	
70	打製石斧	Ⅴ②ア	ホルンフェルス	[7.5]	5.9	2.7	152.7	
71	打製石斧	Ⅴ②ア	ホルンフェルス	[11.2]	[4.5]	2.3	119.6	
72	打製石斧	Ⅲ1②ア	ホルンフェルス	[9.6]	6.3	2.5	138.5	
219 － 73	纏器	Ⅱ1②ア	ホルンフェルス	9.0	[9.5]	3.3	398.9	
74	敲石	Ⅳ1-3①イ	砂岩	8.1	4.5	2.2	105.6	
75	磨石	Ⅲ1②イ	安山岩	[6.9]	4.7	3.4	156.9	
76	砥石	Ⅰ①イ	砂岩	10.8	7.6	2.6	384.2	

内式並行と思われ、44～47は藤内式の新しい段階に並行しよう。34、35、39～42、48は勝坂式新段階の土器群で、37、38は終末段階の土器群と思われる。

49～53、55は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢形土器で、口縁部に隆帯の渦巻文を施文し、胴部に懸垂文を垂下する土器である。49は加曽利ＥⅠ式前半段階、50、51、53はＥⅠ式後半段階、52はＥⅡ式に比定されよう。55は地文撚糸文上に太沈線の小波状文を多段に施文するもので、加曽利ＥⅠ式に比定される。

54は胴部に重円文か渦巻文を施文する加曽利

ＥⅠ式後半段階に並行する曽利式系の土器である。

56は地文条線文を施文する深鉢形土器である。加曽利ＥⅢ式であろうか。

土製品では、58、59の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器類は60～76が出土した。

60は石鏃で、正面左脚部を欠いている。

61は粗粒の石材を用いたスクレイパーである。

62、63は磨製石斧である。62は製作途中で刃部が欠損し、廃棄されたと思われる。63は両側面に製作時のものと思われる敲打痕が認められる。

64～72は打製石斧である。64～67は短冊形を呈する。66を除いて、全て両刃である。68、69、71、72は撥形を呈し、72が片刃で、その他が両刃である。

73は礫器である。

74が自然礫を用いた敲石で、上下両端に敲打痕が認められる。

75は磨石である。

76は研ぎ面が不明瞭な砥石である。

第31・75号住居跡（第220図～第229図）

第31号住居跡はＰ－12区に位置する。南西側で第75号住居跡と重複するが、本住居跡の方が新しい。

平面形は径4.92mの不整円形を呈する。床面までの掘り込みは45cmと比較的深く、壁は緩やかに立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は20基検出されたが、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものはＰ１～９の９基で、中でもＰ１、２、４、６、８の５基が最終段階の主柱穴と思われる。さらにこれらの柱穴と重複するＰ３、５、７、９の４基と、Ｐ１が移動せずに再利用されたか、Ｐ１とは重複しないが隣接するP10を合わせた５基が、古段階の住居跡の主柱穴になるものと思われる。

なお、Ｐ10、11、17、20は深い掘り込みを有するが、住居跡の壁を掘り込んでいることから本住居跡に伴わない可能性もある。特に、17、20は別遺構であろう。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝51cm、Ｐ２＝62cm、Ｐ３＝42cm、Ｐ４＝62cm、Ｐ５＝39cm、Ｐ６＝52cm、Ｐ７＝40cm、Ｐ８＝70cm、Ｐ９＝47cmである。

炉跡は中央部やや北西寄りに２基検出された。北側の炉１が南側の炉２を壊して作られていることから、炉１の方が新しい。いずれも床面から20cm程の掘り込みを有する地床炉である。

埋甕は検出されなかった。

炉の直上やその周辺から、器形復元される土器が数個体出土している。吹上パターンと思われる。

住居跡の時期は出土遺物から、勝坂式中～新期段階の所産と思われる。

第75号住居跡はＰ－12区に位置する。東側で第31号住居跡と３分の１程が重複するが、本住居跡の方が古い。また、南西側の壁の一部が第40号住居跡の炉跡によって壊されている。平面形はおよそ径2.2m程の円形を呈するものと思われる。深さは約24cmと浅い。

壁溝は検出されなかった。柱穴は６基検出された。いずれも浅いが、配置から主柱穴と思われるものはＰ21・22・24・25の４基で、第31号住居跡によって壊されたものを考慮すれば、５本柱の可能性もある。主柱穴の深さは、Ｐ21＝18cm、Ｐ22＝16cm、Ｐ24＝34cm、Ｐ25＝31cmである。

炉跡・埋甕は検出されていない。住居跡中央部付近の第31号住居跡との重複際に、完形土器1個体が出土した。

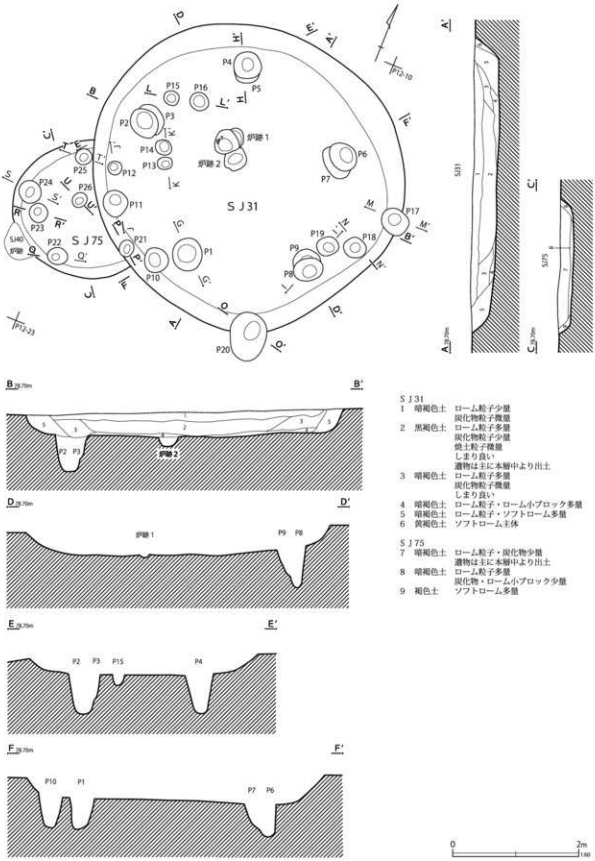
住居跡としての付属施設がないため、本遺構は小竪穴状遺構の可能性もある。

住居跡の時期は、勝坂式期新段階の所産と思われる。

第31号住居跡出土遺物（第223図１～第228図53）

土器類は1～35が出土した。

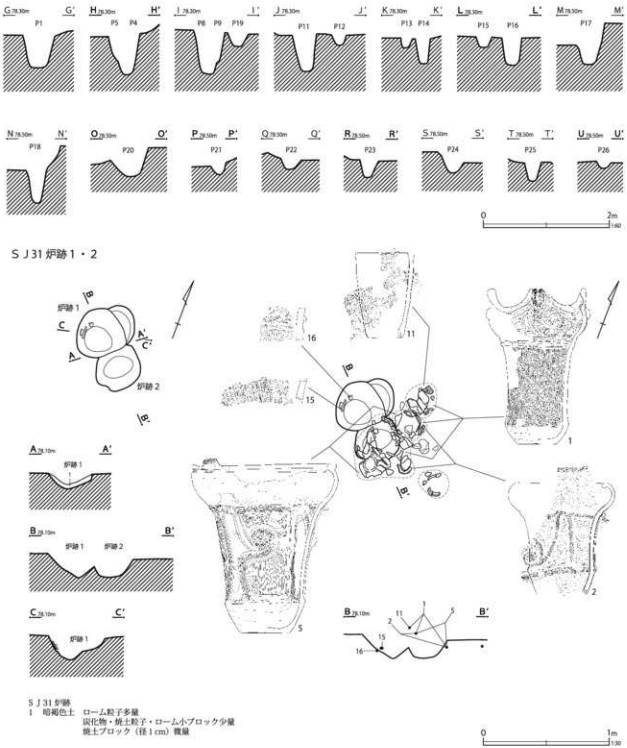
１は内湾する４単位の波状口縁が開き、頸部



SJ31
1 暗褐色土 ローム粒子少量
炭化物粒子微量
2 黒褐色土 ローム粒子多量
炭化物粒子少量
焼土粒子微量
しまり良い
遺物は主に本層中より出土
3 暗褐色土 ローム粒子多量
炭化物粒子微量
しまり良い
4 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量
5 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
6 黄褐色土 ソフトローム主体

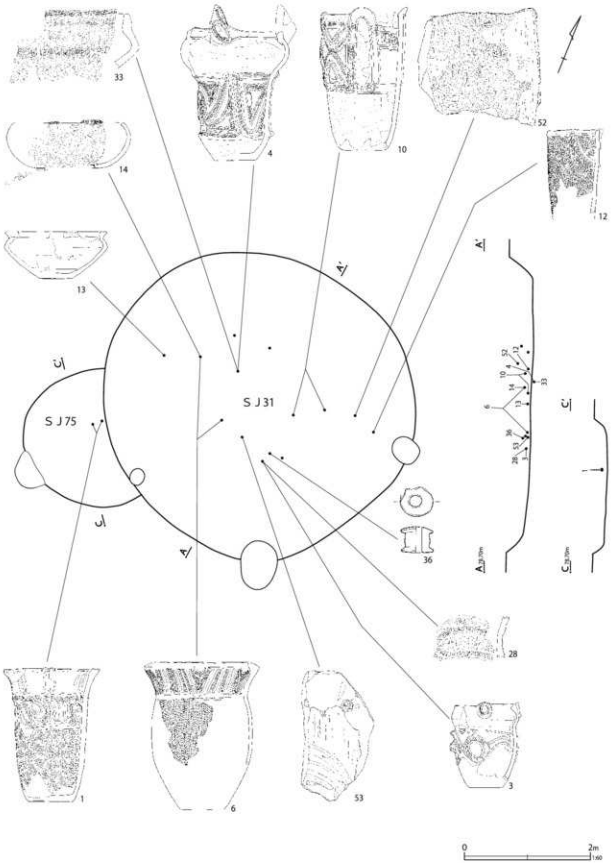
SJ75
7 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
遺物は主に本層中より出土
8 暗褐色土 ローム粒子多量
炭化物・ローム小ブロック少量
9 褐色土 ソフトローム多量

第220図　第31・75号住居跡（1）



第221図　第31・75号住居跡（２）

で括れ、細い筒状の胴部を経て、小さく張り出した底部へと移行する器形を呈する。口縁部の波頂下には上向きに口を開けた蛇状の意匠文を隆帯で表現し、背割れした隆帯の先端が渦を巻いている。この隆帯には交互刺突を施している。モチーフ間の余白には、沈線の楕円区画を囲んで上下に対向する三叉文や、渦巻文を充填施文する。胴部の地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。



第222図　第31・75号住居跡遺物出土状況

第92表　第31・75号住居跡柱穴計測表（第220・221図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	51.0	51.0	P 2	50.0	62.0	P 3	50.0	42.0	P 4	44.0	62.0	P 5	39.0	39.0
P 6	48.0	52.0	P 7	55.0	40.0	P 8	47.0	70.0	P 9	44.0	47.0	P10	38.0	57.0
P11	41.0	60.0	P12	22.0	16.0	P13	24.0	15.0	P14	27.0	40.0	P15	25.0	17.0
P16	31.0	42.0	P17	45.0	31.0	P18	36.0	57.0	P19	35.0	22.0	P20	77.0	26.0
P21	26.0	18.0	P22	32.0	16.0	P23	29.0	29.0	P24	36.0	16.0	P25	25.0	31.0
P26	26.0	12.0												

２～５は内湾する口縁部が開くキャリパー形の器形で、口縁部を無文として把手の付く土器群である。２は胴部の上下端の区画と胴部の渦巻きモチーフを刻み隆帯で施文し、余白に三叉文を充填施文する。把手の有無は不明である。

３は口縁部に円形貼付文を施文し、この貼付文のやや右隣に把手が剥落した痕跡がある。胴部には円形区画文化した渦巻文を、横位波状隆帯で連結するモチーフを施文する。

４は口縁部に大きな耳状把手を付け、胴部に３と同様な円形区画文化した渦巻文を横位連結するモチーフを展開する。施文の刻み隆帯脇には沈線と蓮華文が沿う。

５は口唇部上に押引刺突文を施す台形状の突起を施文し、幅広の胴部文様帯に刻み隆帯で「O」「D」「K」字状の区画文を構成し、区画内に集合沈線や爪形文を沿わせる三叉文等を施文する。

６は外反する口縁部に太沈線の並行沈線を鋸歯状に施文し、「V」字状区画内には三叉文を施文する。並行沈線や三叉文に沿って爪形文状の短沈線を施文している。胴部地文は撚糸文Lである。

７は無文の口縁部に、円窓の空く大形把手を有する深鉢である。

８、９は小形の樽形の深鉢で、８は垂下する沈線文で胴部を縦位区画し、口縁部に２本沈線の弧線文を施文する。その下部のモチーフは不明であるが、対弧状のモチーフや三叉文等を施文するようである。９は幅広の口縁部を無文とし、胴部に並行沈線による崩れた弧線文や楕円状モチーフを施文する。並行沈線には交互刺突文を施す。

10は円筒形の器形で、逆「U」字状隆帯を２箇所と縦位隆帯２本で胴部を縦位４分割し、「X」字状の対弧文と横位楕円区画文を対称的に配置する文様構成をとる。隆帯では縁への刻みや、交互刻みを施している。区画内には集合沈線文や上下差し切り文、三叉文等を施文する。

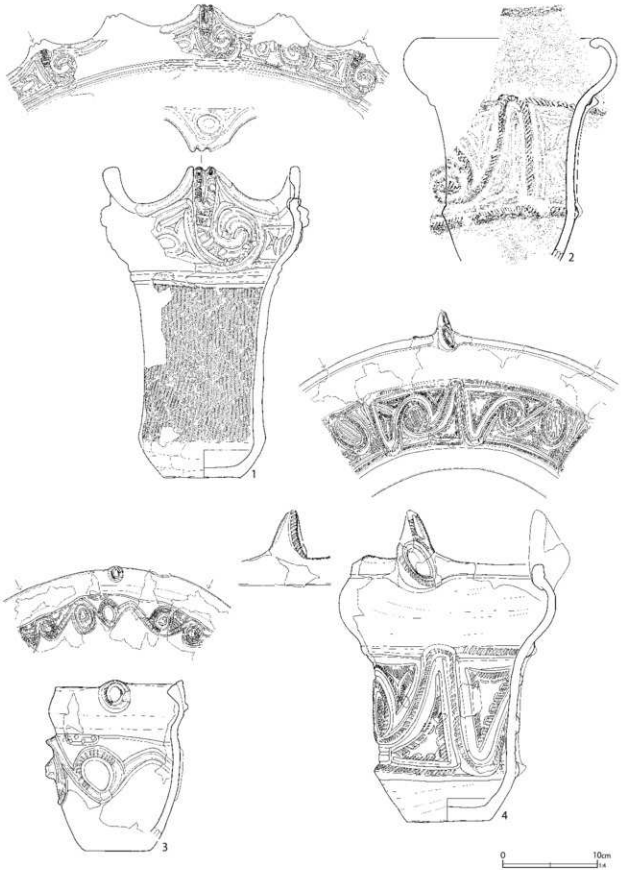
11、12は円筒形土器である。11は胴部に施文方向を変えて表現した縦位羽状縄文を施文する。12は胴部の縦走縄文地文上に、垂下する長短２本の「J」字状隆帯で縦位２分割し、連弧のモチーフと、そこから垂下し相互に逆巻きする沈線渦巻文を施文している。連弧モチーフと垂下する渦巻文は、片方を２本沈線で施文し、もう一方を単沈線で施文する。長短の「J」字状隆帯や同じモチーフの描線数を変えるなど、対称性を崩している。

13、14は浅鉢で、13は胴部が「く」字状に屈曲する。

破片では、15、16は炉内から出土している。

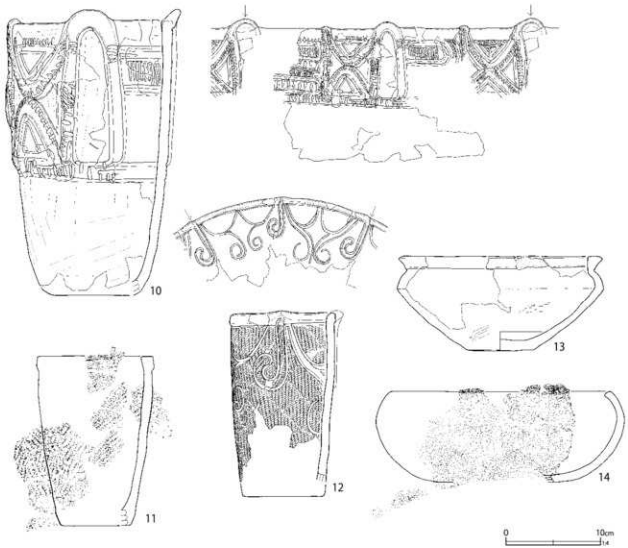
17～30は勝坂式土器でおよそ新段階の土器群である。17、18、24は内湾する口縁部文様帯を有する土器で、刻み隆帯と沈線でモチーフを描いている。21は内湾する無文の口縁部を有し、22は幅狭な口縁部文様帯に横位沈線を施文している。13は直線的に外反する口縁部に爪形文で上下差し切りのモチーフを描く。

19は波状口縁で、20は口唇部内端が突出し、地文に撚糸文を施文する。27は口縁部に連鎖状隆帯を垂下して縦位区画し、隆帯縁に細かな刻みと押圧状の刻みを施す隆帯で円形モチーフを描くものと思われる。25、26、28、29は刻み隆帯で区画文を描き、隆帯脇に沈線を施文して、区画内に集合沈線を充填施文するものである。



第223図　第31号住居跡出土遺物（1）

第224図　第31号住居跡出土遺物（2）



第225図　第31号住居跡出土遺物（3）

第93表　第31号住居跡出土復元土器観察表

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
223-1	[34.0]	(20.8)	－	8.4	70%
2	[23.4]	18.4	－	－	30%
3	[16.8]	(12.8)	－	－	70%
4	33.0	(20.0)	－	8.8	80%
224-5	[37.2]	(30.8)	－	10.2	80%
6	[21.0]	20.0	－	－	40%
7	[7.8]	(17.2)	－	－	20%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
224-8	[16.0]	10.4	－	－	50%
9	13.2	(10.4)	－	5.6	50%
225-10	[30.0]	(25.2)	－	(8.8)	60%
11	18.0	12.2	－	7.4	30%
12	[18.0]	10.6	－	－	80%
13	[10.0]	(21.5)	－	7.0	70%
14	[9.6]	(32.3)	－	－	20%

30は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する胴部破片である。

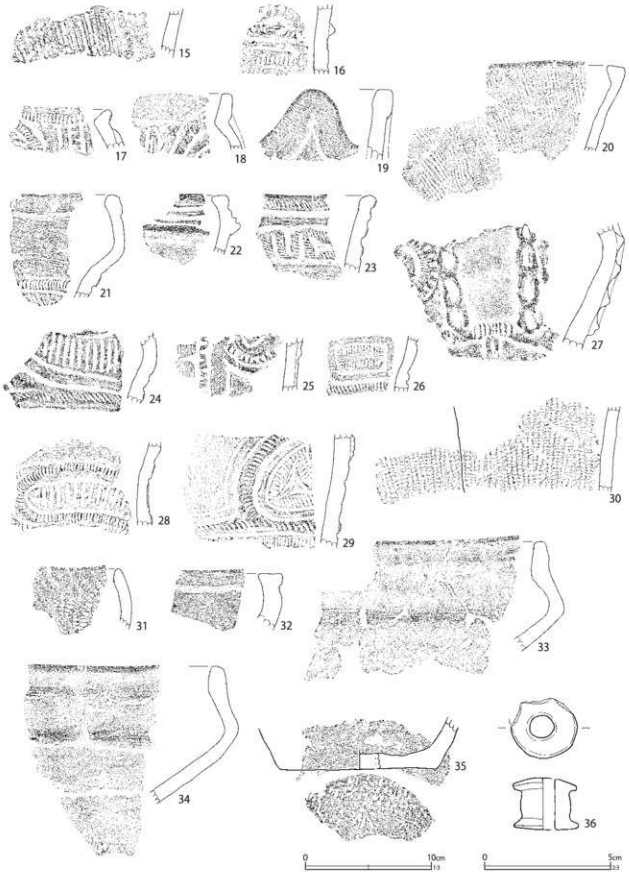
31は加曽利ＥⅢ式土器の口縁部破片である。口縁部に横位１段のＲＬ縄文を施文し、胴部の逆「U」字状磨消懸垂文間に縦位のＲＬ縄文を施文する。

32～34は浅鉢で、33、34は胴部が「く」字状に屈曲する。35は底部に網代痕が残る。

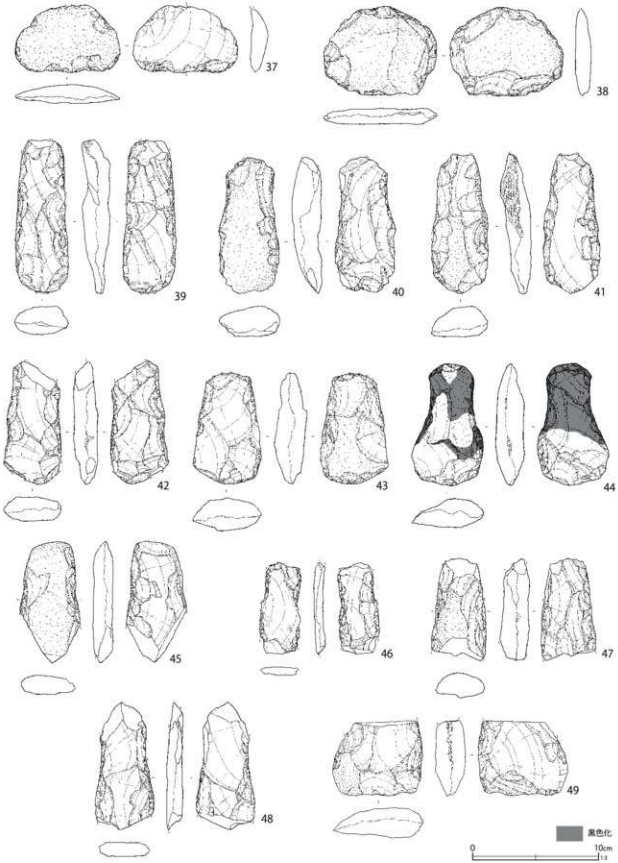
土製品は、36の耳飾りが出土した。一部を欠損するが、ほぼ完形で、鼓形を呈する。

石器類は37～53が出土した。

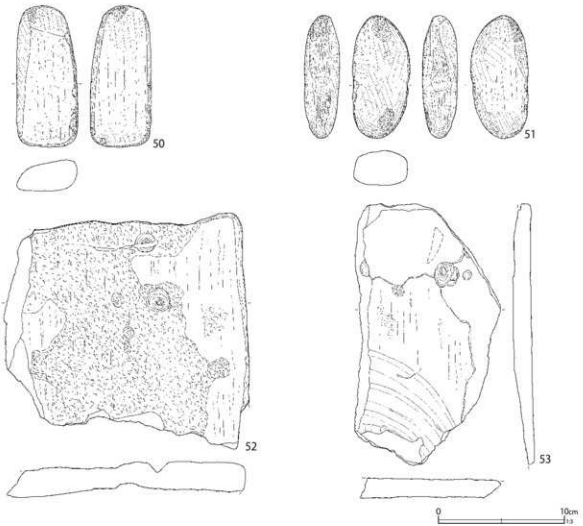
37、38は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。37は裏面に主要剥離面を残す。



第226図　第31号住居跡出土遺物（4）



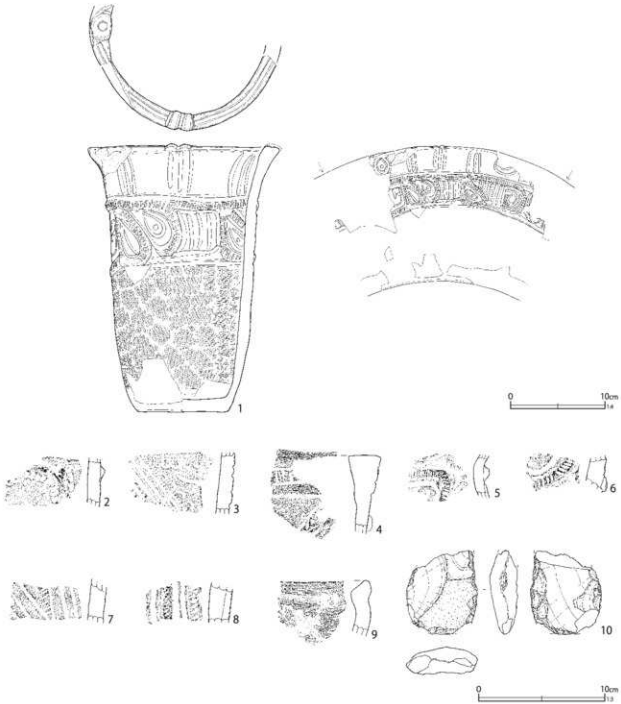
第227図　第31号住居跡出土遺物（5）



第228図　第31号住居跡出土遺物（6）

第94表　第31号住居跡出土石器観察表（第227・228図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
227 － 37	スクレイパー	Ⅱ1①ア	ホルンフェルス	5.3	8.3	1.4	73.4	
38	スクレイパー	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	7.1	9.0	1.3	125.0	
39	打製石斧	Ⅱ2②ア	ホルンフェルス	[12.2]	4.2	2.3	101.6	表裏面全部黒色化
40	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[10.8]	4.8	2.4	146.2	
41	打製石斧	Ⅲ2②ア	砂岩	[11.1]	4.5	2.4	119.4	
42	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[9.8]	4.6	2.0	101.4	
43	打製石斧	Ⅲ2①ア	ホルンフェルス	[8.8]	5.5	2.7	119.4	
44	打製石斧	Ⅲ1①ア	ホルンフェルス	9.6	5.7	2.3	121.9	表裏面一部黒色化
45	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.6]	[4.8]	1.6	81.1	
46	打製石斧	Ⅱ2②ア	結晶片岩	[7.3]	3.3	0.9	26.3	
47	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[8.1]	4.4	[2.4]	94.6	
48	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[10.1]	4.7	1.3	78.4	
49	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[5.9]	7.1	2.4	131.3	
228 － 50	磨石	Ⅱ1①イ	砂岩	11.3	4.8	2.7	212.1	
51	磨石	Ⅱ1-3①イ		9.7	4.6	2.8	203.7	
52	石皿	Ⅳ②ア	緑泥片岩	[20.7]	[11.7]	[1.8]	533.7	
53	石皿	Ⅲ2②イ	緑泥片岩	[18.8]	[19.5]	[3.2]	1334.4	



第229図　第75号住居跡出土遺物

第95表　第75号住居跡出土復元土器観察表（第229図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
229-1	28.4	20.2	-	9.4	70%

第96表　第75号住居跡出土石器観察表（第229図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
229 － 10	打製石斧	V②ア	砂岩	[6.6]	5.6	2.2	91.9	

39～49は打製石斧である。39～45は撥形を呈する。基部片である45を除き、40が片刃、その他は両刃である。46～48は短冊形を呈し、いずれも刃部を欠く。49は両刃の刃部片である。

50、51は磨石である。51は両側面に凹痕を有する。

52、53は石皿の破片で、正面に凹痕を有する。52は皿部の一部も残存しており、摩耗が著しい。

第75号住居跡出土遺物（第229図１～10）

土器類は1～９が出土した。

１は口縁部が開く円筒形土器で、口唇部に円形貼付文と箱状貼付文を交互の４単位に施文し、口唇上の沈線で貼付文を連結している。口縁部文様帯は口唇上の貼付文を基準にして、その下部に円形文２単位、３本の垂下沈線を６組の合計８単位の文様を施文しているものと思われる。頸部には刻み隆帯で半円状の区画文を施し、区画文内に渦巻文、三叉文、集合沈線文を施文する。

破片では、２は角押文を施文する勝坂式古段階の土器で、３は並行沈線脇に蓮華文を施文する勝坂式中段階から新段階にかけての土器である。４～８は勝坂式新段階の土器群と思われる。

９は深鉢の無文の口縁部と思われる。

石器は10が出土した。打製石斧の刃部片で、両刃である。

第32号住居跡（第230図～第234図）

O・P－12区に位置する。炉跡の北側で第88号集石土壙と重複する。第88号集石土壙の方が新しく、掘り込みは床面まで達している。住居跡は一辺6.09m程の不整方形を呈し、検出面からの深さは0.3mとやや浅い。

壁溝は２本検出された。外側の壁溝１は壁直下を全周するもので、本住居跡の最終段階のものと思われる。内側の壁溝２は壁溝１とは重複せず、70cm程内側を同じ形状で巡っている。柱穴は31基検出されたが、重複状況、深さ及び配置から壁溝1に伴うと思われる主柱穴は、P７、８、１、３、５、６の６本で、内側の壁溝２を壊して掘られている。内側の壁溝２に伴う主柱穴は、深さや重複からP２、４及びP10が該当すると思われ、P17、28も候補となろう。

主柱穴の深さは、P１＝61cm、P２＝52cm、P３＝63cm、P４＝45cm、P５＝56cm、P６＝54cm、P７＝58cm、P８＝56cm、P10＝53cmである。

炉跡は中央北西寄りに検出された。６個の細長い礫を方形に並べた石囲炉で、西側の一部を欠いている。下部に深さ15cm程の掘り込みを有し、炉床面は被熱のための焼土化が顕著である。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は出土土器から、加曽利ＥⅠ式後半期の所産と思われる。

遺物は第232図１～第234図42の土器類、石器類が出土した。

土器は1～33である。１は大形破片からの復元であるが、口縁部が内湾して開く加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢形土器で、口縁部文様帯には２本隆帯で渦巻文や剣先文等を施文し、地文に撚糸文Ｌを施文する。頸部は無文帯となり、胴部に２本隆帯の渦巻文や長方形状の区画文を施文する。

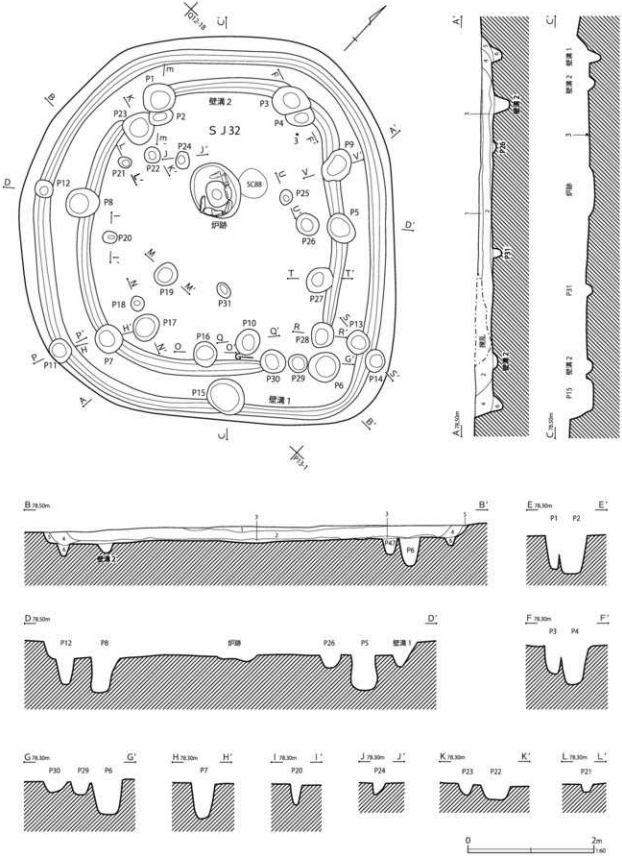
２は胴部から底部が現存するもので、地文に撚糸文Ｌを施文する。

３、４は台形土器で、台上部を現存し、脚部が３は窄まり、４は開く形状である。

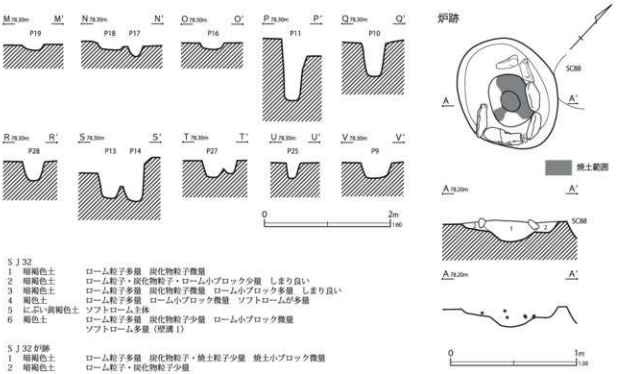
破片は５～33が出土しており、大半が加曽利Ｅ式土器である。

５～11は炉内から、12、13はP１、14はP３、15、16はP５、17、18はP６、19はP８からの出土である。

20～23はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、２本隆帯の渦巻文を施文する。いずれも地文は撚糸文である。24、25は波状口縁の波頂部で、把手表裏面に沈線の渦巻文を施文する。26は胴部破片で、１と同一個体の可能性がある。28は撚



第230図　第32号住居跡（1）



第231図　第32号住居跡（２）

第97表　第32号住居跡柱穴計測表（第230・231図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	51.0	61.0	P 2	39.0	52.0	P 3	58.0	63.0	P 4	44.0	45.0	P 5	49.0	56.0
P 6	51.0	54.0	P 7	44.0	58.0	P 8	53.0	56.0	P 9	56.0	26.0	P 10	42.0	53.0
P 11	39.0	97.0	P 12	29.0	41.0	P 13	36.0	41.0	P 14	37.0	59.0	P 15	63.0	12.0
P 16	42.0	10.0	P 17	45.0	13.0	P 18	24.0	17.0	P 19	39.0	9.0	P 20	23.0	34.0
P 21	21.0	13.0	P 22	25.0	19.0	P 23	(43.0)	24.0	P 24	27.0	18.0	P 25	23.0	25.0
P 26	38.0	21.0	P 27	42.0	26.0	P 28	39.0	31.0	P 29	39.0	22.0	P 30	39.0	17.0
P 31	27.0	13.0												

糸文Ｌ地文上に、隆帯懸垂文を垂下する胴部破片である。29は磨消懸垂文を施文する加曽利ＥⅢ式土器の胴部破片である。

27は頸部に蛇行隆帯文を施文する曽利式系の土器である。

30、31は胴部が「コ」字状を呈する浅鉢で、30は沈線の渦巻文を施文する。31は無文の浅鉢である。

32は撚糸文Ｌを施文する底部、33は撚糸文Ｌ地文上に隆帯懸垂文が垂下する底部である。

土製品としては、34はミニチュア土器である。口縁部が外折する筒形の鉢状を呈し、胴部に沈線の渦巻文を施文する。

35、36は土器片を利用した土製円盤である。

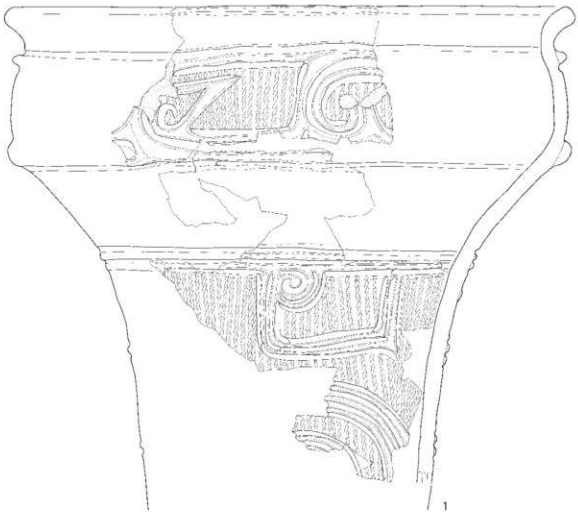
石器類は37～42が出土した。

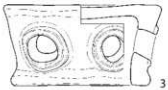
37、38は打製石斧である。37が短冊形を、38が分銅形を呈し、刃部はともに両刃である。37は、正面左側面が被熱により発泡している。

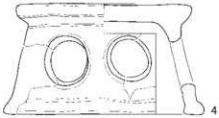
39は礫器である。

40、41が磨石で、40は被熱の影響により、正面及び裏面の一部が赤色化している。

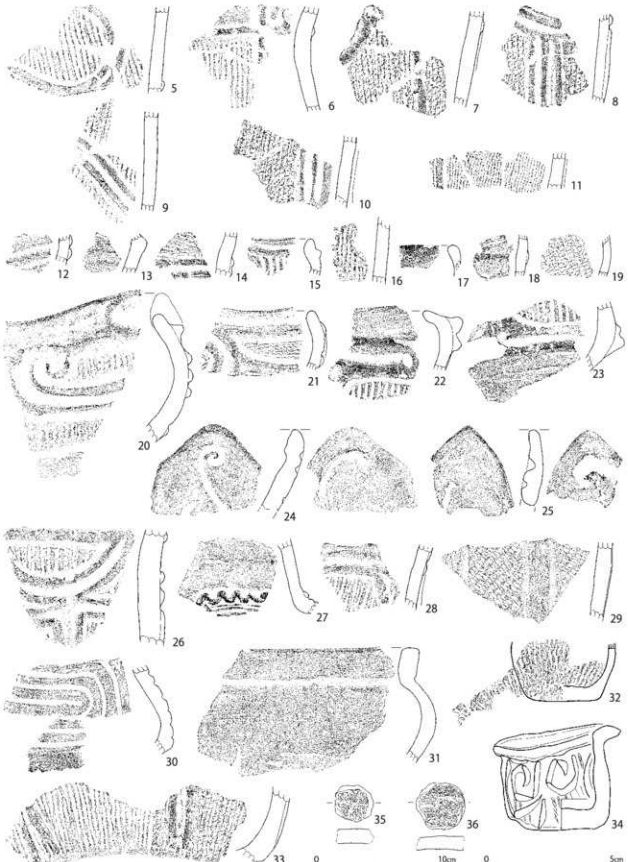
42は石皿の破片で、凹痕を有する。



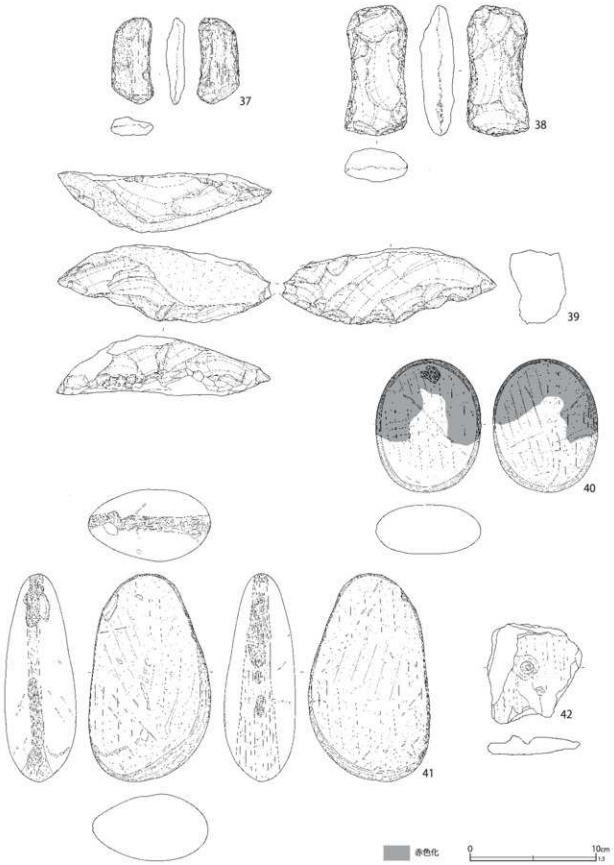




第232図　第32号住居跡出土遺物（1）



第233図　第32号住居跡出土遺物（2）



第234図　第32号住居跡出土遺物（3）

第98表　第32号住居跡出土復元土器観察表（第232図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
232-1	(50.6)	(60.0)	－	－	40%
2	[8.0]	－	10.8	8.6	30%
232-3	8.5	－	16.2	14.4	完形
4	11.7	－	18.4	21.1	50%

第99表　第32号住居跡出土石器観察表（第234図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
234 － 37	打製石斧	Ⅱ2①ア	頁岩	6.9	3.3	1.5	41.3	
38	打製石斧	Ⅲ2①ア	砂岩	10.4	5.0	2.7	178.3	
39	礫器	①ア	ホルンフェルス	6.1	17.0	4.7	483.9	
40	磨石	Ⅱ1-3①ア	砂岩	10.6	8.3	4.0	526.4	表裏面一部赤色化
41	磨石	Ⅱ1-3①イ	砂岩	16.5	9.7	5.7	1200.2	
42	石皿	Ⅳ②ア	緑泥片岩	[8.0]	[7.5]	[2.1]	125.6	

第33号住居跡（第235図～第251図）

N・O－11・12区に位置する。平面形は長径5.6m、短径5.0m程の北西方向に長い不整長方形を呈する。深さは0.3m程で、壁は緩やかに立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は23基検出されたが、深さや配置等から主柱穴はP１～10の10基であると思われ、P１～６の内の５本柱もしくは６本柱が本住居跡の最終段階の主柱と思われる。なお、P７～10については配置が明瞭でないが、深い掘り込みを有することから、P３・４などが共有されていた可能性もあろう。

主柱穴の深さは、P１＝60cm、P２＝70cm、P３＝75cm、P４＝65cm、P５＝70cm、P６＝68cm、P７＝53cm、P８＝73cm、P９＝60cm、P10＝46cmである。

炉跡は住居跡中央やや北西寄りに検出された。56cm×53cmの掘り込みに土器の上半部を正位に埋設した埋甕炉である。土器の外側には被熱による焼土化が認められるが、炉床では顕著でない。

埋甕は検出されなかった。

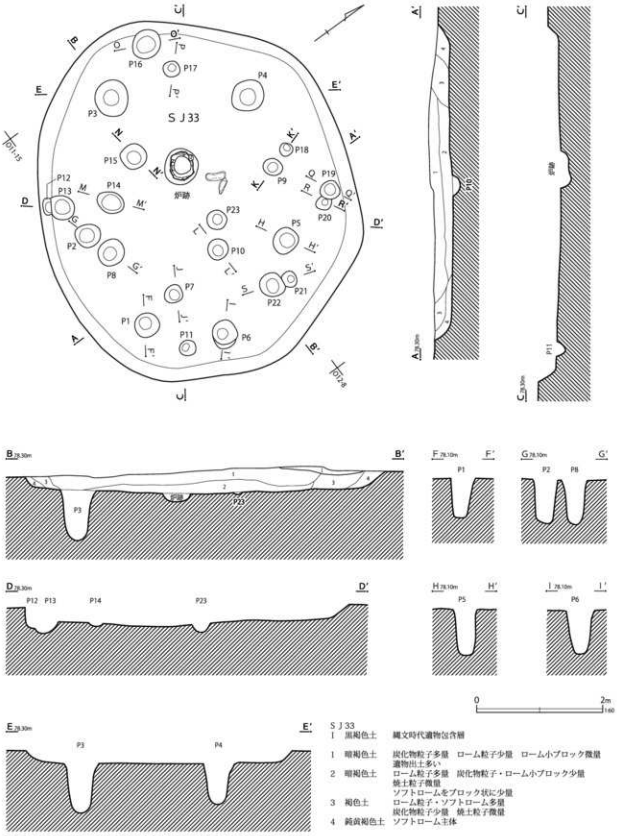
炉跡の北東側の床面上から砥石と刃部を欠損する打製石斧が出土している。多量の土器が覆土中から出土しているが、いずれも床面からは間層を挟んだ住居跡中央部にまとまっていることから、埋まりかけた住居跡への一括廃棄と考えられる。

住居跡は炉体土器から、勝坂式中～新期段階の所産と思われる。

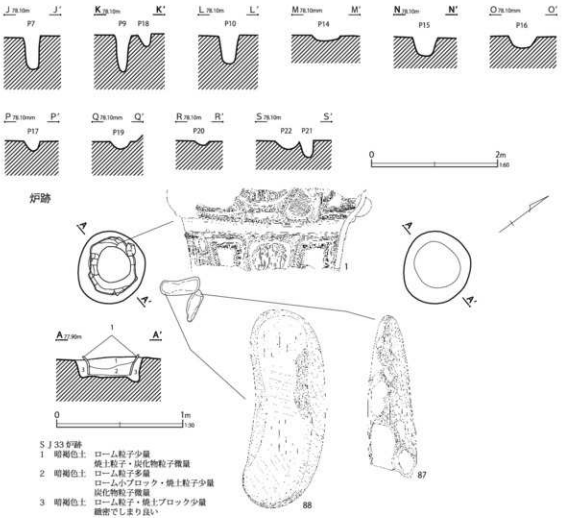
遺物は、第239図１～第251図88の土器類と石器類が出土した。

土器類は1～67である。１は炉体土器である。口縁部が内湾して開くキャリパー形深鉢で、口縁部の大半を欠損する。頸部に幅狭な無文帯を設けて、口縁部に三角形区画文を連ねるモチーフ、胴部に円形モチーフを取り囲むパネル状の崩れたモチーフを刻み隆帯で施文している。隆帯脇は基本的には並行沈線を沿わせているが、さらに爪形文や結節沈線文を沿わせる部分がある。区画文内には部分的に集合沈線や爪形文を伴う三叉文を施文する。

２、４～７は口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯で構成されるキャリパー形深鉢形土器である。２は口縁部に大きな山形の眼鏡状把手と小さな耳状把手が交互に対で付くものと思われ、刻み隆帯で三角区画文や潰れた楕円区画文を施し、区画内に集合沈線を施文する。頸部無文帯は幅狭である。胴部は楕円区画文を上下でずらしながら２帯に施文する。上段の楕円区画文帯は１箇所のみ横「S」字状区画となっており、これを２単位と理解すれば、４単位の区画文構成となるが、合わせて１単位とすると、長楕円形区画の３単位となる。さらに下段の区画文は長楕円の３単位区となっており、３単位であっても、４単位であっても胴部の上下区画文帯で、対称性を崩していることは明らかである。楕円区画内のみ集合沈線文を



第235図　第33号住居跡（1）



第236図　第33号住居跡（2）

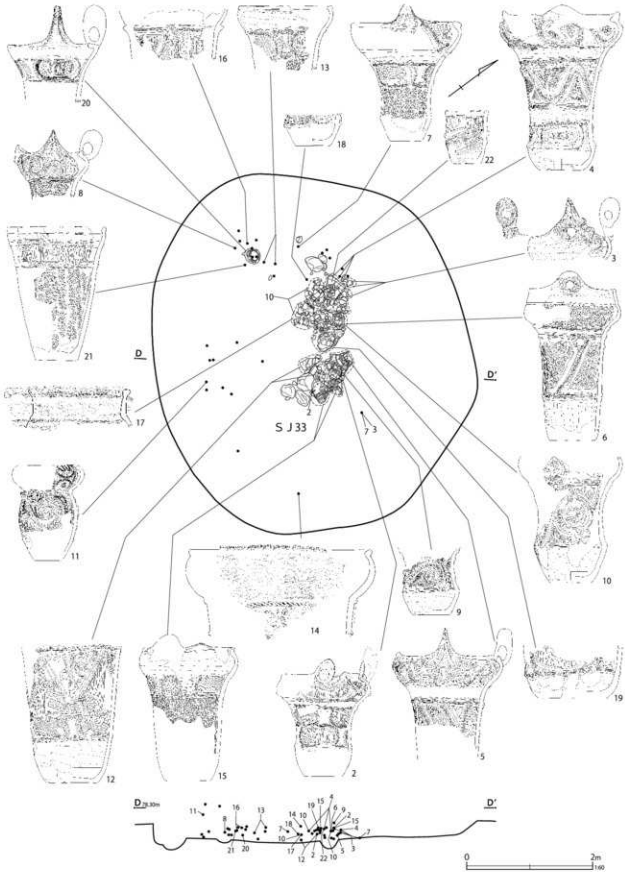
第100表　第33号住居跡柱穴計測表（第235・236図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	40.0	60.0	P 2	40.0	70.0	P 3	57.0	75.0	P 4	55.0	65.0	P 5	42.0	70.0
P 6	45.0	68.0	P 7	30.0	53.0	P 8	45.0	73.0	P 9	30.0	60.0	P 10	33.0	46.0
P 11	26.0	15.0	P 12	28.0	10.0	P 13	37.0	15.0	P 14	45.0	6.0	P 15	40.0	30.0
P 16	45.0	18.0	P 17	25.0	15.0	P 18	20.0	20.0	P 19	30.0	12.0	P 20	25.0	5.0
P 21	26.0	28.0	P 22	40.0	12.0	P 23	30.0	15.0						

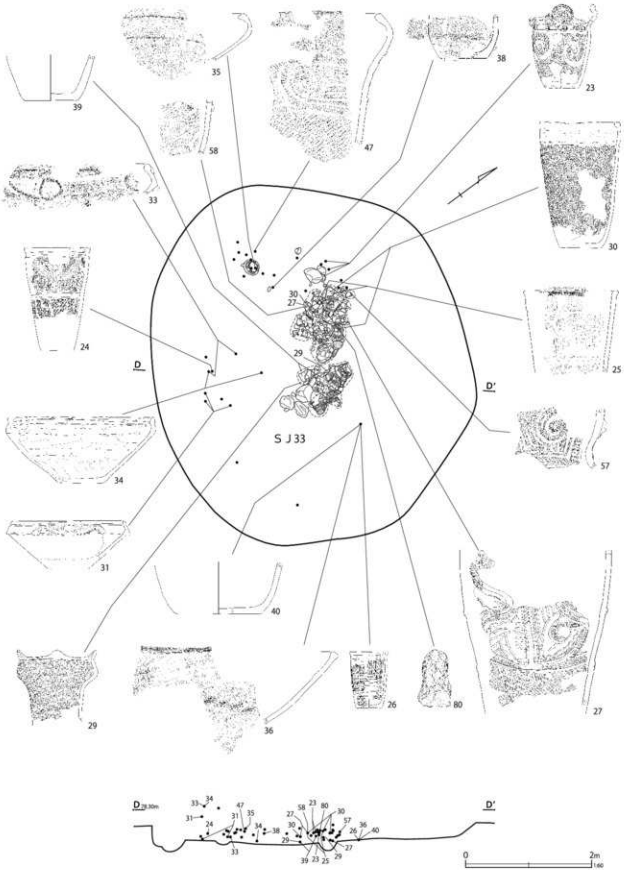
施文し、三叉文は口縁部の三角区画内のみに施文している。

4は4単位の波状口縁を呈し、波頂部下に隆帯の渦巻文を連結するモチーフを施文する。渦巻文は区画文化し、区画内に集合沈線を施文する。胴部は無文帯を挟んで胴部文様帯と底部文様帯に区画されており、胴部文様帯には4単位の大振りの波状文を施文して、上下に8単位の三角区画文を構成する。上側の三角区画内には中央部を縦位に区画して背合わせ状の三叉文を施文し、下側の三角区画内には1箇所のみ大きな三叉文を施文して、他は縦位の集合沈線を充填している。底部文様帯には4単位の楕円区画文を施文する。このように、口縁部から底部に至る各文様帯は、モチーフは異なるものの、4単位の文様構成から成り立っている。

5は口縁部に大小の眼鏡状把手を対峙して設け、間に小さな耳状把手を配している。把手などで4単位に区分された口縁部は、横「S」字状文



第237図　第33号住居跡遺物出土状況（1）



第238図　第33号住居跡遺物出土状況（2）

から変化して崩れたような渦巻文状の区画文を４単位に配して区画している。区画内は集合沈線、集合結節沈線、蓮華文、三叉文、対向三叉文等多彩な充填文を施文する。胴部は下半を欠損するため全体構成は不明であるが、変形しながらも縦位区画文を中心に４単位構成となっているようであるが、１箇所のみ構成をずらしている。対応する区画文内には、それぞれ対称性を外す充填文を施文する。

６は口縁部の扁平が強く、筒形の胴部を有する器形で、底部を欠損する。口縁部は約半分を現存するが、円窓を有する大形把手が１箇所に付くものと思われる。口縁部は単節ＲＬ縄文を横位施文するのみで、文様がない。頸部には幅狭の無文帯を構成し、胴部の文様帯は大きく２単位に区分し、それぞれの区画内を「D」字状区画や斜行隆帯で上下に２分割する区画文の合わせた３区画文構成を対峙させている。しかし、それぞれの区画文内には別種の文様を施文している。

７は接合しない同一個体の復元図で、口縁部に大きな山形眼鏡状突起が付くものの、情報が少ない。頸部に幅狭な無文帯を構成し、胴上半部に１帯の楕円区画文帯を設けている。地文は複節ＲＬＲである。

３は内湾する無文の口縁部が開く器形で、大きな山形眼鏡状把手が１箇所に付くが、反対側に対応する小突起が付くかは不明である。この眼鏡状把手は下部に円窓を有し、正面右側に蛇行して垂下する蛇状の渦巻文を配する構成をとる。非常に定型的な文様構成で、蛇状モチーフを垂下させる位置はほぼ右側である。

８はキャリパー形を呈し、底部が張り出す器形で、口唇部に山形の大きな眼鏡状把手と、小さな耳状把手を交互に配するものと思われ、口縁部文様帯に隆帯の渦巻文を連結するモチーフを描く。渦巻き隆帯は部分的に背割れ状を呈し、交互刺突や隆帯縁への刻みを施すものとなっている。胴部地文には０段多条ＲＬ縄文を縦位施文する。

９は胴部文様帯に、８と同様な横「S」字状の隆帯渦巻文を入り組み状に連結するもので、余白に爪形文を伴う三叉文を施文している。

10は頸部無文帯を構成しないキャリパー形深鉢で、口縁部の多くを欠損する。口縁部と胴部に幅広の低隆帯で渦巻文を配するモチーフを展開し、隆帯の縁に刻みや交互刺突を施している。胴部区画文が底部区画隆帯を越えて底部付近まで伸びており、珍しい文様構成と言えよう。

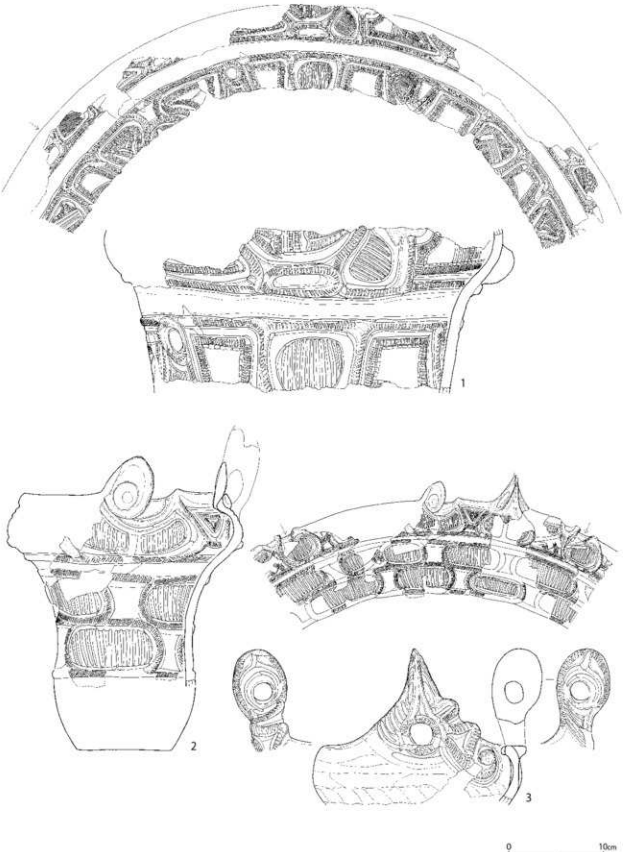
11は頸部で括れ、強く内湾する口縁部が開き、胴部が張る器形を呈する。口縁部は一部しか現存しないが、縦位区画文内に並行沈線で対弧状のモチーフを構成するが、並行沈線内に非常に細かな爪形文を施文している。胴部には垂下する隆帯とそれから派生する渦巻文を３単位に施文している。隆帯は交互刺突文や縁に刻みを施し、部分的に背割れ状を呈する。文様描出が非常に細かく、精緻な土器である。

12は口縁部文様帯を欠損する深鉢で、現存する一部から口縁部文様帯を有する土器であることが分かる。胴部は刻み隆帯で波状文と渦巻文を４単位に連結する文様構成で、区画内には集合沈線や集合結節沈線を充填施文する。底部文様帯には、大きさは異なるが楕円区画文を４単位に配置する。

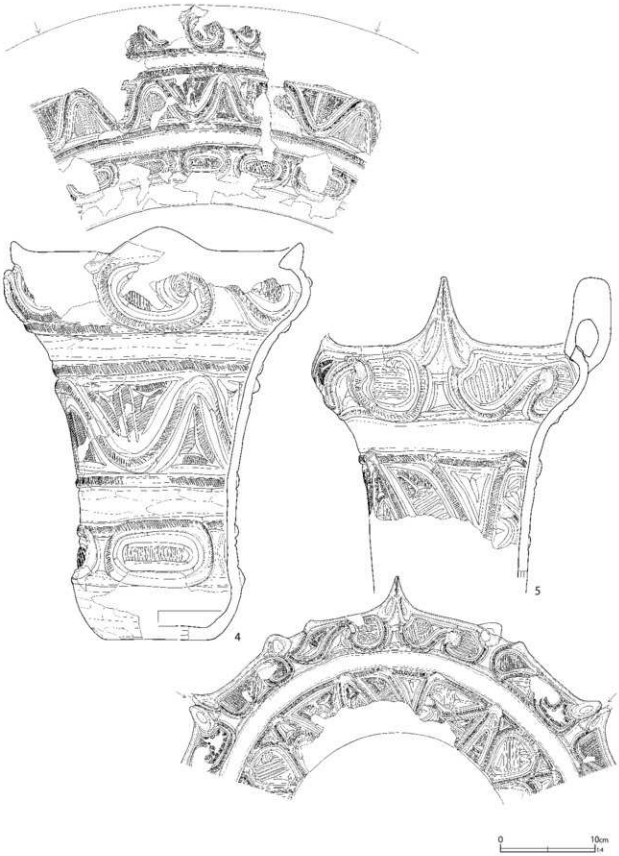
13～16はキャリパー形深鉢で、口縁部を無文にする土器群である。13は頸部に楕円区画文を配するもので、単位数は不明である。胴部地文に０段多条ＲＬを縦位施文する。

14は口縁部と胴部の一部が残るだけの破片で、胴部の文様構成は不明である。

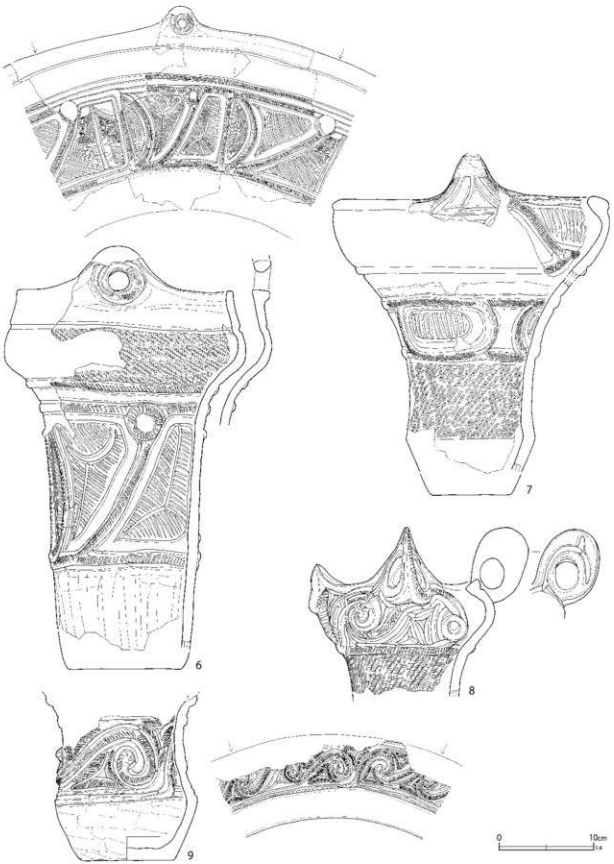
15は13と同様な器形で、口縁部に非対称の突起が１箇所に付く。頸部は横長の楕円文３単位と、円形状の区画文２単位を施文しており、合計５単位ではあるが、円形区画２単位を楕円形１単位と見做すと４単位構成になる。この５単位構成も対称性を崩していることの表れであろうか。胴部地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。



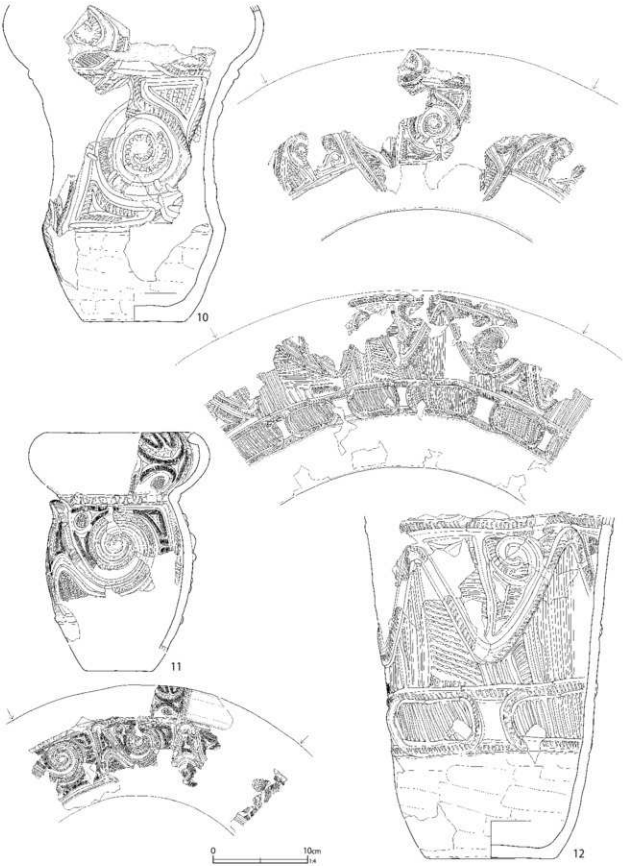
第239図　第33号住居跡出土遺物（1）



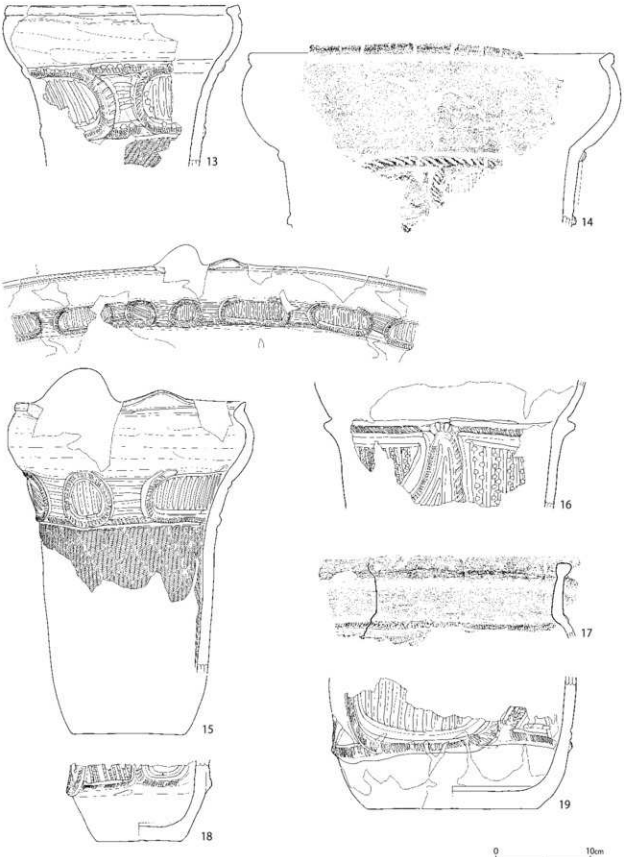
第240図　第33号住居跡出土遺物（2）



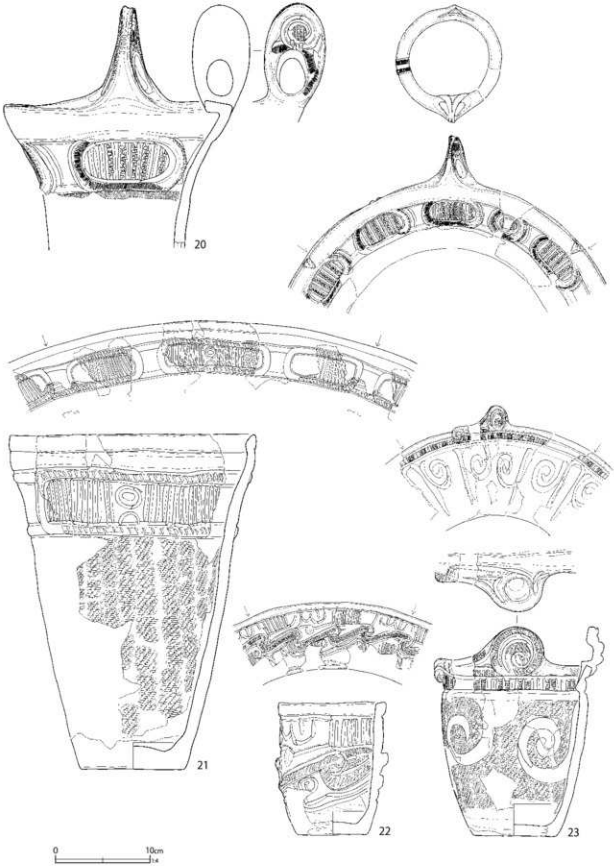
第241図　第33号住居跡出土遺物（3）



第242図　第33号住居跡出土遺物（4）

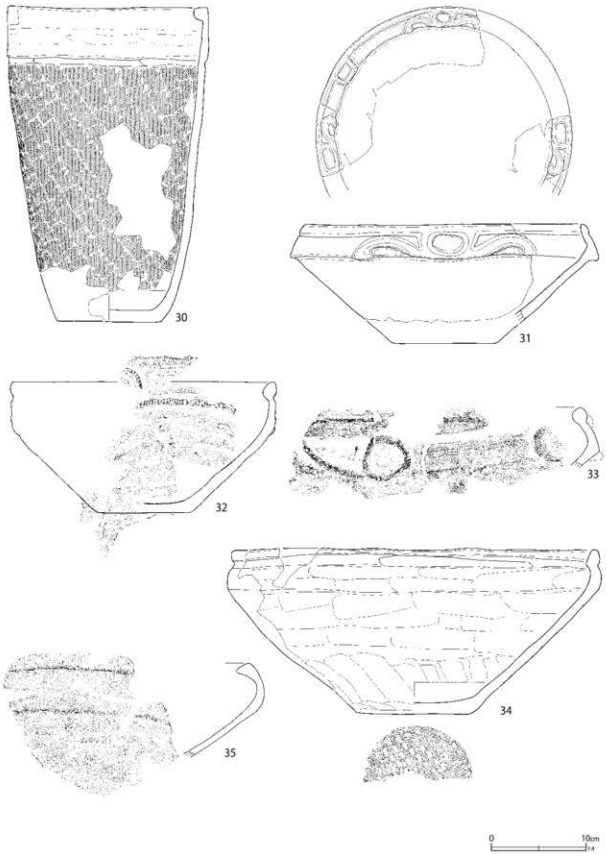


第243図　第33号住居跡出土遺物（5）

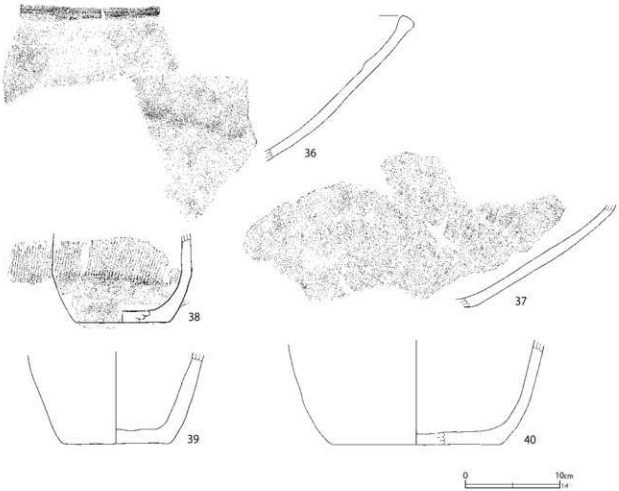


第244図　第33号住居跡出土遺物（6）

第245図　第33号住居跡出土遺物（7）



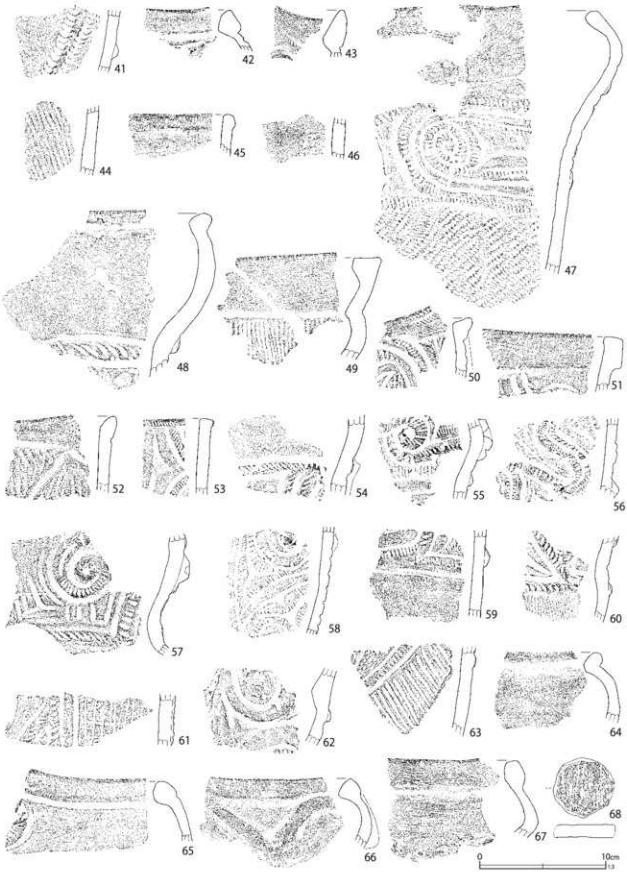
第246図　第33号住居跡出土遺物（8）



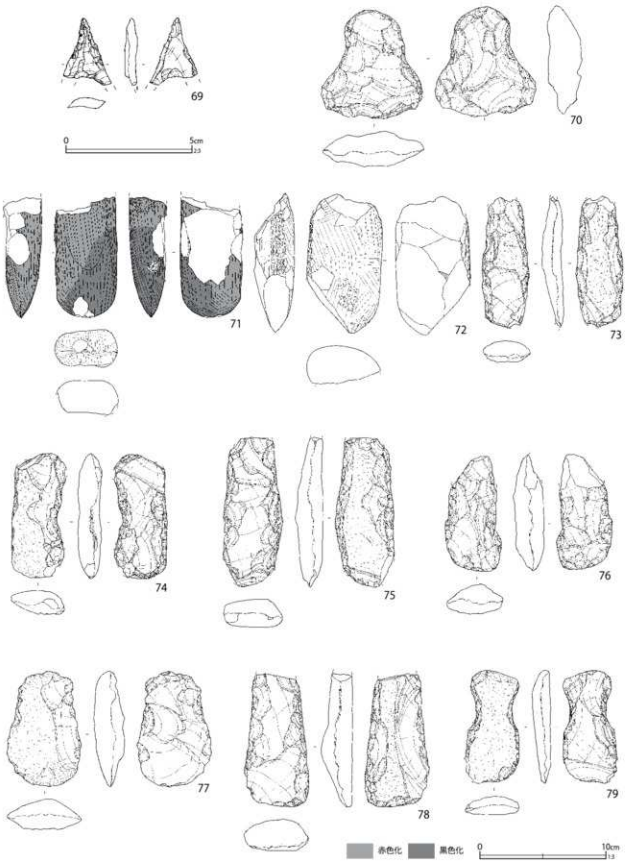
第247図　第33号住居跡出土遺物（9）

第101表　第33号住居跡出土復元土器観察表（第239～247図）

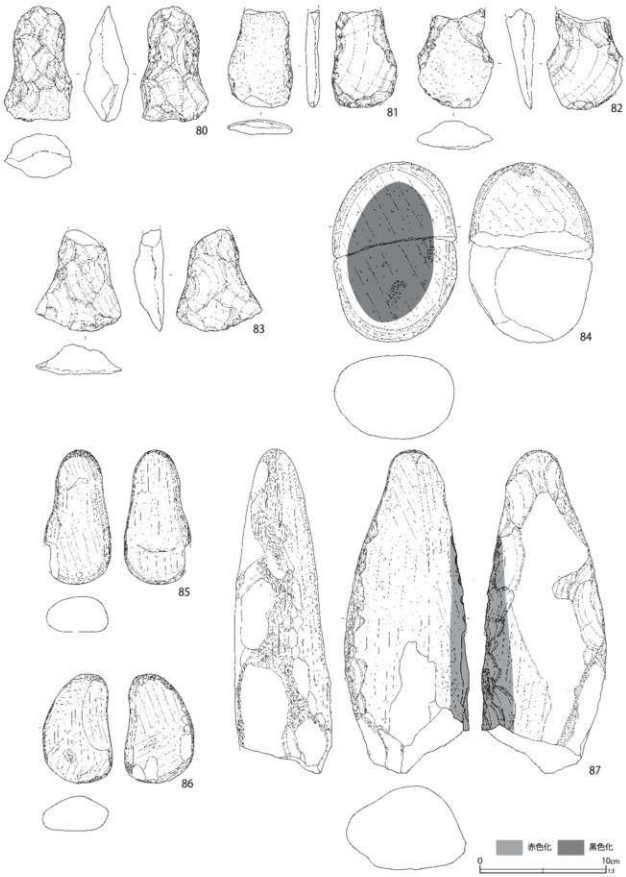
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
239-1	(17.6)	－	41.8	－	40%
2	[27.1]	(21.4)	－	－	50%
3	(16.8)	(20.0)	－	－	20%
240-4	[42.0]	(30.5)	－	－	60%
5	[31.8]	27.2	－	－	50%
241-6	[41.3]	(22.8)	－	－	70%
7	[36.0]	(29.2)	－	－	40%
8	(17.7)	(14.8)	－	－	20%
9	[17.5]	－	[16.0]	9.6	50%
242-10	[33.4]	－	(27.6)	10.8	50%
11	[23.0]	(15.8)	－	－	50%
12	[36.2]	－	(26.4)	13.8	70%
243-13	[17.1]	(24.3)	－	－	40%
14	[18.4]	(38.8)	－	－	20%
15	[29.6]	24.2	－	－	70%
16	[13.3]	－	(28.8)	－	20%
17	[7.8]	21.6	22.4	－	20%
18	[8.6]	－	14.2	9.0	20%
19	[13.9]	－	26.2	18.0	20%
244-20	[23.8]	22.2	－	－	40%
244-21	[35.5]	(25.8)	－	10.8	50%
22	14.0	11.4	－	7.4	80%
23	22.9	16.7	－	9.8	40%
245-24	[18.5]	(17.4)	－	－	40%
25	[17.2]	(20.2)	－	－	30%
26	14.9	10.2	－	6.7	70%
27	[33.0]	－	(32.0)	－	40%
28	[33.3]	(22.6)	－	8.8	70%
29	[18.8]	20.6	－	－	50%
246-30	33.1	(21.2)	－	(11.0)	60%
31	[10.3]	(29.2)	－	－	60%
32	13.8	(28.2)	－	9.7	20%
33	[6.5]	－	－	－	20%
34	[15.4]	38.2	－	11.8	80%
35	[9.9]	－	－	－	20%
247-36	[15.6]	－	－	－	20%
37	[10.8]	－	－	－	30%
38	[9.5]	－	14.8	9.8	20%
39	[9.3]	－	18.6	10.9	20%
40	[10.5]	－	27.2	17.8	10%



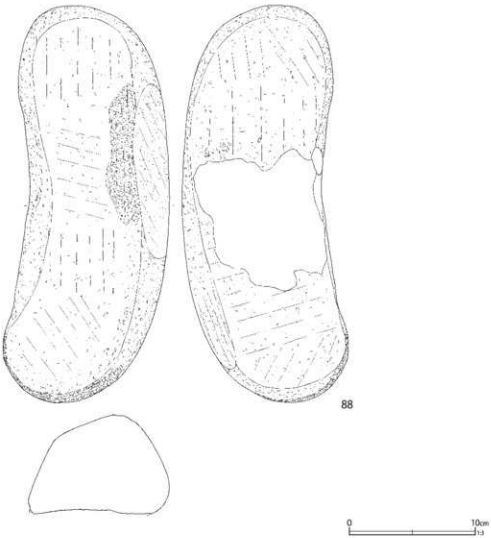
第248図　第33号住居跡出土遺物（10）



第249図　第33号住居跡出土遺物（11）



第250図　第33号住居跡出土遺物（12）



第251図　第33号住居跡出土遺物（13）

16は胴部に幅広の文様帯を有するもので、刻み隆帯の区画文を施すものと思われ、区画内に交互刺突を施す並行沈線を施文する。

17は無文の口縁部が開き、胴部が張る器形になるものと思われる。

18、19はキャリパー形土器の底部と思われ、18は底部がやや張り出し、19は円筒形状に窄まる。刻み隆帯で区画文を施文し、集合沈線や集合結節沈線を充填施文する。

20～27は口縁部が開く深鉢形土器、もしくは円筒形土器である。

20は口縁が内折して幅広の口唇部を形成し、大きな山形眼鏡状把手を1箇所に配置する。把手の反対側の口唇部には注ぎ口状の突出があり、さらに把手との中間部に刻みを施す2本の棒状貼付文を施す。口縁部は無文で、頸部に4単位の楕円区画文を配している。区画内は交互刺突を施した並行沈線を充填施文しており、それぞれの区画内で様相の異なる充填文を施文する。

21は幅狭な無文口縁部が開く器形で、頸部に楕円区画文を3単位に配する。一番大きな楕円区画文には中央部に沈線の円形文と半円文が区画文状に施文されており、ここを中心にすると左右の楕円区画が対称形となる。3単位の楕円区画は対称

第102表　第33号住居跡出土石器観察表（第249 ～ 241図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
249 － 69	石鏃	Ⅰ２②	黒曜石	[2.6]	[1.9]	0.5	1.3	
70	スクレイパー	Ⅰ１①イ	ホルンフェルス	8.7	8.0	2.8	186.8	
71	磨製石斧	Ⅰ②ア	砂岩	[9.5]	5.0	[3.0]	210.0	表裏面一部赤色・黒色化
72	磨製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[11.1]	6.0	[3.2]	246.6	
73	打製石斧	Ⅱ２②イ	頁岩	[10.4]	3.8	1.7	75.3	
74	打製石斧	Ⅱ２②イ	頁岩	9.9	[4.3]	1.9	97.4	
75	打製石斧	Ⅱ２②イ	ホルンフェルス	[11.9]	4.7	2.2	172.8	
76	打製石斧	Ⅱ２②イ	ホルンフェルス	[9.2]	4.4	2.4	108.8	
77	打製石斧	Ⅲ２①イ	ホルンフェルス	9.2	5.9	2.4	135.9	
78	打製石斧	Ⅲ２②ア	砂岩	[10.6]	5.1	2.5	142.5	
79	打製石斧	Ⅲ１②イ	砂岩	9.0	[4.3]	1.5	68.0	
250 － 80	打製石斧	Ⅲ１②イ	頁岩	9.2	[5.4]	3.5	164.7	
81	打製石斧	Ⅲ２②イ	緑色岩	[7.8]	5.2	1.2	66.3	
82	打製石斧	Ⅲ１②ア	ホルンフェルス	[7.9]	[6.0]	[2.3]	83.0	
83	打製石斧	Ⅲ２②イ	ホルンフェルス	[8.1]	6.8	2.4	103.9	
84	磨石	Ⅱ1-3②ア	閃緑岩	[14.3]	[9.9]	6.7	1122.2	表面一部黒色化
85	磨石	Ⅳ1-3①イ	砂岩	10.7	5.4	2.8	239.4	
86	敲石	Ⅳ1-3①イ	砂岩	8.7	5.5	2.8	198.8	
87	台石	②ア	砂岩	25.7	10.0	7.7	2305.2	表裏面一部赤色化
251 － 88	台石	②ア	砂岩	31.6	13.3	9.1	4844.3	

性を外しているが、その中にも対称形となる４単位構成の原理を内包させているようである。地文は単節ＲＬの縦位施文である。

22は短い円筒形の胴部に、隆帯の先端が渦を巻く入組状「Ｓ」字状文を施文する。この隆帯の下部には、隆帯に沿って沈線の渦巻文を施文する。

23は小形の樽形の器形で、口縁部に隆帯の渦巻文を配した大きな円形把手が付き、胴部には磨消縄文で描いた懸垂文とそれから派生する渦巻文を組み合わせている。胴部地文は単節ＲＬの縦位施文である。

24は円筒形土器で、胴上半部に半円形区画と三角状区画を構成するもので、キャリパー形深鉢の口縁部に伝統的なモチーフ構成を、円筒形土器の胴部文様として施文しているものと思われる。半円形区画内には爪形文を伴う玉抱き三叉文を、三角状区画内には集合結節沈線を施文している。胴部地文は複節ＲＬＲの縦位施文である。

25は口縁部を無文として、胴部の並行沈線の縦位区画内に上下対弧のモチーフや、三叉文等を組み合わせたモチーフを施文する。

26は小形の円筒形土器で、撚糸文Ｌ地文上に垂下する並行沈線で胴部を縦位区画し、渦巻文や横位沈線を組み合わせて、胴部文様帯を構成する。

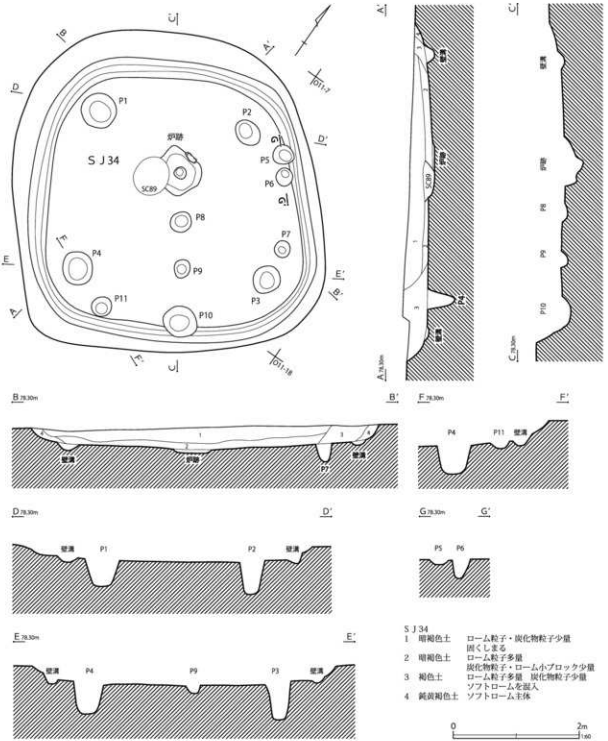
27は大形破片からの復元で、全体形を把握できないが、円筒形の土器と思われ、比較的細身の胴部に撚糸文Ｌを施文している。胴部には刻み隆帯で曲線的な大柄なモチーフを描いている。

28、29は口縁部が球形状に張り出す器形で、28は幅広の無文の口縁部開きながら立ち、頸部が膨らみ、窄まる胴部に地文０段多条ＲＬを縦位に施文する。底部は無文で、やや腰高に張り出す。内折する口唇部上には把手の一部が残っている。

29は４単位の山形把手が付く深鉢で、口縁部が膨らみ、地文に単節ＲＬを口縁部で１段縦位に、以下横位から斜位方向へ施文している。底部を欠損する。

30は幅広の無文口縁部を沈線で区画し、胴部に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

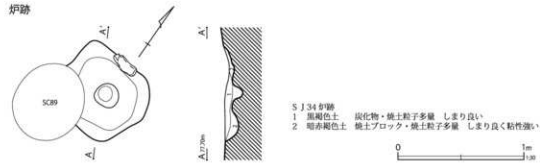
31 ～ 37は浅鉢で、31 ～ 33は口縁部が「く」字状に屈曲し、低隆帯でモチーフを描いている。32は口縁部に刻み隆帯でモチーフを描く鉢



第252図　第34号住居跡（1）

第103表　第34号住居跡柱穴計測表（第252図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	55.0	42.0	P 2	44.0	50.0	P 3	46.0	58.0	P 4	52.0	43.0	P 5	32.0	8.0
P 6	28.0	29.0	P 7	26.0	30.0	P 8	33.0	6.0	P 9	31.0	12.0	P 10	55.0	13.0
P 11	32.0	12.0												



第253図　第34号住居跡（2）

形土器である。34、35は口縁部が内湾する器形で、36は口縁部が開く浅鉢である。36は内面に隆帯状の稜が巡る。37は浅鉢の底部、38は深鉢の底部、39、40は無文の底部である。

破片では、41はＰ１、42～44はＰ10、45、46はＰ16からの出土である。

49、50、55は口縁部文様帯を有する土器、47、48、54は内湾する無文の口縁部が開く土器、51～53は円筒形土器の口縁部破片である。各種の器形、各種の文様を構成するが、描出する隆帯は刻みを施し、隆帯脇に沈線を沿わせている。モチーフは渦巻文を構成するものが多く、他に爪形文を伴う三叉文、伴わない三叉文、集合沈線、集合結節沈線が組み合っている。地文は０段多条ＲＬが多く、縦走縄文にするものと、縦位施文する斜縄文がある。

64～67は口縁部が内湾する浅鉢で、66、67は強く屈曲するものである。

破片資料は、およそ勝坂式新段階から終末段階にかけてのものが多いと思われる。

土製品としては、68の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器類は69～88が出土した。

69は石鏃で、裏面に主要剥離面が残る。脚部を両方とも欠いており、正面左脚部は根元から欠損している。

70は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーで、上部の両側縁に抉りが加えられている。

71、72は乳棒状磨製石斧の破片である。71は刃部片で、被熱により、全面が赤色化及び黒色化している。

73～83は打製石斧である。73～75は短冊形を、76～83が撥形を呈する。74、78、80～83は片刃で、73、75～77、79が両刃である。

84、85は磨石である。84は被熱の影響を受けている。

86は敲石で、上下両端に敲打痕を有する。

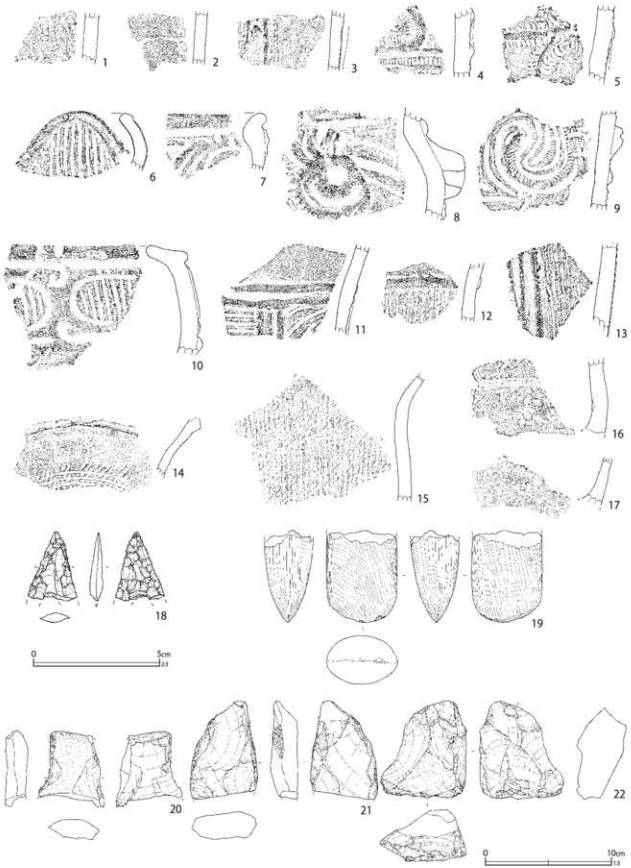
87、88は台石である。87は両側面に敲打痕を有する。

第34号住居跡（第252図～第254図）

Ⅱ区Ｏ－10・11区に位置する。住居跡中央部で第89号集石土壙と重複し、第89号集石土壙の方が新しい。なお、第89号集石土壙の掘り込みは、

第104表　第34号住居跡出土石器観察表（第254図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
254 － 18	石鏃	Ⅰ②②	頁岩	[2.7]	[2.0]	0.5	1.9	
19	磨製石斧	Ⅰ②イ	蛇紋岩	[7.3]	5.6	[3.9]	236.4	
20	打製石斧	Ⅴ②イ	頁岩	[6.1]	[5.2]	1.7	57.1	
21	打製石斧	Ⅴ②ア	ホルンフェルス	[7.8]	5.4	2.2	104.1	
22	礫器	①イ	ホルンフェルス	7.8	6.8	4.1	201.4	



第254図　第34号住居跡出土遺物

覆土の下層からであり、住居の埋没途中で構築されたものである。

平面形は長径5.04m、短径4.83mと僅かに北西方向に長い台形状の隅丸方形を呈する。床面までの深さは約0.38mで、壁は緩やかに立ち上がる。

壁溝は１本検出された。壁に沿って浅めの壁溝が台形状に全周する。

柱穴は11基検出されたが、深さ及び配置から主柱穴と思われるものはＰ１～４の４基である。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝42cm、Ｐ２＝50cm、Ｐ３＝58cm、Ｐ４＝43cmである。

炉跡は住居跡の中央部北西寄りに検出された。不整方形の掘り込みをもつ地床炉で、南西側の一部が第89号集石土壙によって壊されている。炉床面は被熱のため硬化が著しく、部分的に赤く焼土化している部分も認められる。また、中央部に径20cm程の窪みが見られることから、小形の土器が埋設されていた可能性もある。

埋甕は検出されなかった。

Ｐ３から土器片２点（図示）が出土したほか、Ｐ２、４からも縄文土器の小破片が出土している。住居跡全体として出土遺物が少ない。

住居跡の形状や出土遺物から、加曽利ＥⅡ式古段階期の所産と思われる。

遺物は第254図１～22の土器類、石器類が出土した。

土器は１～17で、１、２はＰ３から出土した。

３は雲母を含む阿玉台式系土器で、隆起線脇に２列の押引文を施文する阿玉台Ⅱ式であろうか。

４～９は勝坂式土器で、４、５は隆帯脇に幅広の爪形文を施文する中段階の藤内式期に、６～９は新段階の井戸尻式期に比定されよう。

10～15は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢で、10は口縁部、11、12、14は頸部付近、13、15は胴部である。10は口縁部に楕円区画文を配し、区画上下に対向する蕨手状渦巻沈線文を施文する。区画内には縦位の沈線文を施文する。加曽利ＥⅡ式に比定されよう。11は胴部に曽利式系の要素である沈線文を施文する。12、13は撚糸文地文、14は単節ＲＬを施文する加曽利ＥⅡ式古段階に比定される土器と思われる。

16は底部で、０段多条ＬＲ縄文を横位施文し、浅く幅広の沈線をクランク状に施文する。勝坂式土器と思われる。

石器は18～22が出土した。

18は石鏃で、脚部を両方とも根元から欠く。

19は乳棒状磨製石斧の刃部片である。

20、21は打製石斧の破片で、22は磨器である。

第35号住居跡（第255図～第263図）

Ｏ－10区に位置する。中央の炉跡付近で第41、42号集石土壙と重複する。いずれも本住居跡よりも新しく、炉跡の一部は第41号集石土壙によって壊されている。

平面形は長径6.60m、短径6.35m程の隅丸六角形を呈する。確認面からの掘り込みは深く、北西方向に下がる斜面地に立地していることから南側で約0.7mを測る。

壁溝は４本検出され、新しいと思われるものから順に壁溝１～４と仮称する。

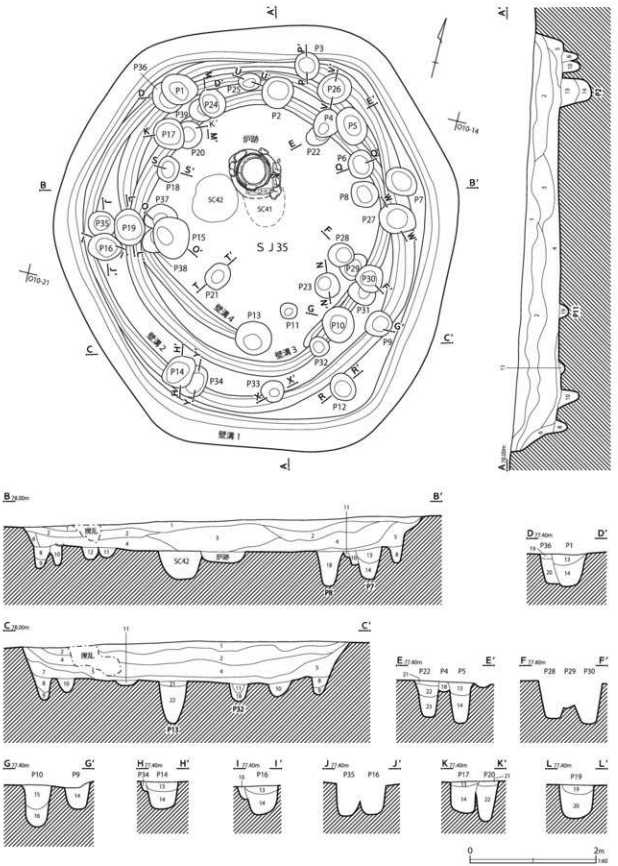
一番外側の壁溝１は壁の直下を全周するもので、本遺構の最終段階のものである。コーナー間の辺はほぼ直線的に掘られており、平面形は整然とした六角形を呈する。

壁溝２は、西及び北側の一部で壁溝１と重複しながら、そのすぐ内側を全周する。形状は南北に長い不整五角形である。

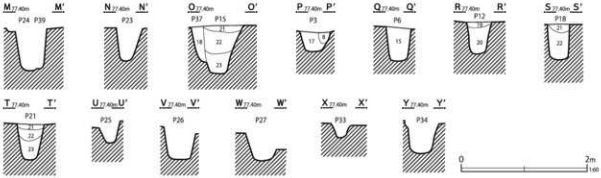
壁溝３は、更に内側を全周するもので、形状は不整円形である。

最も古いと思われる壁溝４は、壁溝２及び３と部分的に重複しながら、中心も北西方向に数十cmずれて作られている。

柱穴は39基検出されたが、深さ40cm以上と掘り込みの深いものがほとんどである。覆土、重複



第255図　第35号住居跡（1）



S J 35

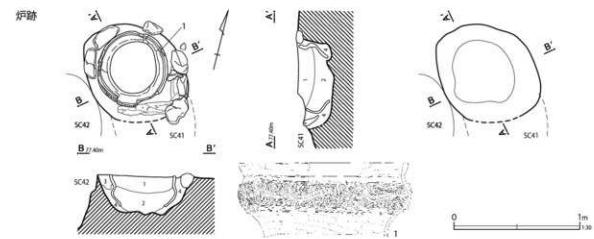
1　黒褐色土　しまり悪くフカフカで表土の影響受ける
2　暗灰褐色土　灰色粘質土多量　炭化物微粒子少量
3　黒色土　炭化物・焼土粒子多量　炉の影響を受けた層
4　黒灰褐色土　炭化物粒子多量　焼土粒子少量　遺物多く出土
5　黄褐色土　ローム土主体　しまり悪く粘性強い　壁の崩壊に伴う層
6　暗灰褐色土　4層に近似　ローム粒子多量
炭化物微粒子・焼土粒子少量
7　暗茶褐色土　炭化物微粒子・炭色粘質土少量
8　暗灰褐色土　ソフトローム土混じる　ローム粒子多量　（壁溝1）
9　暗灰褐色土　8層より黄色みを帯びる　ローム粒子・ブロック含む（壁溝1）
10　暗灰褐色土　ローム土粒子・ブロック少量　炭化物・焼土粒子微量（壁溝2）
11　暗灰褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子微量
ソフトローム多量（壁溝3）
12　暗灰褐色土　10層に近似　焼土粒子は含まない（壁溝4）

S J 35 ピット

13　暗褐色土　ローム粒子・小ブロック少量　しまり良い
14　暗褐色土　1層をベースにロームブロック多量
15　黒褐色土　ローム土少量　均質な層　しまり悪い
16　暗褐色土　15層に近似　ローム土多量
17　暗褐色土　ローム粒子・小ブロック・炭化物・焼土粒子少量
18　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・焼土粒子少量
19　暗褐色土　ローム土を微粒子状に含む　しまり悪い
20　暗黄褐色土　ローム土多量　ロームブロック少量
21　暗褐色土　黒みを帯びる　ローム土を微粒子状に含む
22　黄褐色土　ロームブロック多量　しまり良い
23　黄褐色土　ソフトローム主体　ロームブロック多量

S J 35 炉跡

1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　炭化物粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子・小ブロック状の焼土多量　炭化物粒子少量
3　黒褐色土　ローム粒子・炭化物及び焼土粒子少量　均質な層
4　暗褐色土　3層に近似　焼土の多量　ロームブロック少量　しまり良い



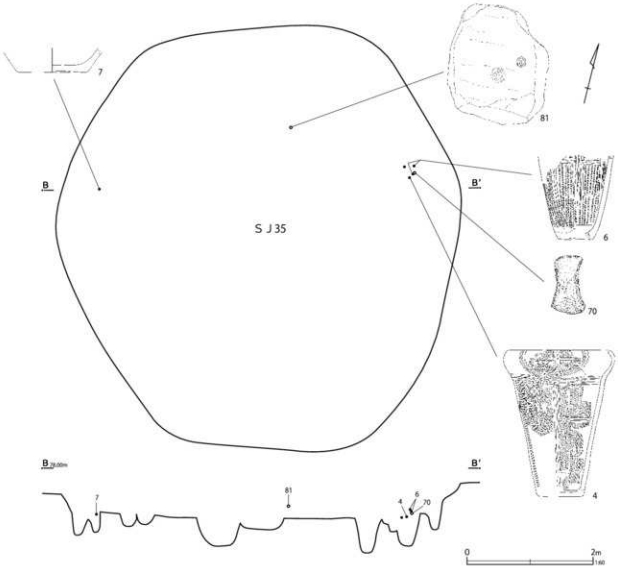
第256図　第35号住居跡（2）

第105表　第35号住居跡柱穴計測表（第255・256図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	56.0	50.0	P 2	50.0	45.0	P 3	42.0	30.0	P 4	47.0	(15.0)	P 5	60.0	63.0
P 6	44.0	52.0	P 7	55.0	47.0	P 8	45.0	53.0	P 9	44.0	35.0	P10	55.0	65.0
P11	25.0	15.0	P12	46.0	50.0	P13	56.0	65.0	P14	60.0	40.0	P15	66.0	75.0
P16	53.0	45.0	P17	54.0	50.0	P18	40.0	56.0	P19	57.0	52.0	P20	44.0	65.0
P21	42.0	55.0	P22	(45.0)	55.0	P23	40.0	50.0	P24	45.0	65.0	P25	33.0	35.0
P26	50.0	53.0	P27	60.0	45.0	P28	42.0	58.0	P29	45.0	40.0	P30	45.0	65.0
P31	44.0	—	P32	31.0	30.0	P33	36.0	20.0	P34	54.0	45.0	P35	45.0	50.0
P36	52.0	46.0	P37	52.0	52.0	P38	(20.0)	—	P39	37.0	65.0			

状況、深さ及び配置から、それぞれの壁溝に対応すると思われる柱穴群を以下に示す。

壁溝1に伴うものはP14、16、1、26、7、12の6基で、それぞれ六角形のコーナー部分に位置している。また、これらと重複関係にあるか、すぐ近くにあるP34、35、36、3、7、9も6



第257図　第35号住居跡遺物出土状況

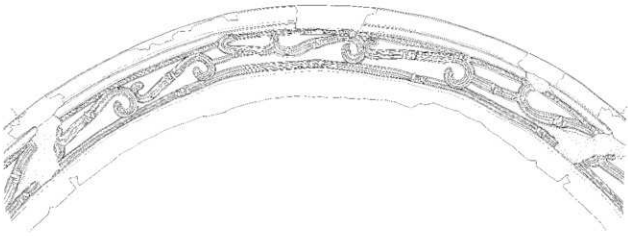
本主柱で、壁溝１に伴うものと思われる。したがって、壁溝１の段階で少なくとも１回は建て替えが行われていたと判断される。

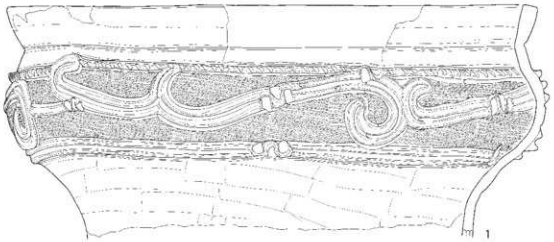
壁溝２に伴うものはＰ19、24、５、30、13の５基と思われる。どこに入り口部を想定するかで変わるが、主軸方向は壁溝１と少しずれる。また、壁溝２の内側で、Ｐ10、38、18、25、４、６、31などは他の柱穴と組み合わないものであり、さらに１軒分の柱穴を構成する可能性が高い。したがって、壁溝２の段階でも少なくとも１回の建て替えが行われていた可能性が高い。

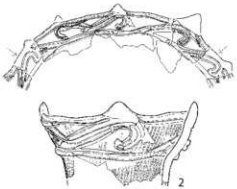
壁溝３に対応するのはＰ13、15、20、22、29の５基と思われる。Ｐ13を重複させているが、Ｐ13がない場合では４本主柱となろうか。

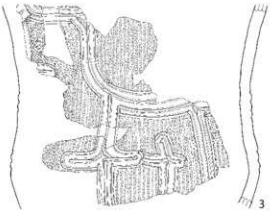
最も古い壁溝４に伴うのは、Ｐ23、37、39、８の４基と思われる。さらに壁溝４の内側に存在する柱穴では、Ｐ21、17、２、28の４基が軸を変えて揃う。したがって、壁溝4の段階でも少なくとも1回以上の建て替えがあったものと判断される。

したがって、第35号住居跡は、壁溝１の段階で建て替え１回２軒分、壁溝２の段階で建て替え１回２軒分、壁溝３の段階で建て替えなしで１軒分、壁溝４の段階で建て替え１回２軒分の、合わせて建て替え３回、壁溝を構築する回数を入れる

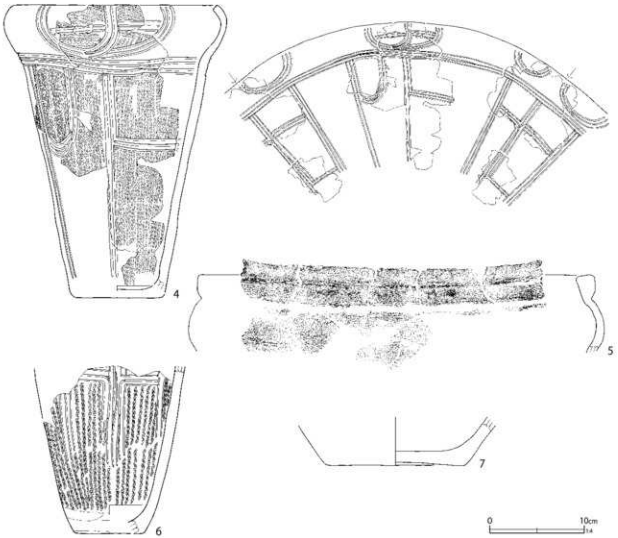








第258図　第35号住居跡出土遺物（1）



第259図　第35号住居跡出土遺物（２）

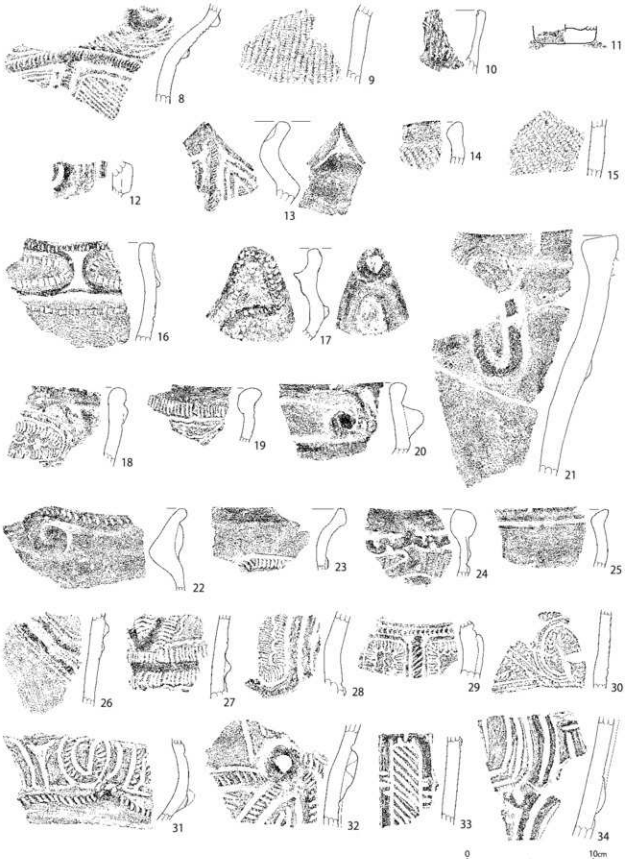
第106表　第35号住居跡出土復元土器観察表（第258・259図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
258-1	[24.5]	55.9	－	－	30%
2	[8.9]	16.4	－	－	40%
3	[20.1]	－	31.2	－	20%
259-6	[29.5]	(21.6)	－	－	40%

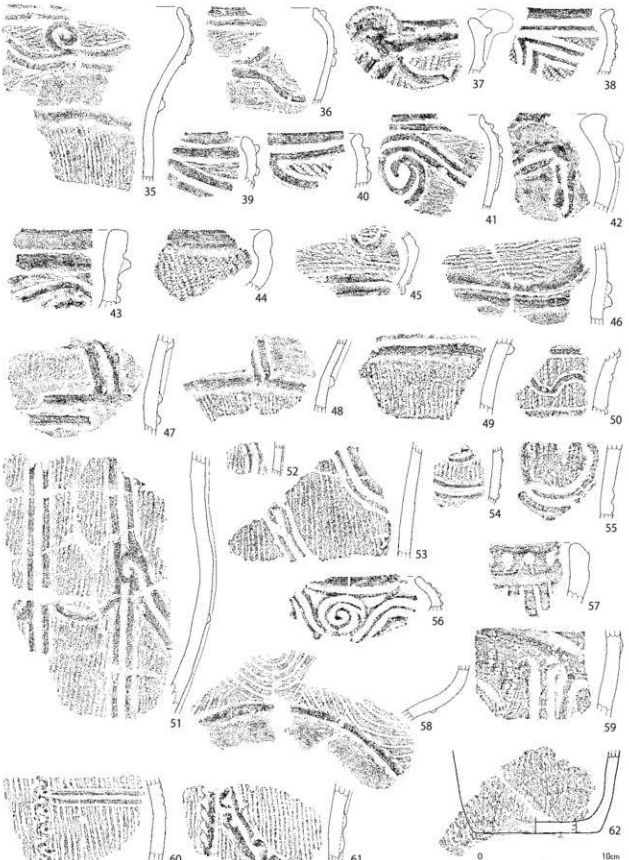
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
259-5	[8.1]	(42.0)	－	－	20%
6	[17.6]	－	(15.9)	(7.4)	40%
7	[4.2]	－	20.8	14.2	10%

と建て替えが６回、都合少なくとも７軒の住居跡がこの場で累々と構築されていたと判断することができる。そして、古い方の住居跡から４本主柱のやや小さい住居跡から５本主柱へ、さらに大形化して６本主柱へと変化するに伴って、六角形の形状が整っていることが理解される。

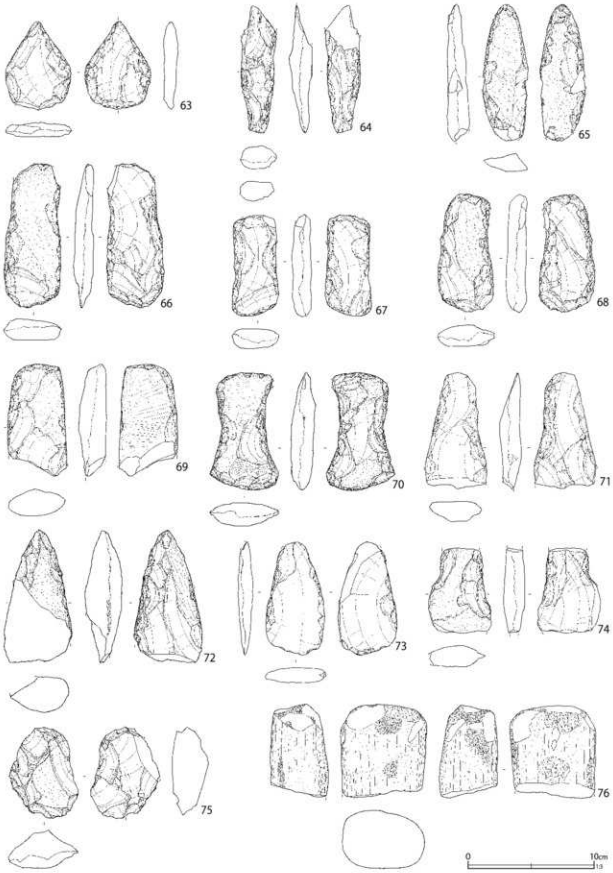
主柱穴の深さは、Ｐ１＝50cm、Ｐ５＝63cm、Ｐ７＝47cm、Ｐ８＝53cm、Ｐ12＝50cm、Ｐ13＝65cm、Ｐ14＝40cm、Ｐ15＝75cm、Ｐ16＝45cm、Ｐ19＝52cm、Ｐ20＝65cm、Ｐ22＝55cm、Ｐ23＝50cm、Ｐ24＝65cm、Ｐ26＝53cm、Ｐ29＝40cm、Ｐ30＝65cm、Ｐ34＝45cm、Ｐ37＝52cm、Ｐ39＝65cmである。炉跡は中央部北寄りの奥壁寄りに、石囲埋甕炉が検出された。炉南側の一部が第41号集石土壙によって壊されているが、８個の礫が環状に残されており、中央に大形のキャリパー形



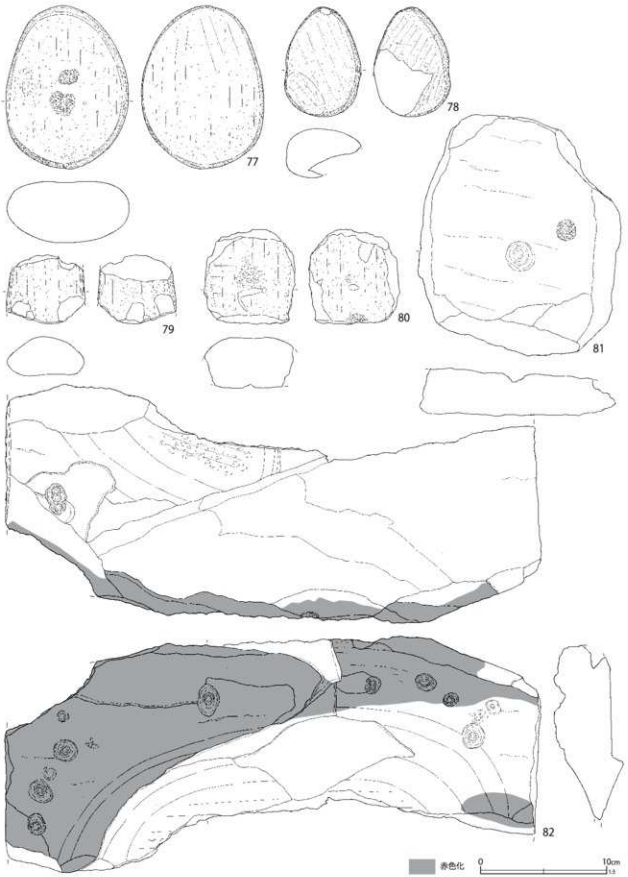
第260図　第35号住居跡出土遺物（3）



第261図　第35号住居跡出土遺物（4）



第262図　第35号住居跡出土遺物（5）



第263図　第35号住居跡出土遺物（6）

第107表　第35号住居跡出土石器観察表（第262・263図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
262 － 63	スクレイパー	Ⅰ1①イ	ホルンフェルス	7.0	5.2	102.0	46.6	
64	磨製石斧	Ⅴ②イ	緑色岩	[10.1]	2.8	1.8	48.6	
65	打製石斧	Ⅰ2②イ	頁岩	[10.9]	[3.6]	1.8	73.8	
66	打製石斧	Ⅱ1②イ	ホルンフェルス	[11.4]	4.6	1.6	111.4	
67	打製石斧	Ⅱ2①イ	頁岩	[8.0]	3.7	1.6	64.8	
68	打製石斧	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	9.3	4.4	1.7	86.4	
69	打製石斧	Ⅱ2②ア	砂岩	[8.9]	4.7	2.2	120.3	
70	打製石斧	Ⅲ1①ア	ホルンフェルス	9.4	5.4	1.8	101.0	
71	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.3]	[4.9]	1.8	78.8	
72	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[10.4]	[5.4]	2.9	149.4	
73	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.0]	[4.7]	1.2	58.0	
74	打製石斧	Ⅴ②ア	頁岩	[6.8]	[5.0]	1.7	74.6	
75	礫器	②イ	頁岩	7.2	[5.5]	3.0	107.1	
76	磨石	Ⅳ1-3②イ	砂岩	[7.4]	6.8	4.6	375.4	
263 － 77	磨石	Ⅱ1-3①イ	安山岩	13.0	9.8	5.0	961.6	
78	磨石	Ⅱ1-3②ア	砂岩	8.7	[6.1]	3.9	241.5	
79	磨石	Ⅳ1②イ	砂岩	[5.5]	6.2	3.2	140.3	
80	磨石	Ⅳ1-3②ア	閃緑岩	[7.6]	[7.3]	4.1	360.4	
81	石皿	Ⅲ2②ア	結晶片岩	[19.2]	[16.2]	[4.0]	1656.8	
82	石皿	Ⅱ2②ア	緑泥片岩	[42.6]	[18.9]	6.9	4820.1	炉への転用

土器の上半部が埋設されていた。また、南側の礫には石皿の大形破片が転用されていた。なお、炉床面は被熱のため硬化するが、土器の外側も含め、赤く焼土化した部分は認められなかった。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は、炉体土器から判断して、最終段階の住居跡が加曽利ＥⅠ式古段階の所産であることが理解される。

出土遺物は第258図１～第263図83の土器類、石器類が出土した。

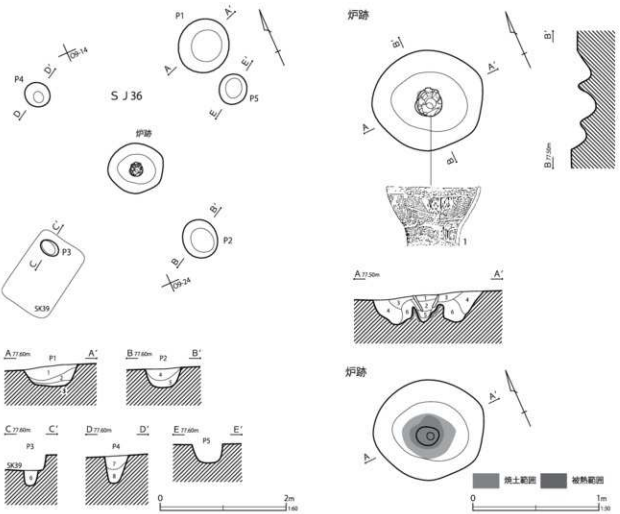
土器は１～62が出土した。

１は炉体土器である。加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢形土器の口縁部から頸部が現存する。口縁部は幅広の無文部がやや開きながら立ち、湾曲して開く口縁部文様帯を有し、頸部無文帯で括れる器形を呈する。口縁部文様帯の上端部は刻みを施す隆帯で区画し、下端を２本隆帯で区画する。口縁部文様帯には、部分的に交互刺突文を加える２本隆帯の横「Ｓ」字状渦巻文３単位を一組とし、２組を同様の隆帯で連結するモチーフを施文する。実測図正面左側の「Ｓ」字状文は鉤の手状を呈し、「Ｓ」とはなっていない。したがって６単位ある「Ｓ」字状の１箇所が崩れる構成をとっている。対称性を崩す一つの表現であろう。口縁部の地文に撚糸文Ｌを施文し、頸部は無文となっている。口縁部文様帯下端区画の隆帯にも、「Ｓ」字状文に加えた交互刺突文に対応する位置に交互刺突文を施文している。

２は口縁部に山形把手を４箇所に付ける波状口縁深鉢形土器で、山形把手は１箇所のみ大形の可能性がある。口縁部には波状に連結する渦巻文と、両端異方向に巻く渦巻文を施文している。地文は撚糸文Ｌである。

３は胴部が括れ、底部の張り出しの強い器形のキャリパー形土器で、胴部のみ現存する。撚糸文Ｌ地文上に、半截竹管状工具の重複施文による３本平行沈線で、垂下するクランク文や「十」字状文を施文する。

４は内湾する口縁部が開き、円筒状に窄まる器形を呈し、半截竹管状工具の平行沈線で口縁部に半円文、胴部に懸垂文を横位連結する「Ｈ」状の区画文を施している。地文は撚糸文Ｌである。



S J 36 ピット
1　暗茶褐色土　ソフトローム土混じる　ローム・炭化物粒子少量　均質な層
2　暗褐色土　1層に近似　ローム土少量　斑みを帯びる
3　暗黄褐色土　ソフトローム主体　ローム土を混入
4　暗灰褐色土　ソフトローム多量　ローム・炭化物粒子少量
5　暗黄褐色土　ソフトローム土体に4層土を混入
6　暗茶褐色土　ソフトローム多量　炭化物・ローム粒子少量
7　暗黄褐色土　ソフトローム主体　ローム粒子少量　炭化物粒子微量
8　暗黄褐色土　7層に近似　ローム土多量　黄色みを帯びる

S J 36 炉跡
1　暗褐色土　ソフトローム土混じる　ローム・焼土・炭化物粒子少量
2　暗褐色土　1層に近似　ローム土少量　斑みを帯びる
3　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
4　暗茶褐色土　3層に近似　ローム土多量　黄色み強い
5　暗褐色土　焼土粒子少量　均質な層　しまり非常に悪い
6　暗黄褐色土　被熱したローム土を多量に含む

第264図　第36号住居跡

6は胴部に「田」字状区画文を施文するもので、地文に2段ＬＲ原体の撚糸文を施文する。

5は胴部が緩く「コ」字状に屈曲する無文の浅鉢で、7は浅鉢の底部である。

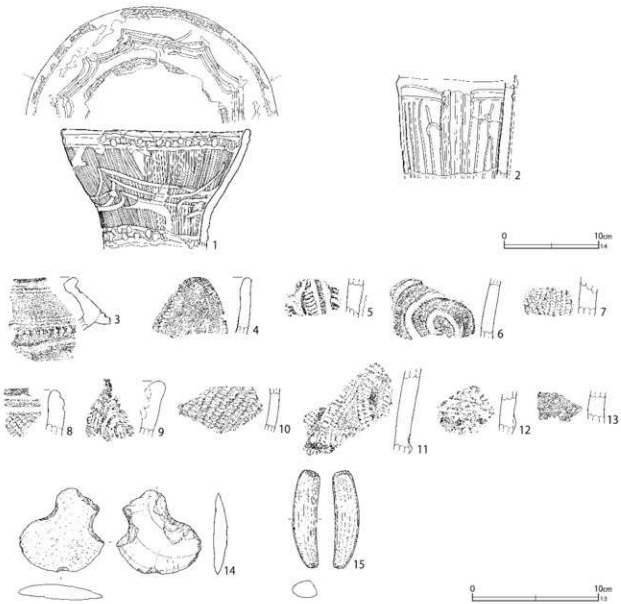
8は炉からの出土である。9はＰ4、10、11はＰ7、12はＰ10、13～15はＰ14からの出土である。8は細かな押引刻みを施す隆帯で頸部区画を施し、懸垂文としても垂下させる。口縁部と胴部に細かな並行沈線文を施文する。

16、17、26は阿玉台式系土器で、連続押引文や条線文を施文する阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

18～25、27～34は勝坂式土器で、19、27、28はキャタピラ文の脇に小波状沈線を沿わせるものや、パネル状区画文を施文するなど、中段階の藤内式段階の土器群である。

他は新段階の土器群で、刻み隆帯で区画文やモチーフを描き、隆帯に沿って沈線文を施文する井戸尻式段階の土器群である。

35～55は加曽利Ｅ式のキャリパー形土器の口縁部と胴部破片であり、口縁部に隆帯の渦巻文、



第265図　第36号住居跡出土遺物

第108表　第36号住居跡柱穴計測表（第264図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	83.0	35.0	P 2	62.0	30.0	P 3	31.0	(25.0)	P 4	42.0	42.0	P 5	48.0	30.0

第109表　第36号住居跡出土復元土器観察表（第265図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
265-1	[12.7]	19.8	－	－	50%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
265-2	[9.7]	－	12.2	－	30%

第110表　第36号住居跡出土石器観察表（第265図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
265 － 14	大形粗製石匙	Ⅰ1①イ	ホルンフェルス	6.7	6.7	1.2	50.4	
15	敲石	Ⅲ1-3①イ	砂岩	7.8	2.1	1.4	32.6	

胴部に隆帯懸垂文を施文するものである。35は口縁部に２本隆帯の弧状区画を施し、波底部から１本隆帯の渦巻文が巻き上がるモチーフである。弧状モチーフの下部は無文となることから、頸部無文帯を兼ねているものと思われる。大半は加曽利ＥⅠ式前半から後半段階にかけての土器群と思われるが、44はさらに新しい可能性がある。

54は撚糸文Ｒを地文にして細隆起線状の隆帯で渦巻文を描く大木式８ａ式系の土器である。

56、58は曽利式系の土器群で、56は褶曲文状のモチーフを隆帯で、58は重弧文系のモチーフを沈線で描いている。

60は加曽利ＥⅠ式の胴部に、コンパス文状の懸垂文を垂下する。61は曽利式系の胴部の「Ｕ」字状の隆帯モチーフを模している可能性がある。

57、59は加曽利ＥⅢ式土器である。62は撚糸文Ｒを施文する底部破片である。

石器類は63～82が出土した。

63は粗粒の石材を素材に用いたスクレイパーである。

64は磨製石斧である。整形が粗く、製作途中に基部側が欠損したために廃棄されたと思われる。

65～74は打製石斧である。65～69は短冊形を呈する。このうち、刃部を欠く65、69を除いて、全て両刃である。70～74が撥形を呈し、70、71は刃部が両刃である。

75は礫器である。

76～78が磨石で、77は正面中央に凹痕を有する。79、80は磨石の破片である。

81、82は石皿の破片で、ともに正面に凹痕を有する。このうち、82が炉として転用されていた石皿である。

第36号住居跡（第264図～第265図）

Ｏ－９区に位置する。Ｐ３付近が第39号土壙によって大きく壊されている。斜面部に立地する住居跡で、掘り込みは検出されず、形状は不明である。壁溝は検出されなかった。柱穴は５本検出されたが、形状・配置からＰ２～５の４基が主柱穴と思われる。主柱穴の深さは、Ｐ２＝35cm、Ｐ３＝(50)cm、Ｐ４＝42cm、Ｐ５＝30cmである。

炉跡は埋甕炉で、住居跡のほぼ中央部に位置する。長径60cm、短径50cm程の浅い掘り込みの中央に、口径18cm程の小形の土器の上半部を埋設する。炉床中央付近は被熱のため硬化著しく、特に土器に接する部分は赤く焼土化している。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から加曽利ＥⅡ式後半期の所産と思われる。

出土遺物は第265図1～15の土器類、石器類が出土した。

１は炉体土器である。口縁部が開き、口縁部と括れる胴部を交互刺突文の並行沈線で区画し、胴上半部に３本沈線の崩れた連弧文を施文する。地文は条線文である。加曽利ＥⅡ式後半期としたが、ＥⅢ式になる可能性もある。

２は円筒形の胴部に隆帯懸垂文を垂下し、沈線の三叉文と縦位沈線を組み合わせたモチーフを描いている。勝坂式終末期のものと思われる。

３～７は炉の覆土への流れ込みであろうか、阿玉台Ⅱ式及び勝坂式新段階の土器群である。

８、９も炉の覆土からの土器であり、８は連弧文土器の口縁部、９は条線文を施文する深鉢の口縁部破片である。

10はＰ１、11、12はＰ２、13はＰ３からの出土である。いずれも炉体土器と整合する時期のものではない。

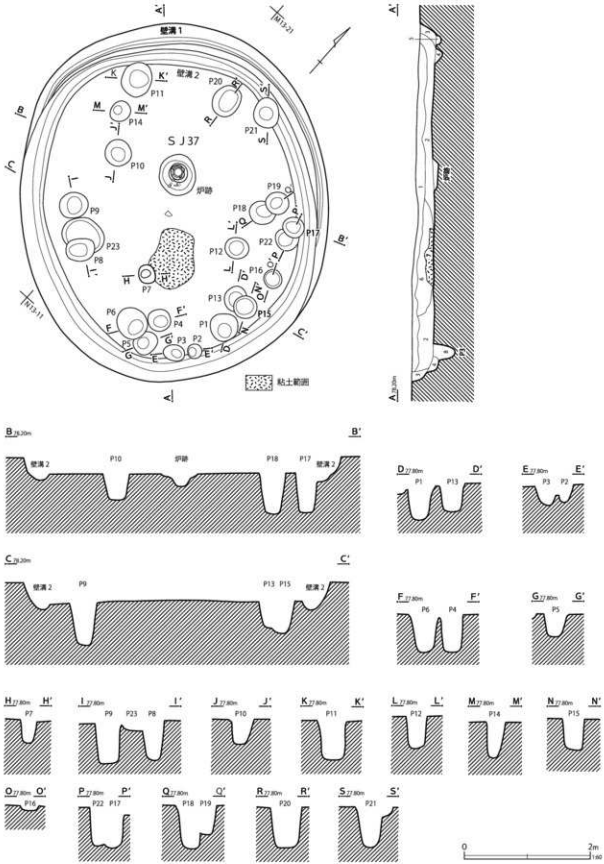
石器は14、15が出土した。

14は粗粒の石材を用いた大形粗製石匙である。

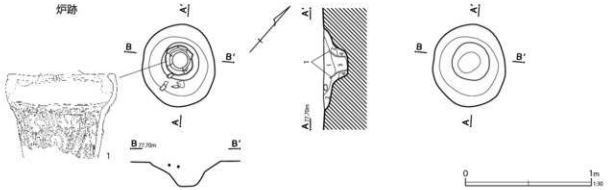
15は敲石で、上下両端に敲打痕が認められる。

第37号住居跡（第266～第271図）

Ｍ・Ｎ－12・13区に位置する。Ⅱ区北東端の調査区際で検出された。平面形は北西方向にや

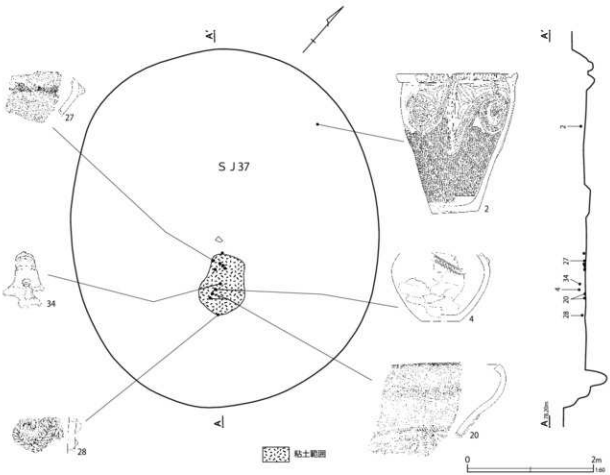


第266図　第37号住居跡（1）



ＳＪ37
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物粒子微量
2　暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量　1層より明るい　炭化物粒子微量
3　黄褐色土　ソフトローム主体
4　暗灰褐色土　ローム粒子多量　ローム,ブロック・炭化物粒子少量（壁溝２）
5　暗茶褐色土　ローム粒子多量（壁溝１）
6　暗褐色土　ローム粒子多量　径約５mmの炭化物が、少量ながら全体的に混入
7　灰褐色土　６層の下位で、灰黄白色粘土を堆積する層　土器片が含まれる
8　黒褐色土　ローム粒子少量　比較的均質（ピット）

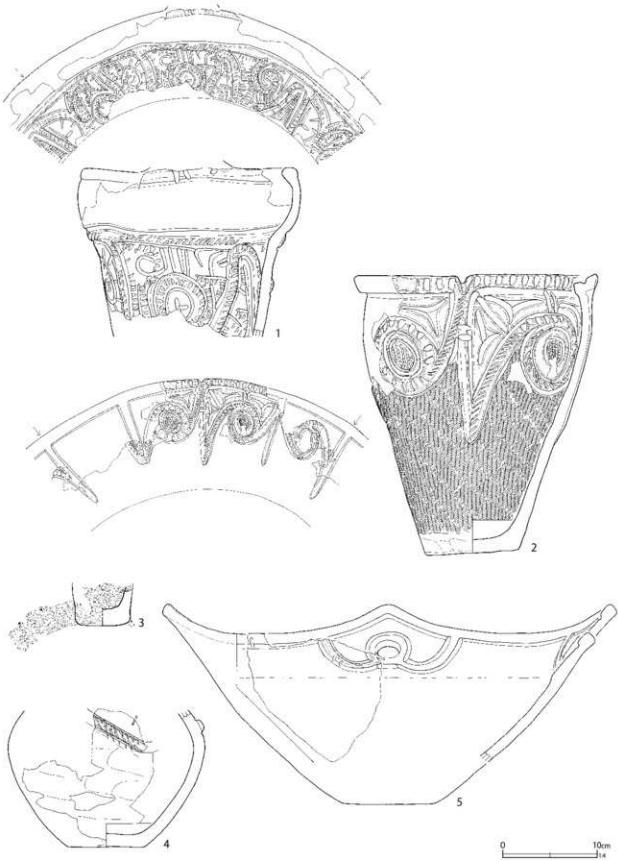
ＳＪ37ﾋﾟｯﾄ跡
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子微量
炭化物粒子・ローム小ブロック少量
3　暗茶褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子微量　炭化物粒子少量
4　暗黄褐色土　２層に近似　ソフトローム混入



第267図　第37号住居跡（２）・遺物出土状況

や長い楕円形を呈し、長径5.62m、短径4.85m、深さ0.35mを測る。

壁溝は２本検出された。外側の壁溝１は北側の壁際に重複しながら一部が残るのみであるが、内側に全周する壁溝２より新しいと思われる。柱穴は22基検出された。北西方向に主軸を取ると、東



第268図　第37号住居跡出土遺物（1）

第111表　第37号住居跡柱穴計測表（第266図）

ピットNo.	長径（cm）	深さ（cm）	ピットNo.	長径（cm）	深さ（cm）	ピットNo.	長径（cm）	深さ（cm）	ピットNo.	長径（cm）	深さ（cm）	ピットNo.	長径（cm）	深さ（cm）
P 1	43.0	55.0	P 2	23.0	27.0	P 3	34.0	30.0	P 4	45.0	58.0	P 5	40.0	35.0
P 6	52.0	60.0	P 7	30.0	40.0	P 8	36.0	65.0	P 9	45.0	65.0	P 10	43.0	40.0
P 11	55.0	63.0	P 12	40.0	50.0	P 13	40.0	45.0	P 14	35.0	60.0	P 15	38.0	50.0
P 16	30.0	10.0	P 17	35.0	63.0	P 18	42.0	70.0	P 19	37.0	45.0	P 20	50.0	65.0
P 21	47.0	65.0	P 22	40.0	60.0	P 23	67.0	15.0						

第112表　第37号住居跡出土復元土器観察表（第268図）

番号	器高（cm）	口径（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	備考
268-1	[17.8]	(22.4)	－	－	60%
2	29.6	(25.6)	－	9.8	70%
3	[4.5]	－	6.4	5.2	30%
268-4	[14.6]	－	20.8	(10.0)	20%
5	[13.1]	－	－	－	30%

西に分かれて柱穴が集中する箇所があり、西側ではP11周辺、P9周辺、P6周辺、これらに対応する位置で東側ではP20周辺、P19周辺、P15周辺に2～4基程のピットの集中がみられる。したがって、恐らく6本柱の住居跡が何回かの建て替えを行って、柱穴が集中したものと判断される。

柱穴は重複状況、深さ及び配置から主柱穴を2時期に分けられそうである。新しい外側の壁溝1に対応すると思われるのがP6、9、11、21、17、1、内側の古い壁溝2に対応すると思われるのがP4、8、14、20、17、15で、いずれも6本柱穴と思われる。その他、組み合わない柱穴等を合わせると、少なくとも1回以上の建て替えが行われた可能性がある。したがって、住居跡は2回以上の住み替えが行われたことが想定される。

主柱穴の深さは、P1＝55cm、P4＝58cm、P6＝60cm、P8＝65cm、P9＝65cm、P11＝63cm、P14＝60cm、P15＝50cm、P17＝63cm、P19＝45cm、P20＝65cm、P21＝65cmである。

炉跡は地床炉で、住居跡中央部やや北寄りの奥壁寄りに検出された。長径65cm、短径58cm程の掘り込みを有し、20cm程掘り込まれた中央部分に土器の上半部が埋設されていた。炉床面及び2・4層部分は被熱による焼土化が弱い。埋甕炉の使用期間が短かったのであろうか。

埋甕は検出されなかった。

炉の南側の床面上に数cmの厚さに灰白色粘土が堆積する部分が検出された。土層断面の観察からは、住居跡が埋まりきらない段階で掘り込まれた遺構（6層部分）に属するようである。灰白色粘土とともに土器群が出土している。

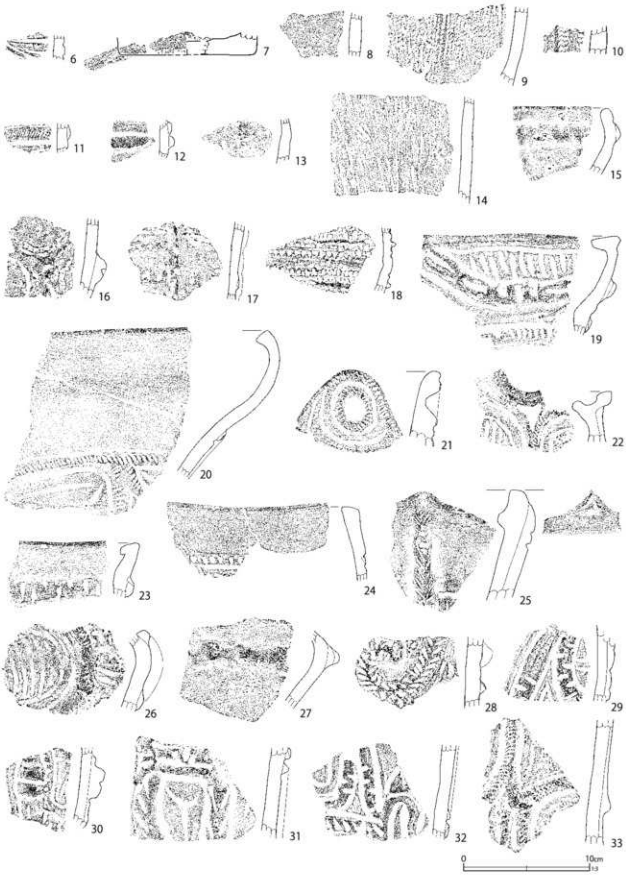
住居跡は炉体土器から、勝坂式新期段階の可能性が高い。

遺物は第268図1～第271図60の土器類、石器類が出土した。

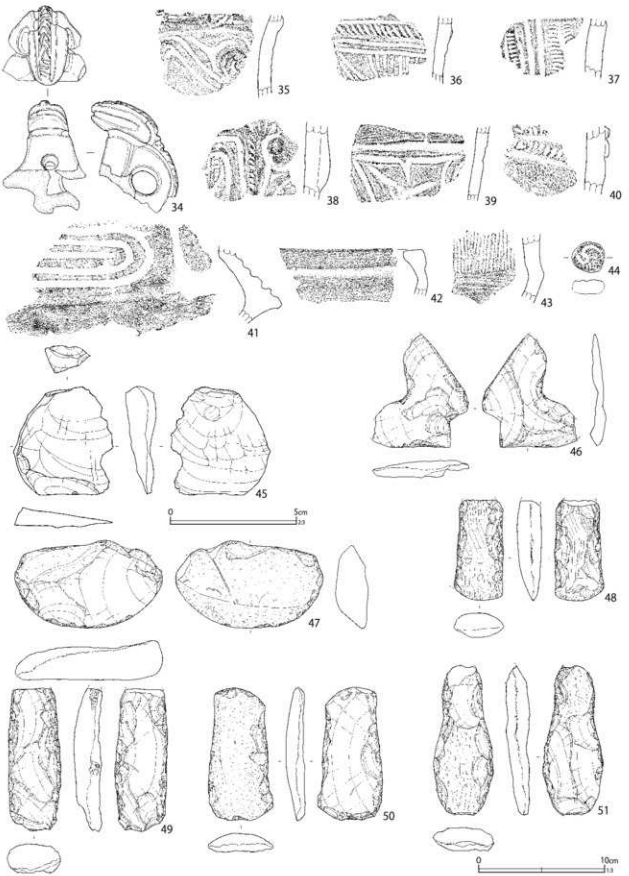
土器は1～43である。1は炉体土器である。6、7はP1、8はP2、9はP4、10はP7、11はP8、12はP9、13、14はP11、15はP12からの出土である。

1は内湾する無文の口縁部が開き、頸部で括れる深鉢である。胴下半部を欠き、口唇部の把手も剥落している。炉体土器として埋設される際に、もぎ取られていた可能性がある。胴部には縦位区画する垂下隆帯と渦巻文を組み合わせて連結するモチーフを描いているが、モチーフの崩れが著しい。隆帯は刻みを施し、モチーフ間に施文する沈線文や刺突文、爪形文も粗雑な施文となっている。勝坂式終末の土器である。

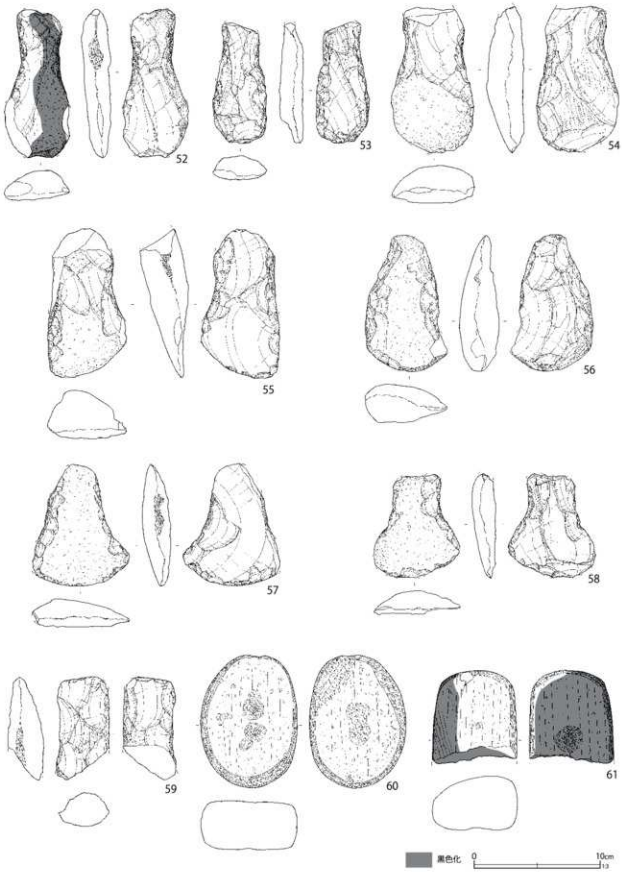
2は口縁部が開く深鉢形土器で、口縁部外端に隆帯を巡らせ、受け口状の口縁部を構成する。口唇部外端には縦位の刻みを施している。胴部は口縁部から垂下する4本隆帯で4分割し、隆帯から派生する渦巻文を左右に連結する構成をとる。隆帯には斜位の刻みと、隆帯縁に押圧状の刻みを施している。渦巻文の円形区画文化した区画内に、集合結節沈線を充填施文する。



第269図　第37号住居跡出土遺物（2）



第270図　第37号住居跡出土遺物（3）



第271図　第37号住居跡出土遺物（4）

第113表　第37号住居跡出土石器観察表（第270・271図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
270 － 45	剥片	Ⅱ①	チャート	4.3	4.0	1.2	15.5	
46	スクレイパー	Ⅰ1①イ	ホルンフェルス	[9.0]	[7.6]	1.3	60.6	
47	スクレイパー	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	7.0	11.8	3.1	278.3	
48	磨製石斧	Ⅱ2②ア	砂岩	[8.0]	3.9	1.9	89.8	
49	打製石斧	Ⅱ2②ア	ホルンフェルス	[11.4]	4.2	2.3	148.0	
50	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.6	5.2	1.5	99.2	
51	打製石斧	Ⅲ2①ア	緑色岩	[11.9]	4.8	1.9	129.9	
271 － 52	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[11.8]	[5.2]	2.3	149.0	表面一部黒色化
53	打製石斧	Ⅲ1②ア	ホルンフェルス	[9.6]	4.3	2.0	88.2	
54	打製石斧	Ⅲ2②イ	緑色岩	[11.6]	6.5	3.0	250.6	
55	打製石斧	Ⅲ2②ア	砂岩	[11.9]	6.3	3.9	200.9	
56	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.9	[6.5]	3.1	227.0	
57	打製石斧	Ⅲ1②ア	砂岩	9.7	[7.7]	2.3	153.7	
58	打製石斧	Ⅲ2①ア	ホルンフェルス	[8.3]	6.9	1.9	90.2	
59	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[8.2]	[4.2]	2.9	90.7	
60	磨石	Ⅱ1-3①ア	閃緑岩	10.5	7.7	3.9	521.7	
61	磨石	Ⅱ3②ア	閃緑岩	[7.4]	6.7	4.3	332.9	表裏面一部黒色化

3は地文に単節ＲＬを施文する、小形深鉢の底部である。

4は、全容は不明であるが壷形の土器で、刻みを施す斜位の隆帯を施文している。

5は波状口縁を呈する浅鉢で、波頂部下の円孔とそれを取り囲む内文を有している。

破片では、16 ～ 17は押引沈線文を施文する阿玉台Ⅱ式と思われ、17には粗い襞状の整形痕が残っている。18は隆帯脇に複列の押引刺突文を施文しており、阿玉台Ⅱ式並行期の藤内式段階の土器と思われる。

19 ～ 43は大半が勝坂式終末段階の土器群と思われる。19は口縁部文様帯を有するキャリパー形土器で、口唇部が幅広く内折する。口縁部に交互刺突を施す連鎖状隆帯で半月状の区画を施し、区画内に沈線の上下差し切り文を充填施文する。

20は内湾する無文の口縁部が大きく開き、胴部に刻み隆帯でモチーフを描き、爪形文を伴わない三叉文等を施文するが、モチーフが単純化しているようである。21は波状口縁部に沈線の円形モチーフを施文する。22は内湾する口縁部に円窓を有する把手を付けている。23 ～ 25は無文の口縁部を有するもので、23、25は口縁部が外反し、24は内傾する器形である。23は口縁部区画隆帯に交互刺突文を施文し、25の波頂部からの垂下隆帯に「ハ」字状の刻みを施す。

26、27は口縁部破片、28 ～ 33、35 ～ 40は胴部破片で、胴部破片の多くは円筒形土器の胴部と思われる。いずれもモチーフ描線である隆帯に、交互刺突文や「ハ」字状刻みを施している。隆帯脇には沈線を沿わせ、充填文に爪形文を施文しないものが多い。37は新段階になる可能性もある。43は張り出す底部で、撚糸文Ｒを施文する。

34は灰白色粘土とともに出土した蛇頭状の橋状把手であり、口の表現と頭部から背中にかけての刻みを有する隆帯の表現がリアルである。

41は胴部が屈曲する浅鉢、42は内湾する口縁部の浅鉢である。

土製品では、44の土器片を利用した土製円盤が１点出土した。

石器は45 ～ 61が出土した。

45は剥片である。

46、47は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。

48は磨製石斧である。正面及び裏面の両側縁に認められる剥離は研磨後に施されている。再利用

に伴う調整剥離であろうか。

49～59は打製石斧である。49、50は短冊形を呈し、49が両刃、50が片刃である。51～58が撥形を呈する。刃部を欠く58を除いて、いずれも刃部は両刃である。

60、61は磨石で、59は両側面に整形が施されている。

第38号住居跡（第272～第275図）

N－12区に位置する。住居跡の東側で第２号溝と重複し、覆土の一部が壊されている。また、西側に第52号土壙が隣接する。住居跡の平面形は、長径3.21m、短径3.11m、深さ0.23m程の小形の住居跡で、不整円形を呈する。

壁溝は検出されなかった。壁は床から緩やかに立ち上がる。

柱穴は８本検出された。重複状況、深さ及び配置から、主柱穴と思われるものはＰ１～４の４基である。なお、Ｐ７はＰ３に壊されており、また一部炉跡と重複していることから、本遺構には伴わない可能性がある。また、中央部のＰ８は覆土が張り床状に固いことから、住居跡に伴わないものと思われる。したがってこの住居跡は建て替え等のない、１回居住の住居跡と判断される。

主柱穴の深さは、Ｐ１＝67㎝、Ｐ２＝47㎝、Ｐ３＝55㎝、Ｐ４＝52㎝である。

炉跡は地床炉で、住居跡中央北寄りに検出された。径50㎝程で、中央部には被熱による焼土化が認められる。

また、炉内の南側で入り口部方向に対峙する位置で、扁平横長な礫に大形の胴部破片を横にして立てかけたような状態で出土した。石囲埋甕炉ではないが、炉の一部として機能していた可能性がある。

さらに、住居の廃棄後と思われるが、炉の北側の奥壁側に浅鉢形注口土器１個体を、炉側である入り口部方向に向けて正位で設置していた。隣接してピットが存在するが、関係性は不明である。埋甕は検出されなかった。

住居跡は出土遺物から、勝坂式中段階の藤内式期の所産と思われる。

遺物は第273図１～第275図37の土器類と石器類が出土した。

土器類は、32は炉内、６はＰ４、７はＰ６からの出土である。

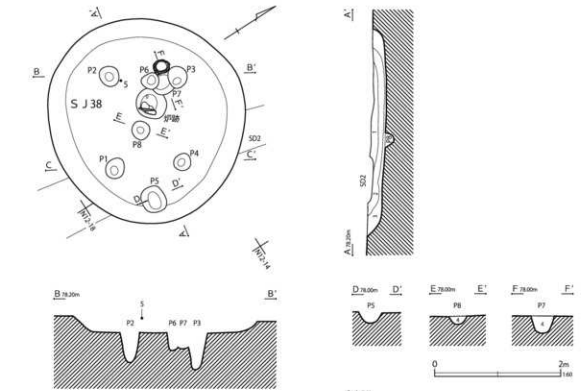
32は深鉢形土器胴部の大形破片である。単節ＲＬを横位施文する地文上に、間隔を空けて２本の横位指頭状沈線を施文し、胴部文様帯を横位分割している。

１は設置されていた浅鉢形注口土器で、注口部を欠損する。口縁部が強く内折する浅鉢に注口部が付くもので、注口部は直上方向に付けられている。平面形は隅丸方形状で、１辺の中央部が突出した五角形を呈し、四隅には円孔の空く鰭状突起が付く。注口部は１辺が突出する部分の口唇部上に付いている。四隅の鰭状突起間には刻みを施す低隆帯で楕円区画文を施しており、注口が付く部分のみ異なるモチーフを施文する。モチーフや刻みは幅広の先割れ状工具による連続押引文で施文している。胴部の三角形状の突出部を頭に、四隅の鰭状の突起を手足に見立てると、亀形の容器にも見える。出土状況からも、何らかの祭祀的な意味合いが看取される。

２は隆帯で楕円文を区画する胴部破片で、区画内には縦位沈線を施文する。

３は口縁部が内湾して開き、胴部が括れるキャリパー形土器で、口縁部文様帯に集合沈線の鋸歯状文を施文する。口縁部にはドーナツ状の把手と、非対称の小突起が付いている。

４は箱状の眼鏡状把手が付く波状口縁土器で、円窓の空く大形把手の右側に刻みを施した蛇行隆帯を垂下する。正面把手の円窓下部には、３列の蓮華文を伴う蛇行沈線を垂下している。頸部の区画や渦巻文には、交互刺突文を施した刻み隆帯を使用している。

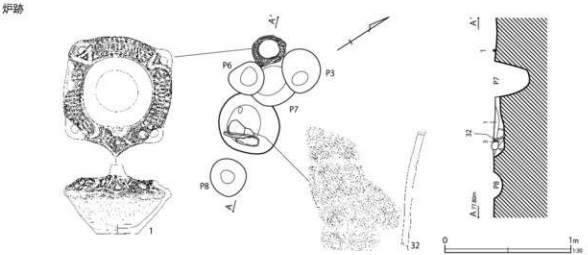


S J 38
1　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量　緻密な層
　　土器を多く出土
2　暗褐色土　ローム粒子やや多量　ロームブロック少量
3　暗黄褐色土　ローム粒子・炭化物粒子やや多量
　　ロームブロック多量　しまり良い

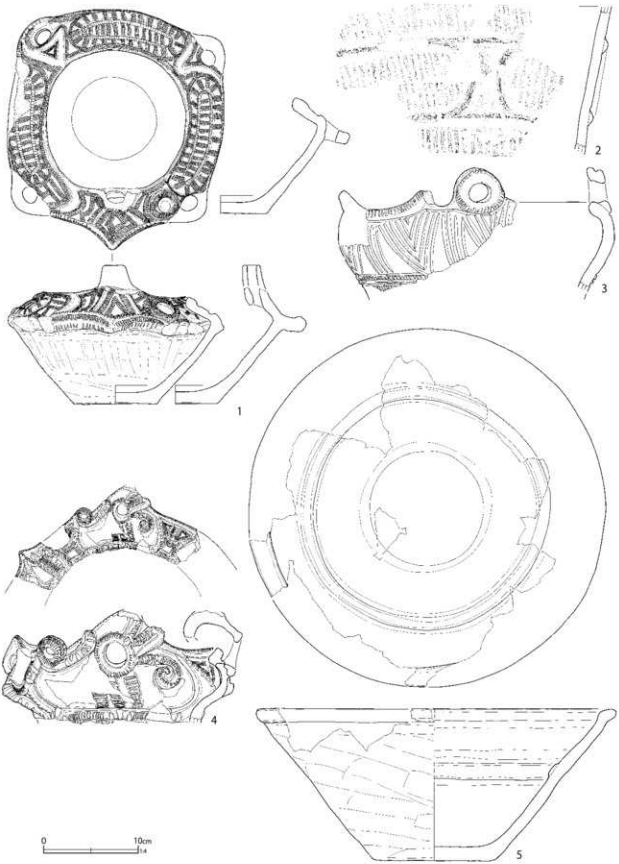
S J 38 ピット
4　黒褐色土　焼土・炭化物粒子含む　しまり非常に良い

S J 38 炉跡
1　暗褐色土　ローム・焼土粒子少量
2　暗赤褐色土　焼土粒子多量　焼土小ブロック少量
3　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量
4　黄褐色土　ソフトローム土主体

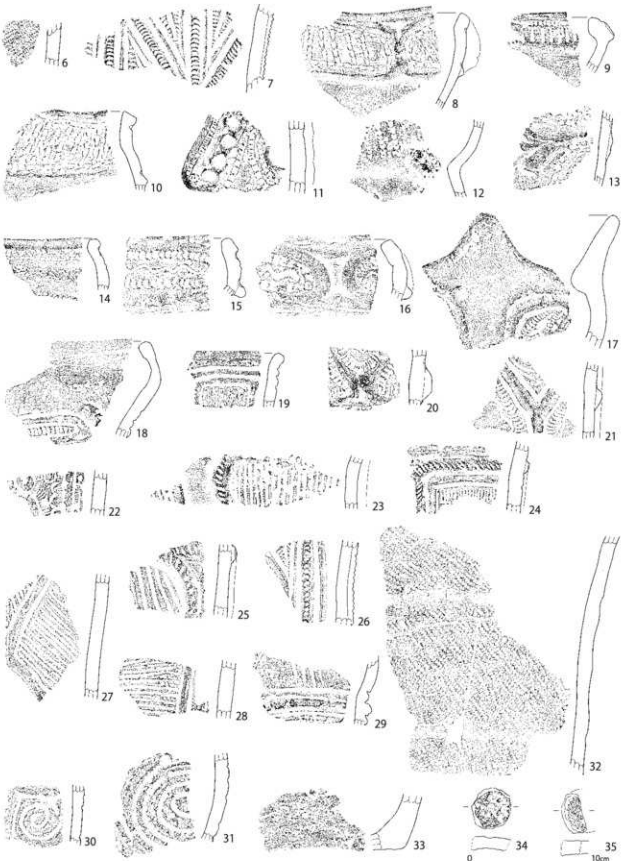
炉跡



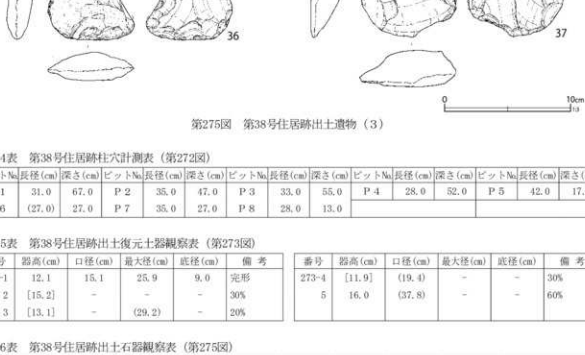
第272図　第38号住居跡



第273図　第38号住居跡出土遺物（1）



第274図　第38号住居跡出土遺物（2）



第275図　第38号住居跡出土遺物（3）

第114表　第38号住居跡柱穴計測表（第272図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	31.0	67.0	P 2	35.0	47.0	P 3	33.0	55.0	P 4	28.0	52.0	P 5	42.0	17.0
P 6	(27.0)	27.0	P 7	35.0	27.0	P 8	28.0	13.0						

第115表　第38号住居跡出土復元土器観察表（第273図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
273-1	12.1	15.1	25.9	9.0	完形
2	[15.2]	-	-	-	30%
3	[13.1]	-	(29.2)	-	20%
273-4	[11.9]	(19.4)	-	-	30%
5	16.0	(37.8)	-	-	60%

第116表　第38号住居跡出土石器観察表（第275図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
275 - 36	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.5]	6.8	2.3	157.5	
37	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[9.2]	[7.7]	2.9	226.2	

5は口縁部を大きく欠損する浅鉢で、口縁部が直線的に開く器形で、内面中央部に稜状の隆帯が巡る。

破片では、8～16は隆帯脇等に角押文状の押引連続刺突文を施文する土器群で、8、10、13、14は雲母を含む阿玉台Ⅱ式に比定される土器である。他は並行期の新道式から藤内式にかけての土器群である。

17～22は幅広の爪形文やパネル状区画文を施す勝坂式中段階の土器群である。23～28は刻み隆帯で区画文等を施し、沈線文を充填施文するものである。30、31は沈線の渦巻文を施文するもので、30は三叉文と組みになったモチーフを描いている。いずれも勝坂式新段階の土器群であろう。

33は底部破片である。

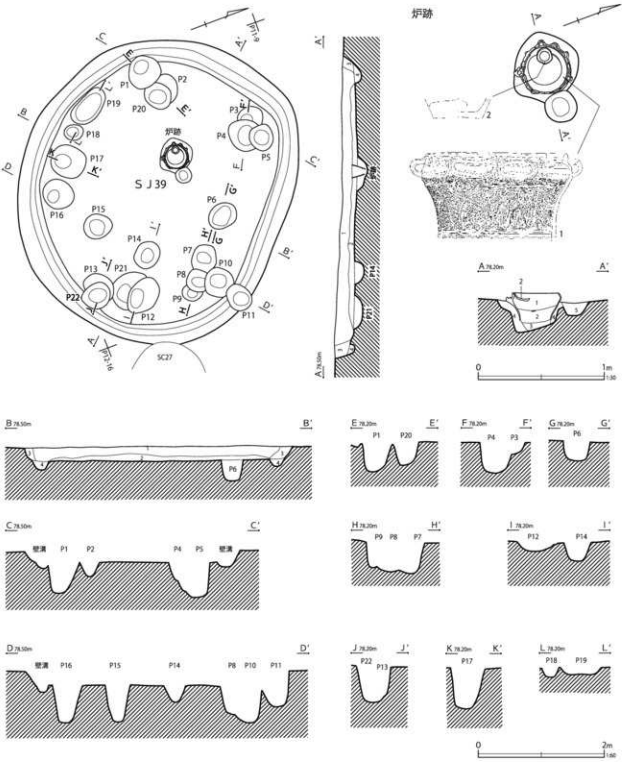
土製品としては、34、35は土器片を利用した土製円盤である。

石器は36、37が出土した。ともに撥形を呈する打製石斧の刃部片で、両刃である。

第39号住居跡（第276～第291図）

P－11・12区に位置する。東壁の一部が第27号集石土壙によって壊されている。第27号集石土壙の方が新しい。住居跡の平面形は長径4.80m、短径4.35m程の不整楕円形を呈する。深さは0.25mとやや浅い。

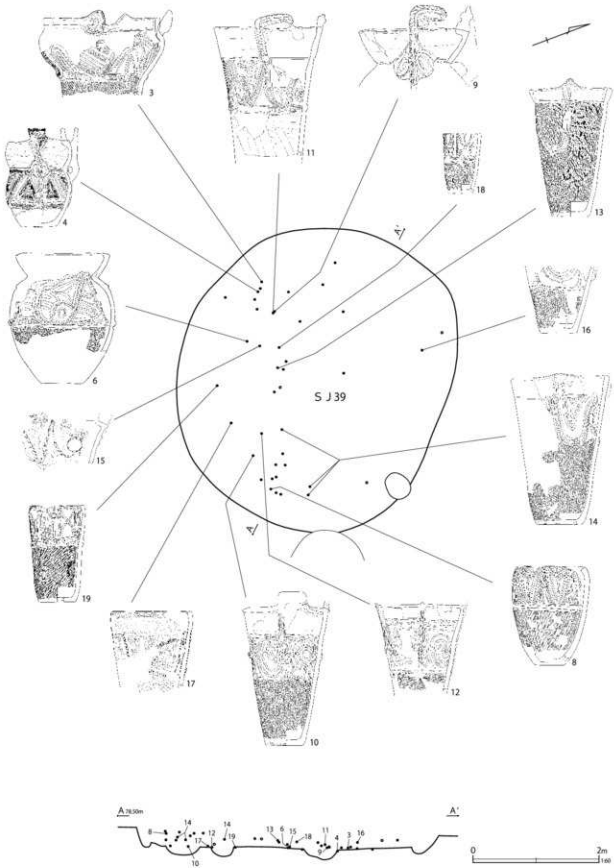
壁溝は1本検出され、壁直下を全周する。柱穴は22基検出されたが、隣接する柱穴でまとめることができる。長軸方向を主軸とすると、軸線上の入り口部付近に想定されるP22周辺を境として、西側にP1周辺、P16周辺、東側にP4周辺、P10周辺に複数の柱穴が集まり、合計5箇所に柱穴の集中が見られる。したがって、5本主柱の



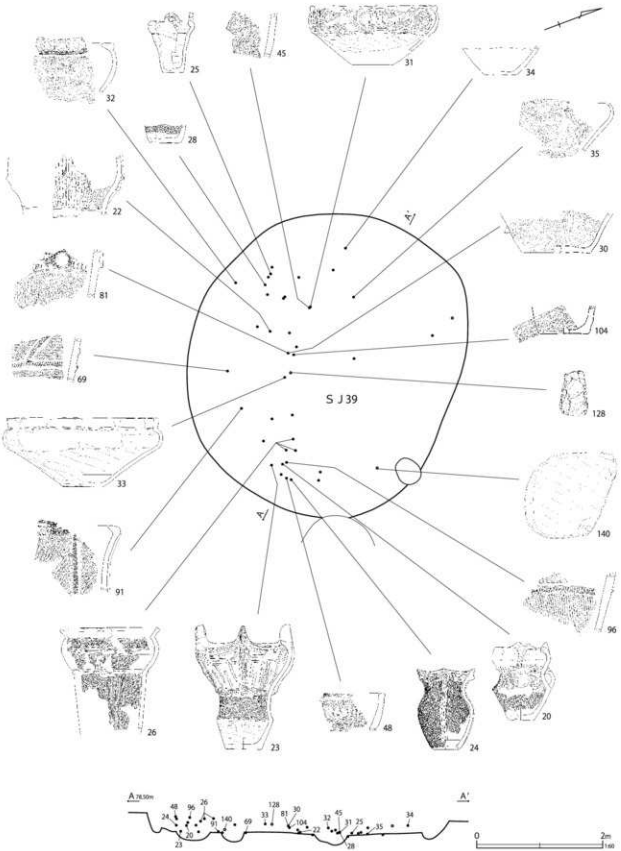
SJ39
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物粒子少量
2　暗褐色土　　ローム粒子多量
　　炭化物粒子・ソフトローム・ローム小ブロック少量
3　褐色土　　ソフトローム多量
4　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　炭化物粒子少量（壁溝）

SJ39炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物微量
2　暗褐色土　1層に比べ黒味強い　ローム粒子・炭化物粒子少量
　　ローム小ブロック微量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
4　黒褐色土　ローム・焼土粒子少量　粘性強い
5　黒褐色土　ローム・焼土・炭化物粒子少量　しまり良い

第276図　第39号住居跡



第277図　第39号住居跡遺物出土状況（1）



第278図　第39号住居跡遺物出土状況（2）

第117表　第39号住居跡柱穴計測表（第276図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	50.0	46.0	P 2	47.0	37.0	P 3	38.0	15.0	P 4	(50.0)	46.0	P 5	42.0	55.0
P 6	46.0	32.0	P 7	(45.0)	47.0	P 8	35.0	42.0	P 9	32.0	40.0	P 10	46.0	55.0
P 11	45.0	27.0	P 12	66.0	15.0	P 13	50.0	55.0	P 14	43.0	30.0	P 15	45.0	60.0
P 16	50.0	60.0	P 17	55.0	63.0	P 18	27.0	15.0	P 19	65.0	13.0	P 20	45.0	37.0
P 21	65.0	15.0	P 22	45.0	58.0									

住居跡が複数回建て替えられた可能性が看取される。主柱穴は重複状況、深さ及び配置から、より新しいと思われるのはP22、16、１、５、10の５基の組み合わせで、さらに古い段階としてP13、17、20、４、８の５基の組み合わせが推定される。

以上は、５本目の柱をP22の入り口部付近に想定した場合である。また、別の視点では、P５とP10の間を入り口部とし、主軸を南西方向に想定し５本目を主軸奥側のP16に推定することも可能である。この場合、炉の位置が不安定となる。住居跡の形状が西側にやや張り出した楕円形となっていることから、新旧の住居跡の間で軸線の変更があった可能性も指摘しておきたい。

主柱穴の深さは、P１＝46cm、P４＝46cm、P５＝55cm、P８＝42cm、P10＝55cm、P13＝56cm、P17＝63cm、P20＝37cm、P22＝58cmである。

炉跡は、中央部やや北西寄りに埋甕炉が検出された。径50cm程の掘り込みいっぱいに土器上半部を埋設する埋甕炉である。東側に径25cm、深さ10cm程の小ピットが存在するが、炉との関係は不明である。土器の外側及び炉底面とも被熱の痕跡は少ない。住居跡の建て替えが行われているが、炉の位置は変更されなかったものと判断される。

埋甕は検出されなかった。

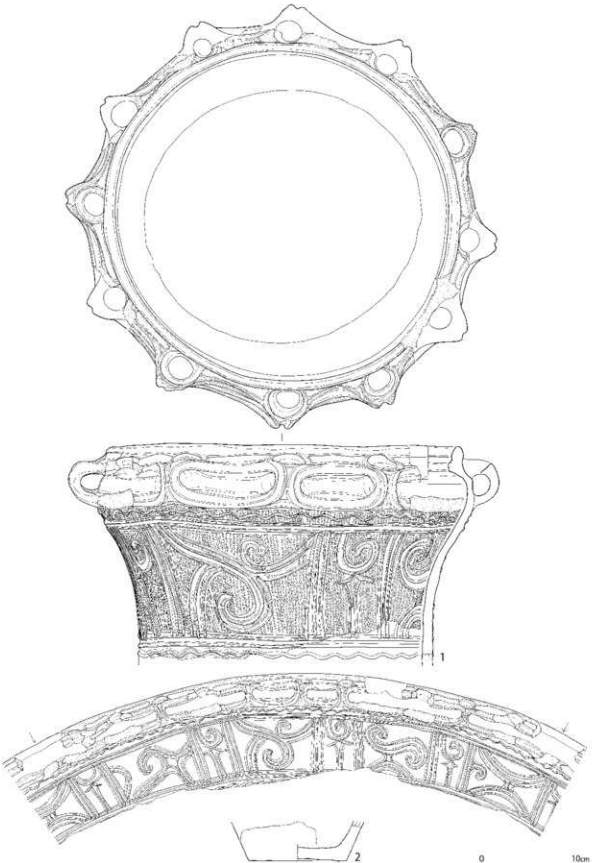
住居跡は炉体土器から、最終段階で勝坂式終末期から加曽利ＥⅠ式初頭期の所産と思われる。

遺物は第279図１～第291図141の土器類と石器類が出土した。

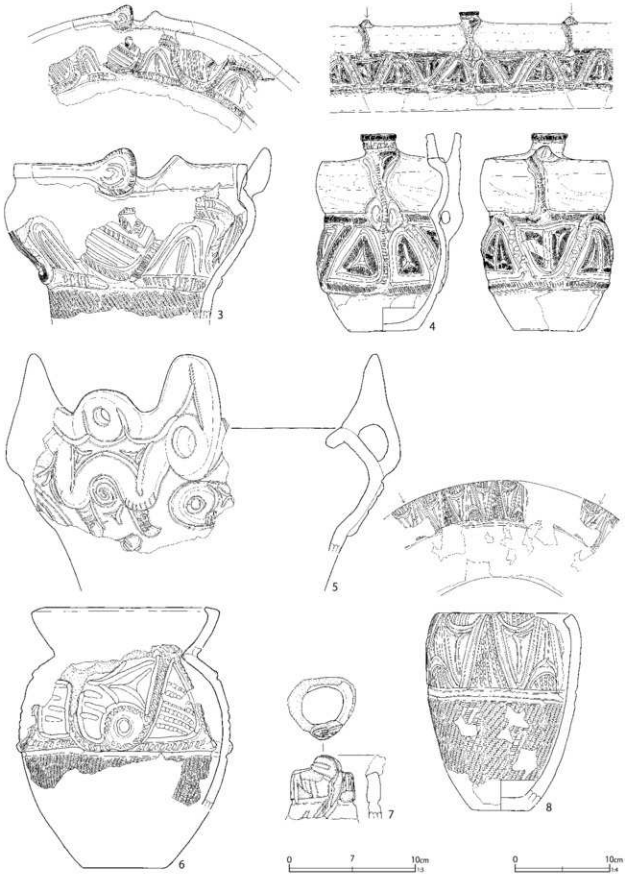
覆土中から、多くの遺存率の高い土器群が出土した。特に南西側半面に多く、出土レベルもほとんど間層を挟まず、むしろ床面直上のものが多いことから、住居廃絶後あまり時間をおかない段階で意図的に廃棄が行われたものと推察される。入り口部付近に想定した南東部では８、10、14、20、23、24、26が、北西部では３、４、11、13、18などが出土した。中には、４のように逆位に埋設され、その上部に３が正位で出土しており、通常とは異なる出土傾向を示すものもある。また、24が逆位で、その上に23が横たわるように出土しており、廃棄時の同時性を示しているものと思われる。

また、第286図36、37はP１、38はP２、39はP10、41はP13、42、43はP15、44、45はP16、46はP18からの出土である。

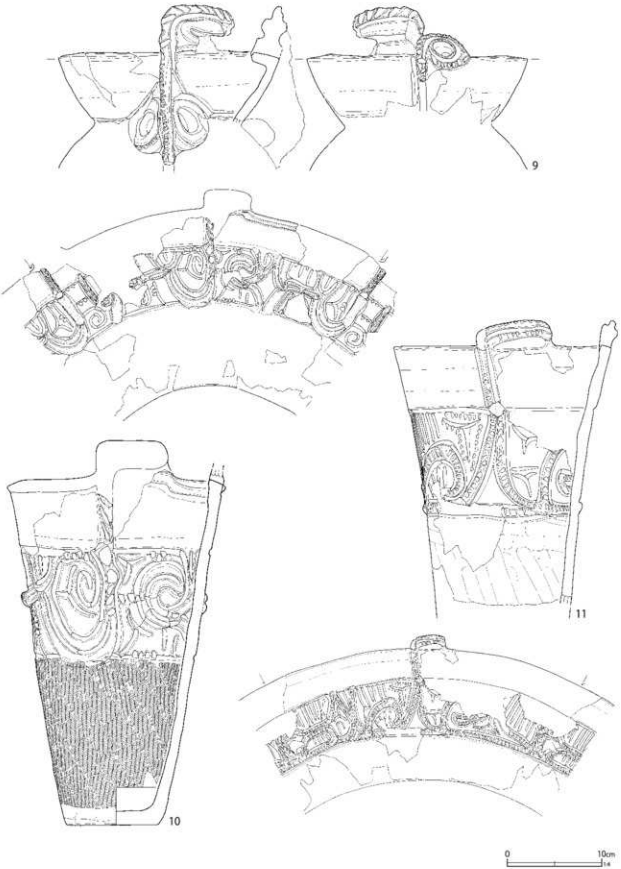
１は内湾する口縁部が緩く開く器形で、括れの少ない筒形状の胴部がやや窄まる底部へと移行する器形と思われる。口縁部は短い口唇部が立ち、裏面に凹線状の沈線を巡らせている。口唇部から口縁部への移行部に、口縁部の箱状を呈する楕円区画文と一体となったランプ状文を12単位で配し、楕円区画文も組み合って12単位を構成する。頸部及び胴部の区画は、隆帯というよりも細い隆線で描く小波状文を挟んだ２本隆線で行っている。胴部は地文に撚糸文Ｌを施文し、同様な隆線３本を基本にして縦位区画を行い、３本ないし２本隆線でモチーフを描いている。胴部の縦位区画は狭い部分と、広い部分を交互に区画し、それぞれ４単位の、合計８単位を構成する。幅狭区画では渦巻文と剣先状文を上下に組み合わせるモチーフを構成し、１箇所のみ渦巻文を弧線文へと変化させ



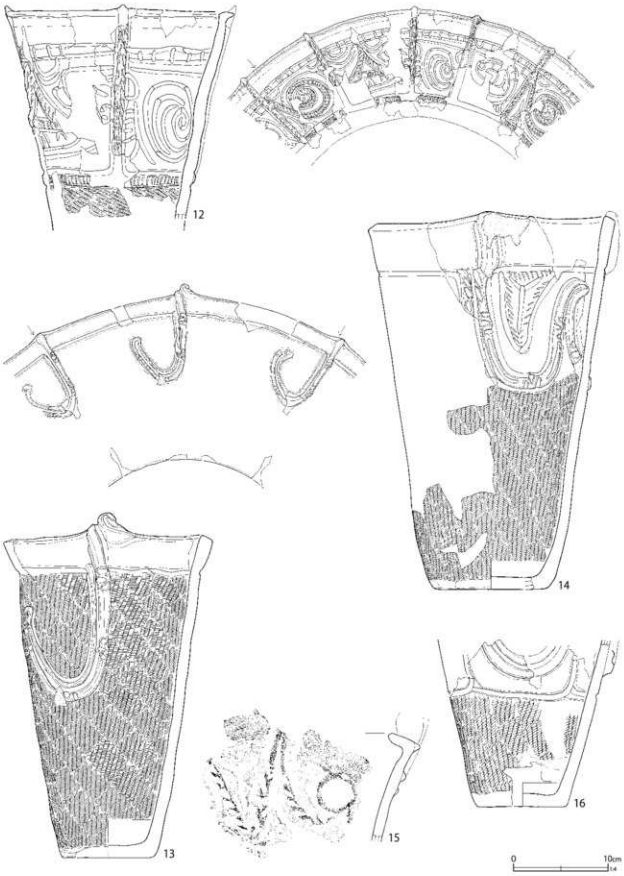
第279図　第39号住居跡出土遺物（1）



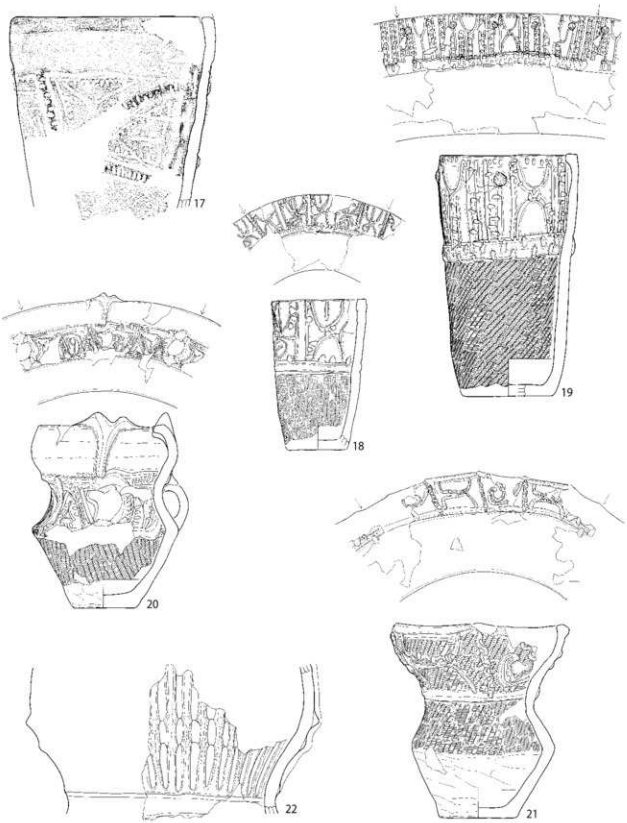
第280図　第39号住居跡出土遺物（2）



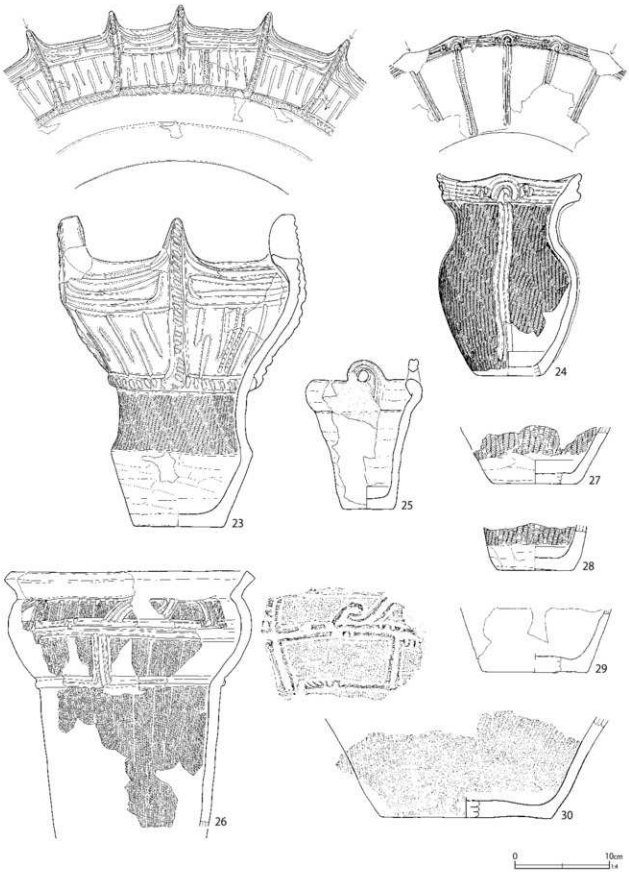
第281図　第39号住居跡出土遺物（3）



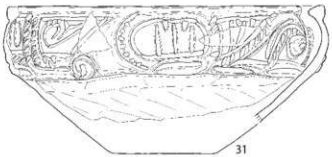
第282図　第39号住居跡出土遺物（4）

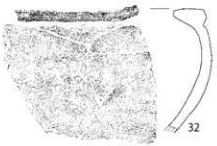


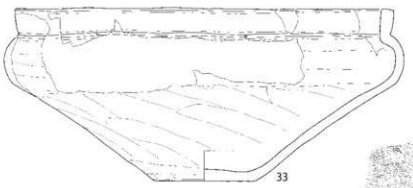
第283図　第39号住居跡出土遺物（5）

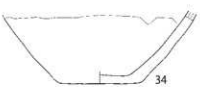


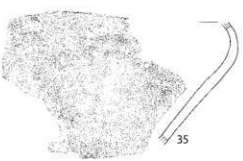
第284図　第39号住居跡出土遺物（6）











第285図　第39号住居跡出土遺物（7）

第118表　第39号住居跡出土復元土器観察表（第279～285図）

番号	器高（cm）	口径（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	備考
279-1	[22.8]	36.4	－	－	50%
2	[4.1]	－	14.1	10.4	10%
280-3	[16.7]	(24.8)	－	－	40%
4	20.6	12.8	－	7.2	完形
5	[21.0]	(28.8)	(38.0)	－	20%
6	[17.1]	－	(22.8)	－	30%
7	[5.4]	5.0	5.8	－	40%
8	[20.2]	14.2	－	－	70%
281-9	[16.6]	22.8	－	－	40%
10	[37.3]	(23.2)	－	9.6	70%
11	[30.1]	(22.9)	－	－	70%
282-12	[22.2]	23.8	－	－	50%
13	36.3	21.9	－	9.4	完形
14	39.9	(26.0)	－	－	30%
15	[12.9]	－	－	－	20%
16	[17.6]	－	18.2	9.3	40%
283-17	[19.8]	(22.2)	－	－	20%
18	[15.4]	10.0	－	－	70%
283-19	25.4	14.5	－	(9.6)	80%
20	20.7	13.2	－	6.4	80%
21	20.4	(18.6)	－	8.2	70%
22	[16.5]	－	(30.8)	－	30%
284-23	32.9	25.2	－	9.4	完形
24	21.4	15.3	－	(6.8)	60%
25	15.8	10.6	－	5.4	90%
26	[27.1]	(26.4)	－	－	40%
27	[6.2]	(8.8)	－	－	10%
28	[4.9]	－	－	7.8	10%
29	[6.7]	－	15.8	10.9	10%
30	[10.3]	－	30.0	18.0	10%
285-31	[12.2]	(33.2)	－	－	40%
32	[13.2]	－	－	－	20%
33	18.2	(40.2)	10.4	－	60%
34	[7.3]	－	20.6	8.6	20%
35	[14.4]	－	－	－	30%

ている。幅広区画では弧線文、渦巻文、「S」字状文を組み合わせたそれぞれ異なるモチーフを施文している。したがって、胴部は細かく見れば８単位、幅狭と幅広の区画を合わせて１単位と見れば、整然とした大きな４単位構成であると理解される。

しかし、口縁部のランプ状文は12単位（３の倍数）で胴部との整合性はない。また、胴部の文様も１単位を崩す部分と、全てが異なる文様を施文するなどの対称性を崩す構成が見られる。

したがって、器形や文様帯構成等の形成は、大木式的であるが、地文に撚糸文を施文し、文様の構成原理等に３単位、４単位が融合する点などを考慮すると、勝坂式と大木式の折衷した土器であることが理解される。１個体の中に多系統の要素を内包する異系統併施文土器と評価される。この土器が炉体土器に使用されていたことも偶然ではなく、集落内において何らかの意味を有していたものと認識しておきたい。

２は炉の上部から出土した底部で、炉とは直接的な関係はないものと思われる。

３は口縁部文様帯を有し、胴部に縄文を施文するキャリパー形土器で、口縁部に非対称の把手を付ける。幅広で球形状の口縁部には刻み隆帯で渦巻文を波状に繋ぐモチーフを描くものと思われるが、構成が崩れていると言えよう。区画内には集合沈線を充填施文し、隆帯には交互刺突文を施している。胴部地文は単節ＲＬの横位施文である。

４は逆位で出土しており、下部の遺構にもピット状の掘り込みがあることから、確実ではないが覆土堆積中に埋設された可能性もある。内湾する無文口縁部が立ち、頸部で括れる樽形の深鉢である。口縁部には蛇頭と思われる円柱状の把手が付き、頸部の括れ部の眼鏡状把手まで垂下する。また、この把手の反対側では、頸部の区画隆帯が口唇部まで巻き上がり、蛇尾状を呈する。胴部は刻み隆帯で大振り３単位の波状文を描き、波状間にそれぞれ対向する三角区画を施し、爪形文の沿う三叉文を施文する。

５は多喜窪タイプの深鉢で、胴部は無文になるものと思われる。内湾して開く口縁部には４単位の把手が付くものと思われ、幅広の低隆帯でモチーフを連結するものである。

６は頸部が強く括れ、胴部の張る器形で、胴上半部に刻み隆帯で円形文化した渦巻文を波状隆帯で連結するモチーフを描く。区画内には集合結節沈線や沈線の交互差し切り文を施文する。胴部は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

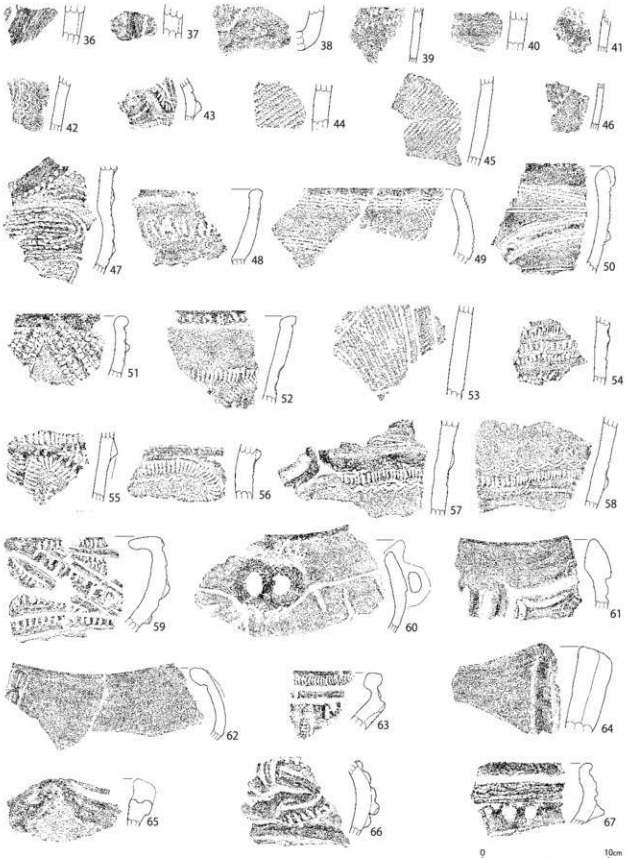
７は４と同様な筒形の把手で、蛇頭が垂下するモチーフを施文する。

８は樽形の器形で、口縁部に沈線の鋸歯状三角文を８単位に施文するものと思われ、上下に対向する16単位の幅狭な三角区画文が構成される。三角区画文内には集合結節沈線を充填する部分と、上下に弧線文と三叉文を組み合わせる構成がある。後者では弧線文内に集合結節沈線と集合沈線を充填施文する部分があり、全体構成が不明であるが単位性を窺わせる部分がある。胴部の地文は０段多条ＲＬの縦位施文である。

９は頸部で強く括れる器形であり、口縁部に左向きの蛇頭が付き、頸部の眼鏡状把手まで蛇体が垂下する構成をとる。口縁部の反対側では、頸部から蛇尾が口唇上に巻き上がってとぐろを巻く文様を施文している。

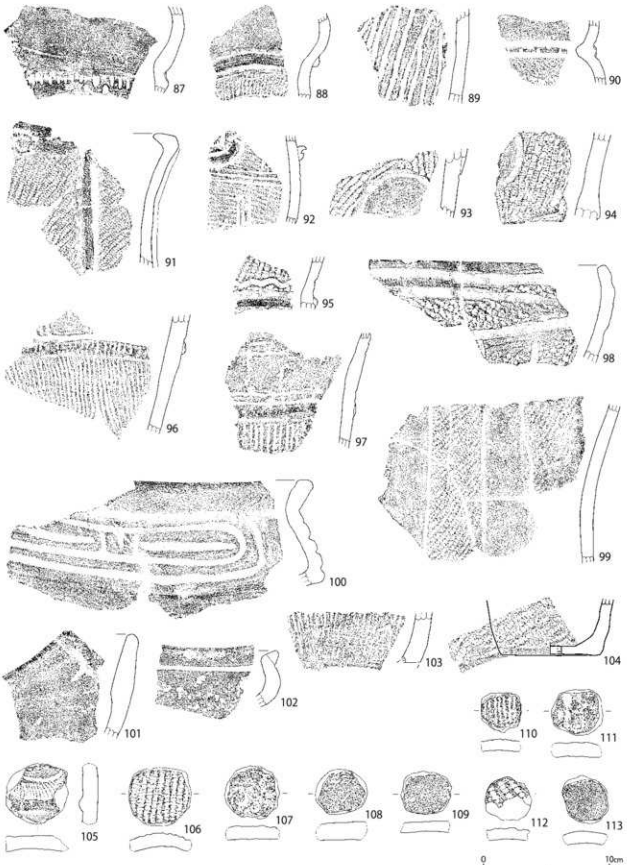
10 ～ 19は円筒形土器である。10、11は口縁部に左向きの蛇頭を有し、胴部に垂下して渦巻文等の連結モチーフを有する点で共通する。胴部モチーフは大きく２単位に構成され、大きくは蛇体を表す刻み隆帯で同様なモチーフを繰り返すが、対応する細かな部分で対称性を外す文様が施文されている。10は地文に０段多条ＲＬの縦走縄文を施文し、11は無文となっている。

12は口縁部に幅の狭い無文帯を区画し、胴部に口唇上より４本隆帯を垂下して、文様帯を４単位に縦位分割する。縦位区画の幅が１箇所狭くな

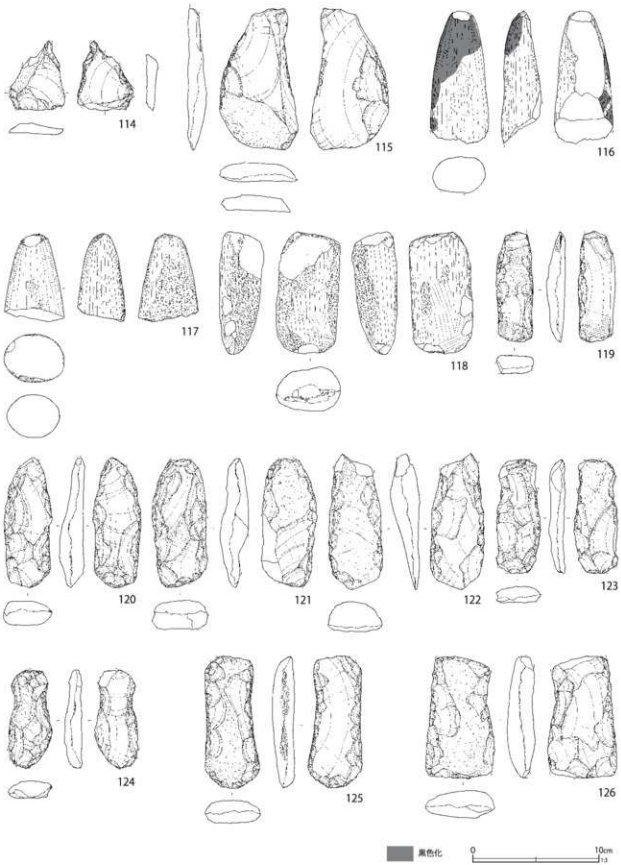


第286図　第39号住居跡出土遺物（8）

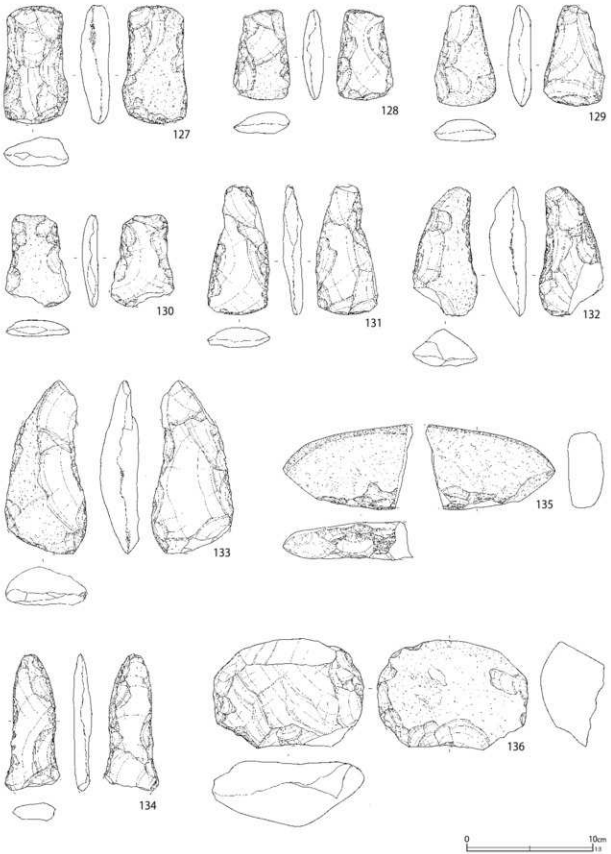
第287図　第39号住居跡出土遺物（9）



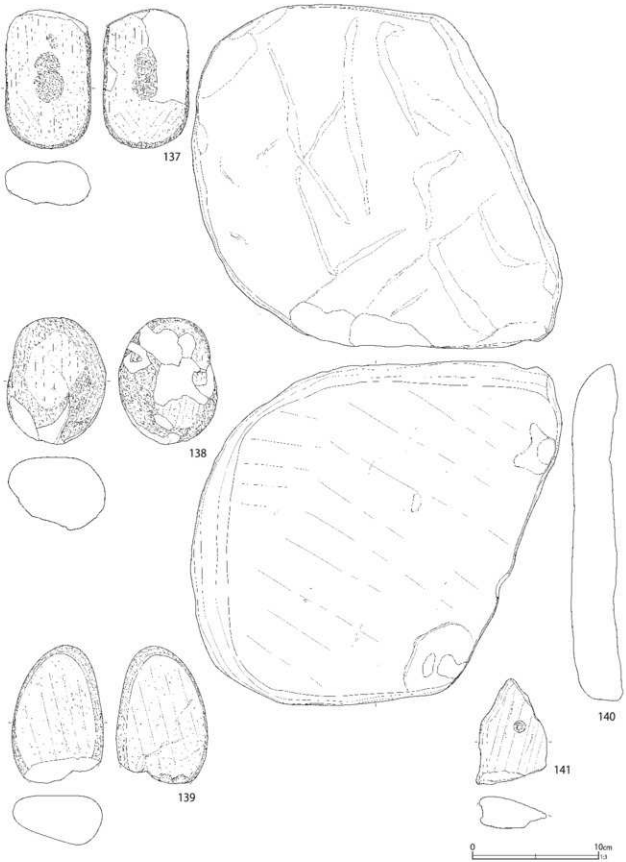
第288図　第39号住居跡出土遺物（10）



第289図　第39号住居跡出土遺物（11）



第290図　第39号住居跡出土遺物（12）



第291図　第39号住居跡出土遺物（13）

第119表　第39号住居跡出土石器観察表（第289 ～ 291図）

番　号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
289 － 114	スクレイパー	Ⅳ②イ	頁岩	[5.5]	[4.4]	1.0	23.3	
115	スクレイパー	Ⅱ2②ア	頁岩	[11.2]	6.2	1.6	101.9	
116	磨製石斧	Ⅰ②ア	緑色岩	[10.5]	4.6	[3.2]	207.8	表裏面一部黒色化
117	磨製石斧	Ⅰ②イ	緑色岩	7.0	4.7	3.8	159.4	磨製石斧からの再利用
118	磨製石斧	Ⅰ②イ	砂岩	9.7	5.0	3.5	284.5	磨製石斧からの再利用
119	打製石斧	Ⅲ②イ	ホルンフェルス	[8.8]	[3.0]	1.5	52.0	
120	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[10.4]	3.8	2.0	82.9	
121	打製石斧	Ⅱ2②ア	砂岩	[10.2]	4.4	2.3	108.4	
122	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[10.8]	4.3	2.3	102.1	
123	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	9.0	3.5	1.3	53.4	
124	打製石斧	Ⅰ②イ	ホルンフェルス	[7.8]	[3.5]	1.4	45.9	
125	打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	10.4	4.4	1.8	115.0	
126	打製石斧	Ⅲ2②ア	砂岩	[9.6]	5.5	2.2	150.7	
290 － 127	打製石斧	Ⅲ2①ア	ホルンフェルス	[9.4]	5.1	2.3	134.8	
128	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	7.1	4.5	1.7	61.9	
129	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	8.0	[4.9]	1.8	80.2	
130	打製石斧	Ⅲ1②ア	ホルンフェルス	7.3	[5.0]	1.3	55.5	
131	打製石斧	Ⅲ1②ア	砂岩	[10.2]	4.9	1.6	79.5	
132	打製石斧	Ⅲ②イ	ホルンフェルス	[10.2]	[5.1]	3.0	141.8	
133	打製石斧	Ⅲ1②イ	砂岩	[13.7]	6.5	3.1	273.9	
134	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[10.8]	4.3	1.5	65.8	
135	礫器	②イ	ホルンフェルス	6.7	[10.3]	3.0	273.4	
136	礫器	①ア	ホルンフェルス	8.7	12.0	5.2	594.1	
291 － 137	磨石	Ⅱ1-3②イ	閃緑岩	[11.1]	6.8	3.5	470.8	
138	磨石	Ⅱ1①イ	砂岩	10.0	7.8	5.8	563.5	
139	磨石	Ⅱ1-3②イ	砂岩	[10.9]	7.2	3.9	472.8	
140	石皿	Ⅲ2①イ	砂岩	29.3	27.2	5.4	5574.5	
141	石皿	Ⅳ②イ	結晶片岩	[8.4]	[5.6]	[2.6]	138.8	

るが、実測図正面から左側２区画は隆帯主導のモチーフを描き、右側２区画は沈線のみでモチーフを描いている。また、狭い１区画は沈線描出側に入り、２対２の対称的な構成の中においても対称性を崩している可能性がある。さらに、隆帯描出側の右区画では隆帯で三角形状のモチーフを描いており、他の区画は全て渦巻文をベースとしている。ここにも、モチーフ描出線の相違を超えて、対称性を崩す構成が理解される。胴部地文は０段多条ＲＬの横位施文である。

13、14は胴部に区画線がなく、口縁部から蛇体状隆帯を垂下するものである。13は２単位の緩い波状口縁を、波状部から交互刺突を施した「Ｊ」字状の蛇体文を垂下する。地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

14はおそらく４単位の緩い波状口縁を呈し、垂下する隆帯モチーフは横展開するものと思われる。胴部地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

15は無文の内折する口縁部を有し、胴部に刻み隆帯で円形モチーフ化した渦巻文を繋ぐモチーフを施文する。16は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する胴部から底部である。

17は無文の口縁部がやや内湾して開く円筒形土器である。胴部に刻み隆帯の襷掛け状のモチーフを構成している。胴部地文は０段多条ＲＬの縦位施文である。

18、19は円筒形の深鉢で、胴中央部辺りを区画し、上半部に沈線でモチーフを描くものである。18は並行沈線を垂下して文様帯を縦位５分割し、それぞれの区画に上下に対弧文を基本とした対向

するモチーフを施文する。胴部地文は0段多条ＲＬの縦走縄文である。

19は交互刺突を施した低隆帯で胴部を区画し、交互刺突を施した多条の並行沈線を垂下して文様帯を４分割しているものと思われる。区画内には三叉文状の「Ｙ」字状文３単位と、上下対弧文を１単位に配する構成をとっている。しかし、口縁部に施文する瘤状貼付文は５単位であり、これも、対称性を崩す構成と思われる。胴部の地文は０段多条ＲＬの縦位施文である。

20、21は平口縁で、胴部が強く括れ、底部が張り出す器形の深鉢である。20は内湾する無文の口縁部が開く器形で、口唇部に非対称の山形突起が付く。突起からは頸部の眼鏡状把手へ隆帯を垂下するが、把手を欠損する。裏面にも同じ位置に眼鏡状把手が付くのか、やはり欠損する。胴部は腰高に張り出した部分より下位に０段Ｒ多条ＲＬの縦走縄文を施文する。底部付近は施文されていない。

21は胴部より上半部に交互押圧を施した隆帯で、縦位区画文と上下対向の櫛形文や渦巻文を施文する。胴部は６単位に区画されているものと思われるが、渦巻文と上下対向櫛形文を交互に配置しているようである。地文は０段多条ＲＬの縦位施文である。

22は大形破片からの復元であるが、強く括れる胴部を無文帯で区画し、上下の文様帯に節々を有する指の関節のような隆帯を密に施文するものである。

23は４単位の山形把手を配する波状口縁で、胴部で括れ、腰高の底部が張り出す器形を呈する。胴上半部は口縁部が内湾しながら開き、山形把手から刻みを施す隆帯を垂下して４単位に分割する。分割された区画には口縁部に枠状区画を施して口縁部文様帯とし、以下の頸部部分に縦位沈線の交互差し切り文を施文する。頸部文様帯区画内も1箇所のみ２列の結節沈線を施文している。胴部地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

24は４単位の波状口縁部が開き、頸部で括れ、大きく張る胴部へ移行する器形である。幅狭に区画する口縁部の波状部に隆帯の渦巻文を配し、下部に２本隆帯を底部付近まで垂下する。口縁部の渦巻文は２本沈線で連結しており、渦巻文との接点部分に交互刺突文を施文している。この交互刺突文も同じものを繰り返さないように施文している。胴部地文は０段多条ＲＬの縦走縄文である。

25は環状把手の付く無文の小形深鉢で、欠損部分が多い。

26は無文の口唇部が開き、球形状の口縁部から筒状の胴部へ移行するキャリパー形深鉢形土器で、底部を欠損する。口縁部は部分的に交互刺突を施す２本隆帯で上下に区画しているようであり、上側には渦巻文を、下側には垂下するクランク状文を構成し、地文に細かな撚糸文Ｌを施文する。

27 ～ 30は深鉢の底部で、27、28は０段多条ＲＬの縦位施文で、29は無文、30は撚糸文Ｌである。

31 ～ 35は浅鉢形土器である。31は内湾して開く口縁部に楕円区画文と渦巻文を連結するモチーフを構成し、楕円区画文内には沈線の差し切り文、渦巻文の余白には三叉文等を施文している。

32は口縁部が内湾し、幅広の口唇部を有する。33は胴部が「コ」字状に屈曲し、口縁部が立つ器形を呈する。34、35は無文の胴部と底部である。

破片では、47 ～ 50は阿玉台式系土器で、複列の平行結節沈線文や爪形文、条線文を施文し、47、49、50は雲母を含む。阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

51 ～ 58は複列の角押文や三角押文、幅広の爪形文を施文するもので、勝坂式古～中段階の土器群である。51、54は狢沢式から新道式、52、53、55 ～ 58は藤内式段階であろう。

59 ～ 96は勝坂式新段階から終末段階の土器群で、大半が終末段階であろう。59 ～ 67、77は口縁部文様帯を有する土器群で、59、62、63、67は口縁部が内湾するもので、64、65は口縁部が

開く器形である。60、61、77は多喜窪タイプの器形である。68～81、85、86は円筒形土器である。83、84はキャリパー形土器の胴部破片である。87、88、90は無文の内湾する口縁部で、90は胴部の括れが強い。91は口縁部が内折し口縁部から隆帯を垂下する。92は胴部が張る器形で平行沈線で懸垂文等を施文する。93、94は磨消縄文で円形のモチーフを描いている。95～97は隆帯の胴部区画部分であり、95は波状沈線が沿い、97は平行沈線が沿う。

98、99は磨消懸垂文を有する加曽利ＥⅢ式のキャリパー形深鉢形土器である。

100～102は浅鉢で、100は「く」字状に屈曲する胴部に、沈線の長方形状区画文を施す。101は波状口縁を呈し、102は内湾の強い口縁部である。

103は底部破片で、103は撚糸文Ｌ、104はＯ段多条ＲＬの縦位施文である。

土製品としては、105～113の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器類は114～141が出土した。

114、115は粗粒の石材を素材として用いたスクレイパーである。

116～118は乳棒状磨製石斧である。117、118は欠損部を使用面として敲石に再利用されている。

119～134は打製石斧である。119～123は短冊形を呈し、いずれも刃部が両刃である。124～134は撥形を呈する。このうち、124、126が片刃、125、127～129、131が両刃である。

135、136は礫器である。

137～139は磨石である。

140が石皿で、141が石皿の破片である。

第40号住居跡（第292～第294図）

Ｐ－12区に位置する。第31、70、71、75号住居跡と重複するが、本住居跡の炉跡が第75号住居跡の壁を壊しているほかは、新旧関係は不明である。

掘り込みがないため、規模、形状とも不明であるが、平面形は検出された柱穴等の配置から、径６ｍ前後の円形を呈するものと思われる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は18本検出されたが、いずれも浅く主柱穴を特定できない。

炉跡は５個のチャート系の礫を長方形状に並べた石囲炉である。礫の一部を欠くが、主軸は北東方向に細長い形状のようである。掘り込みは22cm程あるが、使用時には２層上面が炉床として機能していたと思われる。但し、覆土に焼土・炭化物の混入は少なく、炉床面にも被熱の痕跡は少ない。

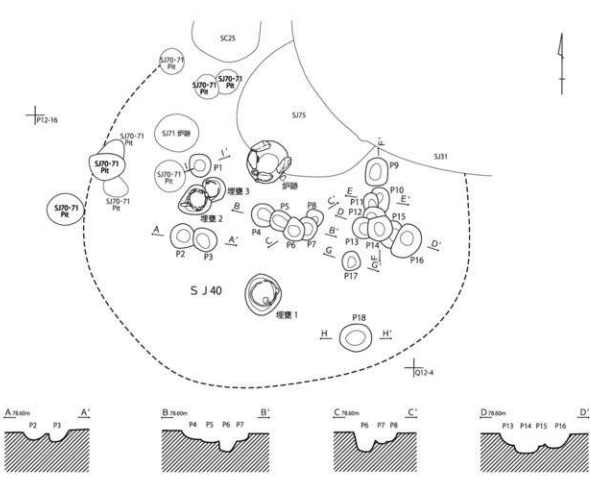
埋甕は３基検出された。いずれも浅い掘り込みに深鉢の上半部を逆位に埋設するものである。炉との位置関係から、埋甕２、３は本住居跡に伴う可能性があるものの、埋甕１は伴わない可能性が高いと思われる。炉と埋甕の位置関係で、２ｍ以内に設置する場合もあり、柄鏡形住居跡ではなくても、柄鏡形住居跡の内帯の範囲内に埋甕を有する事例はある。しかし、逆位に埋設する点で問題が残る。

住居跡は不明な部分が多いが、およそ加曽利ＥⅢ式期の新しい段階の所産と思われる。

４はＰ３、５はＰ８、６はＰ10からの出土である。

１は内湾する口縁が開くキャリパー形深鉢形土器で、口縁部に凹線状の太沈線で区画する楕円区画文を重層的に入り組ませるモチーフ構成を施文している。胴部は幅広の磨消懸垂文を垂下するが、２本沈線間を無文にする磨消懸垂文と、３本沈線間を無文にするという系譜のことなる磨消懸垂文を交互に施文している。地文は口縁部で単節ＲＬの横位施文、胴部で縦位施文するが、胴部の一部のみ、横位施文部分を意図的に残しているようである。

２は４単位の波状口縁を呈するキャリパー形深鉢形土器で、頸部から口縁部にかけて現存する。



第292図　第40号住居跡（1）

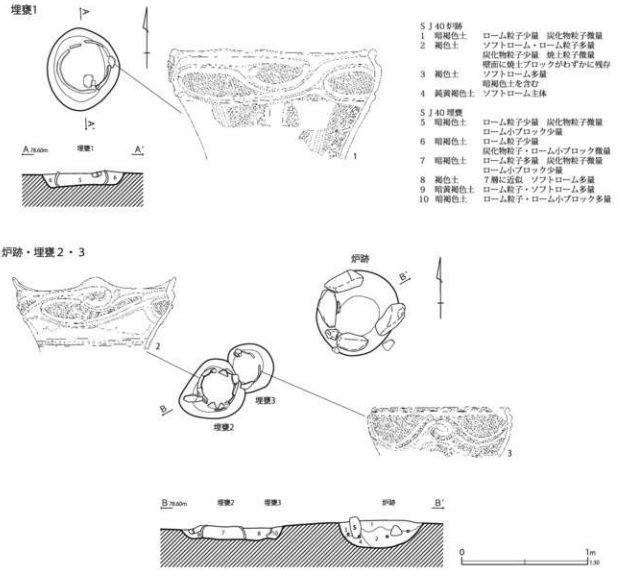
第120表　第40号住居跡柱穴計測表（第292図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	37.0	17.0	P 2	37.0	13.0	P 3	39.0	18.0	P 4	37.0	13.0	P 5	30.0	17.0
P 6	38.0	31.0	P 7	36.0	18.0	P 8	27.0	14.0	P 9	43.0	12.0	P 10	(32.0)	9.0
P 11	(21.0)	11.0	P 12	38.0	9.0	P 13	35.0	18.0	P 14	41.0	32.0	P 15	43.0	18.0
P 16	54.0	22.0	P 17	30.0	13.0	P 18	50.0	15.0						

第121表　第40号住居跡出土復元土器観察表（第294図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
294-1	[23.4]	42.4	-	-	30%
2	[14.2]	34.2	-	-	30%
294-3	[10.4]	(28.4)	-	-	30%

口縁部は渦巻文から変化した楕円形区画文と、それから連なる区画文が変形した楕円区画文を、波状部の下で重層的に入り組ませる構成をとる。波状部のそれぞれの楕円区画文の右肩には、円形の刺突文を１個ずつ施文している。口縁部モチーフと胴部の区画文との間に無文部を形成しているが、頸部無文帯を継承しているというよりも、胴部文様帯からの明らかな分離であることを示している



第293図　第40号住居跡（2）

ものと思われる。

3は内湾する口縁部が開く器形で、口縁部文様帯の上端を沈線で区画し、口縁部に2本沈線の4単位の波状文を施文するものと思われる。波状部下には渦巻文を施文し、単位数の少ない繋弧文状のモチーフ構成になっている。胴部は不明瞭であるが逆「U」字状懸垂文が垂下するものと思われ、地文と磨消部分の関係が不明瞭になっているものと思われる。地文は口縁部では充填施文である単節ＲＬの横位施文、胴部で単節ＲＬの縦位施文である。

石器は出土していない。

第41・42・50号住居跡（第295～第312図）

Ｍ－11・12区に位置する。Ｍ－12区東側の調査区際に第42号住居跡が位置し、その西側に第41号住居跡、間に挟まれて第50号住居跡の3軒が重複しながら存在する。3軒のうち、第42号住居跡が最も新しく、次いで第41号住居跡が古く、第50号住居跡が最も古い。

第41号住居跡

平面形は3.65m程のほぼ円形の住居跡で、床面までの掘り込みは0.45cmと深い。主軸はほぼ南北方向と思われる。壁は床面から緩やかに立ち上がる。